征途乃侵(四)星。得(五)使諸(六)病入。(一)』
鄙(七)人寡道氣。在(八)困無獨立。
假(九)裝逐徒(一〇)旅。達曙凌險(一一)澀。
寒日出霧遲。清江轉(一二)山急。
僕(一三)夫行不進。駑馬若維(一四)縶。』
汀洲稍(一五)疎散。風景開快(一六)悒。
空慰所(一七)尚懷。終非曩(一八)遊(一九)集。
衰顏偶一破。勝事難屢(二〇)挹。
茫(二一)然阮籍途。更灑楊(二二)朱泣。』

征途乃ち星を侵す、諸病をして入らしむるを得むや。
鄙人、道氣寡し、困に在つて獨立すること無し。
假裝、徒旅を逐ふ、曙に達して險澀を凌ぐ。
寒日、霧を出づること遲く、清江、山に轉ずること急なり。
僕夫行けども進まず、駑馬維れ縶ぐが若し。
汀洲稍く疎散なり、風景、快悒たるを開く。
空しく尚ぶ所の懷を慰む、終に曩の遊集に非ず。
衰顏偶〻一たび破る、勝事屢〻挹み難し。
茫然たり阮籍の途、更に楊朱の泣を灑ぐ。

【字解】〔一〕早發　あさはやく出發すること、此の二字は詩の本題なり、射洪縣南途中作はその說明に添へたる句なり。〔二〕貧　壯時の强健なるにおひつく。〔四〕侵星　星光ををかすとは非常にはやく出發すること、此句は下句と連絡してみるべし。〔五〕得　豈可レ得の義、反語にみる、元來「豈可得」の三字が「征途」の上にあると同じ意なり。〔六〕諸病入　さまざまの病氣がからだにはひつてくる。〔七〕鄙人　いやしきもの、自己を謙遜していふ。道氣仙人の氣象、仙人は險路などにたへる力を有す。〔八〕在困　困は困難。〔九〕假裝　假は始なり、裝を始むるとはあさ旅行の用意をすること。〔一〇〕徒旅　たびのなかま。〔一一〕險澀　道路のなんぎなところ。〔一二〕轉山急　山に隨つて急に屈曲する。〔一三〕僕夫　めしつかひ。〔一四〕維縶　縶は「つなぐ」、維はことばなり。〔一五〕疎散　からりとひらける。〔一六〕快悒　むねのふさぐこと。〔一七〕所尚懷　尚は好尚、山水をみるは自己の平生このみたつとぶ所なり。〔一八〕曩　さきの日。〔一九〕遊集　同志とつどひあそぶ。〔二〇〕頗、破　かほのしわをのばす、につこりする。〔二一〕勝事　よき景色。〔二二〕挹　とる、我がものにすること。〔二三〕茫然　前程不明のさま。〔二四〕阮籍途　窮途をいふ、已に屢〻みゆ。〔二五〕楊朱泣　楊朱、歧路を見、その南すべく北すべきによりて泣きたりとの話「淮南子」にみゆ。

【題義】あさはやく出發せしことをのぶ。これは射洪縣の南の途中での作である。射洪から又その南の通泉縣へゆく途上の作。生活の計をなすためにでかけしなるべし。時は寶應元年十一月。

【詩意】としよりになりかけて貧乏を心配するため旅をする、どうして筋力が若い時分のやうになれるものか。やせがまんをして星の光を侵して途にでださうものならいろいろの病氣がはひつてくるだらう、そんなことはできぬ。』　自分は仙人の氣象をもたず、困難に在つてひとりだちはできぬ、だからあさのたび仕度をしても途づれのあとをおひ曙になつてからなんぎなみちをとほる。さむぞらの太陽はおそく霧のなかから出で、清らかな江水は山にくつついて急に折れまがる。しもべはあるくけれども前へはすすまず、やくざ馬はつないであるかの樣にちつともあるかぬ。』　汀の洲があるところへくるとしだいにそこらがからりとした樣でその風景がふさがつたむねをすけてくれる。しかしいたづらに平生からしたうてをる心をなぐさめるのみでたうてい往年のあそびつどひとはおなじでない。このけしきで偶然ひとたびは衰へた顏のしわをのばすけれども、それもこの佳景さへそんなにたびた

び我がものとすることはできぬのである。ただ茫然と阮籍の如き窮途に立つてそのうへに方向に迷ふ所の楊朱の涙をそそぐのである。』

通泉驛。南去通泉縣十五里山水作

通泉驛、南のかた通泉縣を去ること十五里の山水の作

溪行衣自濕。亭午氣始散。
冬溫蚊蚋集。人遠鳧鴨亂。
登頓生曾陰。敧傾出高岸。』
驛樓衰柳側。縣郭輕煙畔。
一川何綺麗。盡日窮壯觀。
山色遠寂寞。江光夕滋漫。』
傷時愧孔父。去國同王粲。
我生苦飄零。所歷有嗟嘆。』

溪行衣自ら濕ふ、亭午、氣始めて散ず。
冬溫にして蚊蚋集まり、人遠くして鳧鴨亂る。
登頓、曾陰生ず、敧傾、高岸出づ。』
驛樓、衰柳の側、縣郭、輕煙の畔。
一川何ぞ綺麗なる、盡日、壯觀を窮む。
山色遠く寂寞、江光夕に滋漫。』
傷時、孔父に愧ぢ、去國、王粲に同じ。
我が生、飄零に苦しむ、歷る所嗟嘆有り。』

【字解】【一】通泉驛　梓州の東南百三十里、射洪縣よりは東南七十里にあり、通泉驛の三字が本詩の題にして「南去」云云は其の説明にそへたることばなり。【二】南去通泉縣十五里山水　通泉縣の北十五里のところの山水をいふ、沈家坑といふ處なりと。まだ縣城へつかぬ前のことなり。【三】溪行　たにがはにそうてゆく。【四】亭午　正午。【五】氣　雲氣。【六】蚊蚋　「か」「こばへ」。【七】登頓　のぼつたり、やすんだり。【八】曾陰　曾は層に同じ、かさなれるくもり。【九】敧傾　かたむく。【一〇】一川　浩江なり。【一一】寂寞　ひつそり、みえなくなるをいふ。【一二】滋漫　ゆふばえの水上にましあふれること。【一三】傷時　時世をいたむ。【一四】孔父　孔子をいふ。【一五】去國　故國をはなれる。【一六】王粲　魏の王粲、都を去て南方荆州に至り、故國をおもひ登樓賦をつくる。【一七】所歷　經過するところ。

【題義】射洪から通泉縣の方へ赴くとき、縣のてまへ十里ばかりの通泉驛で山水をみてつくつた詩。寶應元年十一月の作。

【詩意】たにがはにそうてゆくと衣がひとりでにぬれる、それがひるごろになるとやつと雲氣が散つてしまつた。冬ではあるがあたたかいので蚊だの蚋だのがたかつてくる、まだ人がちかづかぬのに鳧鴨などがみだれたつ。のぼつたりくだつたりするうちにあついくもりができ、かたむいてあぶなげに高い岸が突出たりしてゐる。』　やがて縣の郭がうすい煙のほとりにみえ、驛樓がげんきのない柳のきのそばにある。川のながめはなんでかほどに綺麗であるか、一日ぢう壯觀をあかずみきはめる。そのうちにゆふばえだけは江面にひろがり遠方の山の色はあるかなきかにきえゆく。』　自分は時世を傷むことは孔夫子には及ばぬので愧ぢるが、故國を去つて悲みを抱くことは王粲と同じである。自分の

生活は飄泊零落にこまつてゐるので經過するところどこでもなげきをおこすのである。』

過郭代公故宅

郭代公が故宅に過る

豪俊初未遇。其迹或脫略。
代公尉通泉。放意何自若。
及夫登衮冕。直氣森噴薄。
磊落見異人。豈伊常情度。』
定策神龍後。宮中翕清廓。
俄頃辨尊親。指揮存顧託。
羣公有慙色。王室無削弱。
迴出名臣上。丹青照臺閣。
我行得遺跡。池館皆疏鑿。
壯公臨事斷。顧步涕橫落。

豪俊初め未だ遇はず、其の迹或は脫略せり。
代公、通泉に尉たり、意を放にする何ぞ自若たる。
夫の衮冕に登るに及んで、直氣、森として噴薄す。
磊落、異人を見る、豈伊常情もて度らむや。』
策を定めて神龍の後、宮中、翕として清廓す。
俄頃、尊親を辨じ、指揮、顧託を存す。
羣公、慙色有り、王室、削弱無し。
迴に名臣の上に出づ、丹青、臺閣を照す。』
我行いて遺跡を得、池館皆疏鑿せらる。
公が事に臨みて斷せしを壯とす、顧步して涕橫に落つ。

精魄凜如在。所歷終蕭索。
高詠寶劒篇。神交付冥漠。』

精魄、凜として在すが如し、歷る所終に蕭索たり。
高く詠ず寶劒の篇、神交、冥漠に付す。』

【字解】【一】郭代公　郭震、字は元振、魏州貴鄉の人、玄宗の朝、代國公に封ぜらる。【二】故宅　これは通泉縣の尉たりしときの居宅をいふ。【三】豪俊　すぐれた人物、郭震をさす。【四】未遇　時世にであはぬ。【五】迹　行のあと。【六】脫略　小事を簡略にして心にとめぬ、この脫略は次の放意とおなじことをさす。【七】代公　震をさす。【八】尉　縣令の次ぎの官。【九】放意　きままにする、震が尉たりしとき私錢を鑄、又は民財を奪ひて四方を濟ひなどし、任俠にして氣を使ひ同類千人萬人に至るといへり。【一〇】自若　平氣なさま。【一一】登衮冕　宰相の地位にのぼること、衮は卷き龍の模樣あるきもの、冕はかんむりなり、かかる禮服をきる身分となること、震は先天二年に兵部尙書を以て同中書門下三品となり、政事をあづかりきく。【一二】直氣　正直の意氣。【一三】森　嚴肅なさま。【一四】噴薄　ふきだす、先天二年に震政事をあづかりきしとき太平公主、竇懷貞と黨を結び玄宗(時に太子)を廢せんと謀る、睿宗猶豫して決せず、ただ震廷にて爭ひ詔を受けず。【一五】磊落　不羣の貌。【一六】異人　非凡の人。【一七】伊　これ。【一八】常情度　なみなみのこころではかる。【一九】定策神龍後宮中翕清廓　此句舊解に　定策神龍後、宮中翕清廓　とよませたり、而して定策の事實が先天以後に在りて事實とあはぬゆゑ神龍といふはさかのぼりて禍根の胚胎せしときを記したるなりとせり。これは無理な解なり。此句の形はかくあれども作者の意は「定策」二字にて句、「神龍後宮中翕清廓」の八字にて句、とするつもりなりと釋すべきなり、定策が先天に在ることは動かさずして可なり。定策とは玄宗を廢せんとしたるを玄宗を擁立するはかりごとを定めたるをいふ、神龍は中宗の年號にして西紀七〇五、七〇六なり、先天は睿宗の年號にして西紀七一二、七一三なり、宮中は奥向きのこと、當時中宗の皇后韋氏、太平公主、等のさわぎありて奥向きみだれたり、翕はあつまるかたち、すつかりといふこと、清廓とはさつぱりと掃除してきよめること。【二〇】俄頃　しばらくのうちに。【二一】辨尊親　尊と親とについて區別する。君臣の關係では玄宗が尊位を得、父子の關係では玄宗が親子相傳して帝位をふむに至りしことをさす。【二二】指揮　さしづする。【二三】顧託　睿

宗の御依託。玄宗の太平公主寶懷貞を誅するや宮城大に亂る、睿宗承天門に出でて變を觀る、諸相みな外省にかくる、震ひとり侍す、睿宗、玄宗の兵至るときき樓下に投ぜんとす、震之を扶けてあつく勸めて阻止す、此等必しも睿宗の依託に由るにあらざれども辭をかざりていへるなり。【二四】 羣公　他の權臣等。【二五】 丹青照臺閣　丹青は畫像、臺閣のうへに像をかかぐるにより像が之を照すといふ、郭震は玄宗の廟に配饗せらる、ただ像をゑがかれしやは不明、舊解は之を震に屬せしめたるも或は名臣へかかるものならんも知れず、然らば「臺閣に像をゑがかれてゐる名臣の上にいづ」の義となるなり。今舊解を用ひおく。【二六】 疏鑿　ほりわりをつくること。【二七】 壯　壯なりとして敬慕するなり。【二八】 臨事斷　大事に當つてよく決斷せしこと、玄宗を擁立せしことをさす。【二九】 顧步　左右をかへりみながらあるく。【三〇】 所歷　自己のとほりしところ、卽ちこの池館のあとをさす。【三一】 蕭索　さびしきさま。【三二】 寶劒篇　震が通泉の尉たりし當時の作なり、震則天武后にめしだされしときこの篇を上る、武后數十本を寫して遍く學士に賜はしめしといふ。原文別にのちに載す。【三三】 神交　精神と精神との交り。【三四】 冥漠　天、幽冥界をいふ。

【題義】 通泉縣にある代國公郭震が故宅を見まひてつくれる詩。寶應元年十一月の作。

【詩意】 豪俊とよばるるほどの人も初め時世にであはぬときは其の行迹は小事にかかはらぬことがあるものだ。我が代國公郭震は通泉縣に尉であつたときどうしてあんなに平氣でわがままをやつてゐたか。それがかの衰冕の服を身につける樣な地位にのぼるや正直の氣が嚴然としてはきだされた、じつに磊落たる非常の人物たるを見るので、これはとてもなみなみのこころではかれるわけのものではない。』　公が先天の時に大策を定めてから神龍以後の宮中の亂脈はすつかりひとまとめに掃除して清められた。公は咄嗟の間に玄宗の尊にして且つ親たることを辨別し、大事をさしづして睿宗の依託を存立した。之にくらべると他の羣臣は慙づるの色がある。公があつたから王室も削りよわめらるることなくなつた。だから公ははるかに名臣以上にあつて、その像は臺閣にかがやいてゐる。（或は公は臺閣に畫がかれてゐる名臣のうへにある。）』　自分はいまここをあるいて公の遺跡を得たが、もとの池や館のところはみなほりわりになつてゐる。自分は公がよく大事にのぞんで決斷したことを壯なりとして、このさまをみてはあるきながら涕がよこさまに落ちるのである。公のたましひは凜然としてなほ存在してゐるかのごとくであるが、既に經過する所はけつきよくかくさびしいやうすである。自分はただ公の作である寶劒篇を高く詠じてこころどうしの交りは之を天に付するのみである。』

寶劒篇

郭　震

君不見昆吾鐵冶飛炎煙。紅光紫氣俱赫然。良工鍛鍊凡幾年。鑄作寶劍名龍泉。
龍泉顏色如霜雪。良工咨嗟歎奇絕。瑠璃玉匣吐蓮花。錯鏤金環生明月。正逢
天下無風塵。幸得周防君子身。精光黯黯青蛇色。文章片片綠龜鱗。非直結交
遊俠子。亦曾親近英雄人。何言中路遭棄捐。零落飄淪古獄邊。雖復沈埋無所
用。猶能夜夜氣衝天。

觀薛稷少保書畫壁

薛稷少保が書畫の壁を觀る

少保有古風。得之陝郊篇。

惜哉功名忤。(五)但見書畫傳。　惜しい哉功名忤ふ、但見る書畫の傳はるを。
我遊梓(六)州東。遺跡涪(七)水邊。　我、梓州の東に遊ぶ、遺跡、涪水の邊。
畫藏青蓮界(八)。書入金牓(九)懸。』　畫は青蓮界に藏せられ、書は金牓に入りて懸る。』
仰看垂露(一〇)姿。不崩亦不騫(一一)。　仰ぎ看る垂露の姿、崩れず亦騫けず。
鬱鬱(一二)三大字。蛟龍(一三)岌相纏。　鬱鬱たり三大字、蛟龍、岌として相纏ふ。
又揮(一五)西方變(一六)。發(一七)地扶(一八)屋椽(一九)。　又西方の變を揮ふ、地より發りて屋椽を扶く。
慘澹(二〇)壁飛動。到今色未塡(二一)。』　慘澹として壁、飛動す、今に到つて色未だ塡しからず。』
此行疊(二二)壯觀(二三)。郭薛俱才賢。　此の行、壯觀を疊す、郭薛は俱に才賢なり。
不知百載後。誰復來通泉。』　知らず百載の後、誰か復通泉に來らむ。』

【字解】〔一〕薛稷少保　薛稷、字は嗣通、收が從子、古を好みて博雅、外祖魏徵が家に虞世南・褚遂良の墨蹟を藏す、稷之を學び遂に書を以て天下に名あり、畫も亦絶品なり。睿宗の時黄門侍郎に遷り、太子少保を歴たり、たまたま竇懐貞、太平公主に附きし故を以て誅せらる、稷は其の謀を知れりといふに坐せられて萬年縣の獄に於て死を賜はれり。稷は郭震、趙彦昭と同じく太學に遊びしことあり、蓋し郭震の關係によりて通泉縣に稷の書畫あるなり。〔二〕書畫壁　壁書と壁畫となり。〔三〕古風　五言古詩をいふ。〔四〕陜郊篇　稷に秋日還京陜西十里作あり、曰く、驅車越陜郊、北顧臨大河、此行見鄉邑、秋風水揺波、西望咸陽途、日暮憂思多、傳巖既紆鬱、首山亦嵯峨、操築無昔老、采薇有遺歌、客遊節向換、人生知幾何、と。驅車越陜郊の句あるによりて之を陜郊篇といへり。〔五〕忤　違ひ戻るなり。〔六〕梓州東　東は東南、通泉をさす。〔七〕涪水　涪江。〔八〕青蓮界　佛寺をいふ。〔九〕金牓　金字のかんばん、額なるべし。〔一〇〕垂露姿　書のさま。〔一一〕騫　虧ける。〔一二〕鬱鬱　さかんなるさま。〔一三〕三大字　通泉縣慶善寺に薛稷の書せる「慧普寺」の楷書の三大字あり、字の徑三尺ばかりなりといふ。〔一四〕岌　山たかきさま。〔一五〕揮　筆をふるひてかく。〔一六〕西方變　西方諸佛の變相。〔一七〕發地　平地よりおこりて。〔一八〕扶屋椽　やれのたるきに人手にたすけられてのぼるほどの所に達するをいふ。〔一九〕慘澹　畫者の心を苦しめしさま。〔二〇〕塡　翼と同じ、「久し」となり。〔二一〕此行　このたびの旅行。〔二二〕疊　かさなること。〔二三〕郭薛　郭震、薛稷。

【題義】通泉縣の慧普寺にある太子少保薛稷の壁書と壁畫とをみてよめる詩。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】薛少保には五言の古詩がある、自分はそれを驅車越陜郊といふ詩篇に於て之を得た。かかる文事に秀でた人であるのに功名の念をとげることができず、ただその書や畫が傳へらるるのを見るのである。自分は梓州の東南に遊び、少保の遺跡を涪江のほとりで得た。畫は佛寺に藏せられ、書は寺の金牓に於てかかげられてゐる。』　仰いでみると露を垂れた樣な文字の姿がくづれもかけもせず、三個の大字があたかも蛟龍の勢たかくあひさつはつてをる樣である。また西方諸佛の變相をも揮毫してあるがそれは平地から屋根のたるきのうへまでつづいてゐる。この畫者がいかに苦心したか壁が飛動してゐる樣で、今日にいたるまでその著色がふるぼけずにをる。』　自分のこのたびの旅行にはいくつもの壯觀がかさなつた、すなはち郭震といひ薛稷といひともに才あり賢なる人である。知らず百

年の後にははたしてだれがこの通泉の地に來るであらうか。二人に恥ぢぬ人物がくるかどうか。』

通泉縣署壁後薛少保畫鶴

薛公十一鶴。皆寫青田眞。
畫色久欲盡。蒼然猶出塵。』
低昂各有意。磊落如長人。
佳此志氣遠。豈惟粉墨新。
萬里不以力。羣遊森會神。
威遲白鳳態。非是倉鶻隣。』
高堂未傾覆。常得慰嘉賓。
曝露墻壁外。終嗟風雨頻。
赤霄有眞骨。恥飲洿池津。
冥冥任所往。脫略誰能馴。』

通泉縣の署壁の後の薛少保の畫鶴

薛公の十一鶴、皆青田の眞を寫す。
畫色久しくして盡きむと欲す、蒼然猶塵を出づ。』
低昂各〻意有り、磊落、長人の如し。
此の志氣の遠きを佳とす、豈惟粉墨の新なるのみならむや。
萬里、力を以てせず、羣遊、森として神を會す。
威遲たり白鳳の態、是れ倉鶻の隣に非ず。』
高堂未だ傾覆せず、常に嘉賓を慰むることを得。
墻壁の外に曝露す、終に嗟す風雨の頻なるを。
赤霄、眞骨有り、洿池の津に飲むを恥づ。
冥冥、往く所に任す、脫略、誰か能く馴れむ。』

【字解】【一】署壁　縣の役所のかべ。【二】薛少保畫鶴　薛稷は花鳥人物雜畫を善くし、鶴を畫くことによりて名を知らる。【三】十一鶴　壁にある鶴の數をあぐ。【四】青田　浙江省にある縣の名、鶴の產地なり。【五】蒼然　すすけてぼんやりとした貌。【六】田塵　塵俗から超越してゐる。【七】低昂　つるの伏したりのびあがつたりするさま。【八】磊落　不羣のさま。【九】長人　せのたかい人。【一〇】佳　よしとして賞する。【一一】志氣遠　鶴のこころもちの塵俗からとほくはなれてゐること。【一二】粉墨　ごふん、すみ色。【一三】萬里　卽ち上句の志氣遠の遠の字の說明なり、志氣の萬里の遠きにあるさま、老鶴萬里心などあるも同じ。【一四】力　筆さきの形體的の力。【一五】羣遊　つるのむれあそぶさま。【一六】森　嚴然羅列するさま。【一七】會神　精神を會得する、會の字「あつむる」義にあらずして領會する義ならん。【一八】威遲　のつそりとしたさまをいふならん。【一九】倉鶻　黃鸝留（てうせんうぐひすの類）。【一〇】高堂　縣署をいふ。【一一】曝露　さらし、あらはす。【一二】赤霄　赤色のあかぞら、赤色は金霞の色を帶ぶるをいふ。【一三】眞骨　まことの鶴をいふ。【一四】洿池　たまり水の池。【一五】津　わたりばをいふ、但し、ここは單に水邊をさす。【一六】冥冥　雲ふかきところをいふ。【一七】脫略　衆鳥に頓著せぬをいふ。【一八】馴　なれちかづく、眞骨四句は暗に自己を比したり。

【題義】通泉縣の役所の壁の背面に薛稷のかいた鶴があるのを觀てよんだ詩。前詩と同時の作。

【詩意】薛少保がかいた十一匹の鶴、それはみな青田の鶴の眞相をうつしてある、畫の色は年をへたので無くなりかけてゐるが、はつきりせぬながら塵俗を超越してゐる。』　うつ伏したのものびあがつたのもそれぞれ意があるし、磊落羣せずしてせのたかい人間の樣なのもある。自分はこの畫鶴のこころもちの塵俗から遠くはなれてゐるのを佳しとしてめでるのである、ただ胡粉や墨色の新しいのをほめるわけではない。萬里の遠き心をもつた趣は力づくでかいてはゐないし、たくさんのなかまがむ

れあそんでゐる樣子はそれぞれその精神をよくのみこんでかかれてある。これはおほやうな白い鳳凰といつた樣な態であつて、倉鵰などの親類すぢではないのである。』　いまこの縣のざしきは傾覆もしないからここでお客を會合したりするときこの畫でそれらの人たちの心を慰めることができるが、壁の外にかかる名畫をさらしておくといふは、つまりはあめ風がしきりにやつてきてこはしてしまひはせぬかとなげかざるを得ぬ。畫鶴をみて更に感ずる所は、ここにはほんものの鶴が赤氣の横はるあをぞらに居る、この鶴はたまり水の池のほとりなどに水を飲むことを恥としてをる、だから雲中の奥ふかくくらいところにかつてにゆかうとしてゐる、そこへいつてしまへば羣鳥からはなれてしまふのでだれがまた之に近づきなれることができようぞ。』

陪王侍御宴通泉東山野亭

王侍御に陪して通泉の東山の野亭に宴す

江水東流去。清樽日復斜。
異方同宴賞。何處是京華。
亭景臨山水。村煙對浦沙。
狂歌遇形勝。得醉卽爲家。

江水、東流し去る、清樽日復斜なり。
異方同じく宴賞す、何の處か是れ京華ぞ。
亭景に山水に臨み、村煙に浦沙に對す。
狂歌、形勝に遇ふ、醉ふことを得れば卽ち家と爲す。

【字解】【一】王侍御　前に王侍御論あり、これは果して王論なるや否やを知らず。【二】江水　涪江。【三】異方　他鄉。【四】宴賞　さかもりをし、風景を賞美する。【五】京華　みやこ。【六】亭景　景は影に同じ、ゆふがた亭のかげの地上におつるころの意。【七】形勝　風景のすぐれしところ。

【題義】王侍御のともをして通泉縣の東山の野亭に宴した詩。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】涪江の水は東に流れ去る、清樽のうへに夕日がはやかたむきだした。他鄉とはいひかく宴賞を同じくしてをれば京華はどこだらうとかまふことはない。日かたむきて亭影の生ずるころ、この山水に臨み、村煙の起るをみつつ浦上の沙に對してをる。かかる佳景にであうては自分は狂歌を發するものであり、苟も醉ふことができればすなはちそこをわが故鄉の家とかんがへるのである。

陪王侍御同登東山最高頂宴。姚通泉晚攜酒泛江

王侍御に陪して同じく東山の最高頂に登り宴す。姚通泉晚に酒を攜へて江に泛ぶ

姚江美政誰與儔。
不減昔時陳太丘。
邑中上客有杜史。
多暇日陪聰馬遊。

姚江の美政誰か與に儔せむ、
減ぜず昔時の陳太丘。
邑中の上客杜史有り、
多暇日に聰馬の遊に陪す。

【字解】【一】王侍御　前詩の王と同人なるべし。【二】東山　通泉の東山、前詩のそれと同じ。【三】姚通泉　通泉縣の縣令姚某。【四】美政　りつぱな政治。【五】誰與儔　儔は「たぐひ」なり、だれが姚公と

東山高頂羅珍羞。(一二)(一三)
下顧城郭銷我憂。
清江白日落欲盡。
復攜美人登綵舟。(一四)
笛聲憤怨哀中流。
妙舞逶迤夜未休。(一五)
燈前往往大魚出。
聽曲低昂如有求。(一六)(一七)
三更風起寒浪湧。(一八)
取樂喧呼覺船重。(一九)
滿空星河光破碎。(二〇)
四座賓客色不動。(二一)
請公臨深莫相違。(二二)(二三)(二四)

東山の高頂に珍羞を羅ぬ、
下城郭を顧みて我が憂を銷す。
清江白日、落ちて盡きむと欲す、
復美人を攜へて綵舟に登る。
笛聲憤怨、中流に哀し、
妙舞逶迤として夜も未だ休まず。
燈前、往往、大魚出づ、
曲を聽き低昂求むる有るが如し。
三更風起つて寒浪湧く、
樂みを取つて喧呼し船の重きを覺ゆ。
滿空の星河光り破碎す、
四座の賓客色動かず。
請ふ公深きに臨む相違ふこと莫れ、

かたをならぶるものぞ。【六】陳太丘　後漢の陳寔なり、嘗て聞喜（縣名）の長となり、また太丘の長となり、よく管内を治む。【七】邑　縣をいふ。【八】柱史　柱下史の略、御史の官をいふ、卽ち王侍御。【九】多暇　縣治のうへに仕事なくてひま多し。【一〇】日陪　日は日日。【一一】驄馬遊　驄馬は桓典が故事、屢〻前にみゆ、驄馬遊は王侍御のあそびをいふ。【一二】羅　羅列。【一三】珍羞　めづらしきお膳のさかな。【一四】綵舟　さいしきした舟。【一五】逶迤　うねうねするさま。【一六】曲　歌曲。【一七】低昂　浮沈するさま。【一八】三更　夜半。【一九】船重　船の進まざるさま。【二〇】星河　ほし、あまのがは。【二一】色不動　顏色をうごかさぬ、

迴船罷酒上馬歸。
人生歡會豈有極。
無使霜露霑人衣。(二五)

船を迴らし酒を罷め馬に上つて歸らむ。
人生歡會豈極り有らむや、
霜露をして人衣を霑さしむること無れ。

深云云の戒めに違ふことなかれ。【二五】霜露霑人衣　あまりに夜ぶかをいふ。「れ。」

【題義】王侍御のともをしてともに東山のてつぺんへあがつてさかもりをした。ところが晩になつて通泉縣令の姚氏が酒をたづさへてさらに涪江に舟をうかべて遊びをした。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】姚君の政治のりつぱなことはだれも肩をならべるものがない。昔しの太丘の令陳寔にもおとらぬほどである。それゆゑに縣の上客としていま王侍御がをらるるが、姚君はひまが多いから毎日王侍御の遊びのともをしてをられる。』　先づ東山の絕頂でごちそうをならべ、縣の城郭をみおろして自分の憂さばらしをし、涪江に日が落ちてしまはうとするや、また美人をつれてうつくしくかざつた舟に登つた。笛の聲はいかりうらむがごとく中流であはれな音をだす、美人の妙なる舞すがたはうねうねとして夜になつてもやまぬ。燈の前には時時大きな魚がでて、美人の歌曲をきいてうきつしづみつなにか求むる所あるかの樣子である。』　夜半になると風が吹きおこつて浪がわきだした。ががやが

平氣でかへるけしき無きをいふ、俱氏注に斂容知懼といへるは取らず。【二二】公　姚をさす。【二三】臨深　如臨深淵、如履薄氷の詩の語をさす。【二四】莫相違　臨

陪王侍御同登東山最高頂宴姚通泉晚攜酒泛江

やさわいで樂みをしてゐるので船あしは重きかとおもはれさらに進まない。空はいつぱいに星や天の河がみちてその光が水面におちてくだける、それでも一座のおきやくたちはかへらうとする氣色もない。わたくしはいふ、どうぞ姚公よ古聖人の「臨深」の戒めに違ひたまふな、船をめぐらして酒をやめ、馬にうちのつて歸りませう。人生のおもしろき會合といふものはは てしのないものである。いいほどのところでくぎりをつくべきである。あまりに夜ふかしをして霜や露に人の衣をうるほさせるやうなことをしたまふな。』

漁陽

漁陽突騎猶精鋭。
赫赫雍王都節制。
猛將翻然恐後時。
本朝不入非高計。
祿山北築雄武城。
舊防敗走歸其營。

漁陽の突騎は猶精鋭なるも、
赫赫たる雍王都て節制す。
猛將翻然として時に後れむことを恐る、
本朝に入らざるは高計に非ず。
祿山北のかた築く雄武城、
舊、敗走して其の營に歸るを防ぐ。

【字解】〔一〕漁陽　今直隷順天府の地方、安祿山の根據地。〔二〕突騎　突擊する騎兵。〔三〕赫赫　武德のかがやくさま。〔四〕雍王　寶應元年九月魯王适、改めて雍王に封ぜられ、十月天下兵馬元帥に任ぜられ、河北・朔方・及び諸道の行營を統ぶ、雍王は後に德宗となりし人。〔五〕都節制　一般にきりもりする權をにぎる。〔六〕猛將　賊軍の猛將なり、河北の薛嵩は四州を以て來り降り、張忠志は五州を以て來り降る。〔七〕翻然　態度をかへるさま。〔八〕後時　時期におくれる。〔九〕本朝　朝廷。〔一〇〕入　歸順すること。〔一一〕高計　上等のはかりごと。〔一二〕雄武城　安祿山反きしとき范陽の北に壘をきづき之を雄武城と號せり。〔一三〕防　防護の義。〔一四〕敗走　賊軍味方の敗走。〔一五〕繫書　てがみを箭につなぐ、戰國の時、魯仲連が箭文を燕の聊城に射こみて城を降らしめし故事を用ふ。〔一六〕請問　問の字必ずしも質問する義ならず、むしろ問告する義なるべし。〔一七〕燕　漁陽地方をさす。〔一八〕者舊　父老たちをさす。〔一九〕十萬兵　官軍の方にてそれほどの多くの兵を擁して賊に向ふ。

繫書請問燕者舊。
今日何須十萬兵。

書を繫けて請ひ問ふ燕の者舊、
今日何ぞ須ひむ十萬の兵。

【題義】雍王が元帥に任ぜられしことをきさて漁陽の平げらるべきみこみあることをおもひて作れる詩。寶應元年冬晩梓州にての作なるべし。

【詩意】漁陽の突騎はまだ精鋭ではあるが、官軍の方では赫赫たる雍王が元帥におなりになつて諸軍の節制を統べられることになつた。それで賊軍の猛將もこれまでの態度をさらりとかへて我がちに降參して時期に後れることを恐れ、朝廷へ歸順せねば上策でないとかんがへだした。』安祿山が北のかた雄武城を築いたときでさへ、それはもとその味方の兵が敗けて營中へもどるときの防護のためだつたのだ。まして祿山がゐなくなり、雍王が元帥になられた今日に於てをや。自分は箭文を以て燕の父老たちに對してつげるが、今日官軍はなんで十萬などの多衆の兵を擁して賊に對する必要があるもの

か。ただちに賊を降參させることになるでござらう。

花底

紫蕚扶千蘂。黄鬚照萬花。
忽疑行暮雨。何事入朝霞。
恐是潘安縣。堪留衛玠車。
深知好顔色。莫作委泥沙。

紫蕚、千蘂を扶け、黄鬚、萬花を照らす。
忽ち疑ふ暮雨に行くかと、何事ぞ朝霞に入る。
恐らくは是れ潘安が縣ならむ、衛玠が車を留むるに堪へ「たり。」
深く知る好顔色なるを、泥沙に委するを作す莫れ。

【字解】【一】花底　梅花のさけるした、これは次の「柳邊」の篇と近き時の作なるべく、「柳邊」の第一句に只道梅花發とあるによつて此篇の花の梅花なることを知る。【二】紫蕚　むらさきの「花のつけね」。【三】蘂　「くわずゐ」。【四】黄鬚　花房内の「しべ」の黄なるもの。【五】行暮雨　花の露にしめりたるさまをいへり。【六】入朝霞　花の日に映じてあざやかなるさまをいふ。行の字入の字は人にかかるなり。【七】潘安縣　晉の潘岳、字は安仁、河陽縣令となり、一縣に花をうう。【八】衛玠車　晉の衛玠、風神秀異、羊車に乘じて市に入るとき、見るもの以て玉人となし、爭うて果物をなげあたへたりといふ。【九】好顔色　花のいろつやのうつくしきをいふ。【一〇】委泥沙　散りおつるをいふ。

【題義】梅花のさきたるしたをとほりてよめり。代宗の廣德元年春梓州にての作。

【詩意】紫色の蕚が多くの花蘂をささへてたすけるかの樣であり、黄粉をもつた「しべ」が多くの花を照らさんばかりである。この花の木の間をとほるとうへから露がおちてくるので暮雨のふるときあるいてゐるのかと疑はれ、またそれがあざやかに日にうつろうてゐるあたりをとほると、なんで自分は朝霞のなかにはひりこんだのかとおもふ。こんな花のあるところをみるとここは潘安仁が治めてゐる縣ではあるまいか。またこんなうつくしい花ばかりあるところなら玉人だとほめそやされた衛玠の乘つてゐる車さへひきとめおいても十分につかはしからう。自分はこの花のいろつやのうつくしいことを深く知つてをる、どうかあたら花を泥や沙にうちちらさせたくはないものである。

柳邊

只道梅花發。那知柳亦新。
枝枝總到地。葉葉自開春。
紫燕時翻翼。黄鸝不露身。
漢南應老盡。霸上遠愁人。

只道ふ梅花發くと、那ぞ知らむ柳も亦新なり。
枝枝總て地に到る、葉葉自ら春に開く。
紫燕時に翼を翻し、黄鸝身を露はさず。
漢南應に老い盡すなるべし、霸上遠く人を愁へしむ。

【字解】【一】柳邊　やなぎの木のほとりにてよめる詩なり。【二】只道　道ふとは「おもふ」ことなり。【三】到地　垂るるをいふ。【四】開春　春にあたりてひらくをいふ。【五】漢南　漢水の南、北周の庾信が枯樹賦に昔年楊柳、依依たり漢南とあるを用ふ、庾信は北にありて南をおもひしなり、作者は之を借りて鄉を思ふ意を寫せり、次の霸上の句と同意に使用す。【六】霸上　霸水のほと

り、長安の東に霸水あり、そのうへに霸橋あり、長安の人、東にゆくものあれば之を送りて霸橋に至り、柳を折りて贈りて別る、柳の多くある處なると且作者の故郷長安附近の事なれば之をいへり。

【題義】柳のほとりにてよめり。前詩「花底」とおなじく代宗の廣德元年春の作なるべし。

【詩意】梅の花がさいたとばかりおもつてゐたところ、いつのまにか柳もあたらしくのびた。枝といふ枝はみんな地面へたれさがり、葉といふ葉はひとりでに春の時節を逐うてひらく。時としては紫色の燕がそのちかくで翼をひるがへしてとび、黄鸝は葉かげにかくれてからだをあらはさぬ。この柳をみるにつけておもひだすが、漢水の南では柳は老いつくしたことだらうし、長安霸水のほとりのそれも今ごろはどんな樣子になつてをるやら遠く自分のうれひのたねになるのである。

聞官軍收河南河北。

劍外忽傳收薊北。
初聞涕淚滿衣裳。
卻看妻子愁何在。
漫卷詩書喜欲狂。
白首放歌須縱酒。
青春作伴好還鄉。
卽從巴峽穿巫峽。
便下襄陽向洛陽。

【原注】余田園在東京。

【字解】【一】收河南河北　寶應元冬十月、僕固懷恩等しばしば賊史朝義が兵を破り進みて東京（洛陽）に克つ、其の將薛嵩、相・衞等の州を以て降り、張志忠は恒・趙等の州を以て降る、次年（卽ち廣德元年）春正月、朝義走りて廣陽に至りて自ら縊る。其の將田承嗣、莫州を以て降り、李懷仙、幽州を以て降る。これ河南・河北を收めし事實なり。【二】劍外　劍門の外、蜀をいふ。【三】薊北　薊州の北、今の直隸順天府地方、賊の根據地。【四】涕淚　感激のなみだ。【五】卻看妻子　此語によれば、この詩を作りしときは妻子此に在るなり、黄鶴の說に公は寶應元年秋に梓州より成都に歸りて家族を迎へて再び梓州に至り、十一月に射洪縣へ往けり、といへり。いつ妻子を迎へとりしやは詩にはみえず、此詩に於て妻子の語あり。【六】漫卷詩書　詩書とは詩經書經、「卷」とは當時の書物は卷きものなればなり、「漫に」とはうれしさのあまり、いいかげんに卷きおさめること。【七】白首　しらがあたま、老年なるをいふ、首を一に日に作る、白日ならばまひるなかをいふ。【八】青春作伴　青春は春の節をいふ、作伴とは妻子一家つれだつをいふ、「青春を伴と作して」とよます說あり、取らず。【九】鄉　洛陽をさしていへり。【一〇】巴峽　四川巴縣にある峽の名。【一一】巫峽　四川巫山縣にある峽の名。【一二】便下　下るの義明ならず、愚見地理上よりみれば「上りて」とあるべしとおもはるるも「下」とあり。强ていはば都にゆくを上ることとし他地にゆくを下るといひしか。ともかく襄陽へゆくことなり。

【題義】官軍が河北・河南の地方を賊軍の手からとりこんだといふしらせを聞いてよんだ詩。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】劍門のそとなる蜀に忽ち官軍が薊北までとつたことが傳へられた。自分ははじめて之をきい

たときはただ感激のなみだが衣裳にいつぱいになつた。一方妻子をみては平生の愁はどこへかとんでしまひ、讀みかけた詩書の巻きものもいいかげんにはふりだして狂ほしいまでにうれしくおもふ。このしらがあたまも、かつてに歌をうたうて、きままに酒をのむがいいし、時候のいい春のことでもあるから一家つれだつていざ故郷にたちかへらう。すぐに巴峽から巫峽をとほりぬけ、それから襄陽をとほつて洛陽の方へ向ふことにしよう。

遠遊

賤子何人記。迷方著處家。賤子何人か記せむ、方に迷ひて著處に家とす。
竹風連野色。江沫擁春沙。竹風に野色連なり、江沫、春沙を擁す。
種藥扶衰病。吟詩解嘆嗟。藥を種ゑて衰病を扶け、詩を吟じて嘆嗟を解く。
似聞胡騎走。失喜問京華。聞くに似たり胡騎走ると、失喜して京華を問ふ。

【字解】〔一〕遠遊　故郷をはなれ遠く他郷に遊びつつあるときのことをのぶ。〔二〕賤子　わたくし、自己を謙遜していふ。〔三〕記　記憶する。〔四〕迷方　方向に迷ふ。〔五〕著處　俗語なり、到る處と同義。〔六〕家　以爲家をいふ。〔七〕竹風　竹林上に風のふきわたること、此二字副詞として用ふ。〔八〕連野色　野色連と同じ、田野の色平らにうちつづくをいふ。〔九〕江沫　江水のあわだつをいふ。〔一〇〕擁　蓋し江汀に水波くだけてあわだち、あわだちの曲線が沙際をいだくがごとくなるをいふものなるべし。〔一一〕解　解き除くをいふ。〔一二〕似聞　「きくがごとくんば」の意、正確でなきことを示す。〔一三〕胡騎走　前年（寶應元年）に賊史朝義戰敗れて北、河を渡り、衞の兵をひきゐて來り戰ひ、又敗走す、これ「胡騎走」の事實なり。〔一四〕失喜　おぼえずあやまつてよろこぶ。〔一五〕問京華　京華は都をいふ、問ふとは都の樣子いかにと人に問ふなり、之を問ふは若し安穩ならば都へかへらんとおもふによる。

【題義】他郷に遠遊する身にて賊軍の敗北をきき喜びのあまり作りたる詩。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】自分のことなどはいまはだれが記憶してゐるものがあらう、自分は方向に迷うて到る處そこを以て自分の家としてゐる。ここでは竹のこずゑに風の吹きわたるところ、遠く田野の色が連接し、江汀に沫起りて曲線を以て沙際を抱くがごとし。また自己は藥草をうゑて之を以て老衰と疾病とを扶け、詩を吟じて之によりてなげきを解き去つてゐる。このごろ聞くが如くんば胡騎はにげたといふことだ。それがためあまりに喜んで京華の樣子いかにと人にとひただしてみる。

春日梓州登樓二首

〔一〕

行路難如此。登樓望欲迷。行路難きこと此の如し、登樓、望迷はむと欲す。

身無卻少壯。跡有但羇栖。
江水流城郭。春風入鼓鼙。
雙雙新燕子。依舊已銜泥。

【字解】〔一〕行路難　人生の途をゆくことのむづかしきこと、樂府に「行路難」と題する篇あり。〔二〕登樓　梓州の城樓にのぼる。〔三〕卻少壯　あともどりして年わかく氣力さかんになる。〔四〕跡　行跡。〔五〕但羇栖　たびのすまひばかりしてゐる。〔六〕江水　涪江の流れ。〔七〕入鼓鼙　太鼓、こつづみの聲中にいりこむ、風が聲を吹くといふ。〔八〕雙雙　雌雄ならびとぶさま。〔九〕新燕子　ことし來たつばめ。〔一〇〕依舊　もとのとほりに、巳引の黃鶴の説の如く寶應元年秋に妻子を梓州へ迎へおきたりとすれば舊とは寶應元年春をさすにあらず、漠然と往年をさしたるなり。〔一一〕銜泥　どろをくはへてきて巢をつくる。

【題義】春の日にあたり梓州に於てその城樓にのぼりて旅の思ひをのべたる詩。廣德元年春梓州にての作。

【詩意】自分の處世難はこれほどである。ここの樓にのぼつてあたりをながめるとどこをながめてよいのやら迷ひさうである。自分のからだはあともどりしてわかくきつくなることは無く、行ひのあとはとみればただたびずまひといふことばかりがある。みれば城郭の方には江の水が流れさり、春の風は兵亂のたいこ、つづみのおとを吹き送つてくる。さうして雌雄して飛ぶことし來た燕がまたもとどほりにはやくも泥をくはへて巢をつくりはじめてゐる。

〔二〕

天畔登樓眼。隨春入故園。
戰場今始定。移柳更能存。
厭蜀交遊冷。思吳勝事繁。
應須理舟楫。長嘯下荆門。

【字解】〔一〕天畔　天涯の意、天のはて。〔二〕登樓眼　城樓にのぼつてながめる所の我が眼。〔三〕隨春　春は春色。〔四〕故園　洛陽をさす。〔五〕戰場今始定　是年の春、史朝義初めて滅し、洛陽は官軍に歸す。〔六〕移柳　うつしうゑたやなぎ、此二字は庾信の哀江南賦に、鈞臺移レ柳、非ニ玉關之可レ望とあるに本づく。〔七〕更能存　反語によむ。〔八〕蜀　成都、梓州、現在客寓の地。〔九〕吳　江蘇浙江地方、作者壯年時に遊歷せし地。〔一〇〕勝事　風景のよきこと。〔一一〕理　整備すること。〔一二〕荆門　山の名、湖北荆州府宜昌縣にあり、三峽を出で道を此山のある所に取りて東南に向ふなり。

【詩意】天のはてで樓にのぼつてながめる我が眼は、つい春景色とともどもなつかしき故郷の方へとはひる。故郷たる洛陽は今やつと賊がにげて平定したが、自分がかつてうつしうゑた柳はどうして生存してゐることができようぞ。自分は蜀の地が人の交際の冷淡なことをいとふ。之に反して吳の地方の風景のよいことの多いことをなつかしくおもふ。だからすべからく舟や楫を整備して、ながくうそぶきながら荆門山を經て江をくだるべきである。

有感五首

感有り　五首

〔一〕

(一)將帥蒙(二)恩澤。兵戈有(三)歲年。
至今勞(四)聖主。何以報(四)皇天。
(五)白骨新交戰。(六)雲臺舊拓(七)邊。
(八)乘槎斷消息。無處覓張騫。

【字解】〔一〕將帥　諸方の將軍節度使等をいふ。〔二〕恩澤　天子のごおん。〔三〕有歲年　久しきにわたるをいふ。〔四〕皇天　天子のこと。〔五〕白骨新交戰　新に交戰せるによりて戰死の者あり白骨となりたるをいふ、これ吐蕃との戰をさす。〔六〕雲臺　漢の時雲臺に功臣をゑがく、唐の太宗の時も亦然り、これ國初の功臣をさす。〔七〕拓邊　邊境の土地を開拓する。〔八〕乘槎　張騫　張騫は漢の武帝の時西域三十六國と交通を開きし人。此人が槎にのりて天の河に到りしといふ話あり。其事は宗懍の歲時記・東方朔内傳等の書に出づといへり、後世出でし話なれども文人往往之を用ふ。此詩は李之芳が事を指していふ、是の時、之芳和蹬のために吐蕃に使し、年を經てひき留められる、故に之を張騫が事をかりて喩となす。

【題義】感ずる所ありて作れる詩。蓋し廣德元年の作。

【詩意】將帥たちは天子の御恩澤を蒙つてゐるが、兵亂は幾年かにわたつてつづいてゐる。さうして今日に至るまで聖天子に御苦勞をかけたてまつつてゐるが、こんなことで彼等はいかなることを以て天恩に報いることができるか。國家創立の當初には雲臺に畫かれた功臣たちは土地を開拓したものであるがいまは近く新らしい交戰があつて味方は死者の白骨となるものを多く出だしつつある。また張騫にも比すべき使者（李之芳）が槎に乘つて遠くでかけたがさつぱりたよりがとだえ、どこに之をさがしもとむればよいのか、さがしどころも無い始末である。

〔二〕

(一)幽薊餘(二)蛇豕。乾坤尚虎狼。
(四)諸侯春不(五)貢。(六)使者日相望。
愼勿(七)呑(八)靑海。無(九)勞(一〇)問越裳。
(一一)大君先息(一二)戰。歸馬華山陽。

【字解】〔一〕幽薊　幽州薊州、今直隸北部、祿山殘黨の根據地。〔二〕蛇豕　「左傳」に封豕長蛇の語あり、封豕は大なるぶた。他國を侵略する者をたとへていへり、ここは賊の降將等をいふ。〔三〕虎狼　吐蕃・羌夷をたとふ。〔四〕諸侯　節度使の或るもの、即ち上の降將等をさす。〔五〕貢　朝廷へみつぎものをたてまつる。〔六〕使者　朝廷へ服從せぬ節度使に向つて歸順をさとしにゆくつかひのもの。〔七〕相望　前後のつかひについでまた後後のつかひが出るゆゑ、使者が前後相のぞむことになる。〔八〕靑海　吐蕃の居る所の地方。〔九〕問　その歸服如何をとふ。〔一〇〕越裳　古代交阯の南にありし國の名、ここは南詔國（今の雲南地方に據れるもの）をさす、南詔は天寶以後唐に叛きて吐蕃につき屢〻邊土の患をなせり。〔一一〕大君先息戰歸馬華山陽　大君は天子をさす、息は

やめること、歸馬華山陽とは「尚書」武成篇に周の武王が天下を平定せし後のことをのべて「歸二馬於華山之陽一」といへるに本く。此二句の解釋種種あり、一に曰く、大君は玄宗をさす、今日の禍を玄宗時にさかのぼりていへるなり、大君先息メテレ戰、歸セシナランニハ二馬華山陽一の義なり、と。是にては上と接せず。二に曰く、大君は代宗かさし、代宗が兵を用ひざるを惜み、辭を婉曲にして之を譏れるなり、大君先息メテ戰、歸シヌ二馬華山陽一の意なり、と。上に勿呑・無問と非戰の意をのべながら用兵せざるか惜むといふは矛盾なり。三に曰く、大君先息メレ戰、歸サム二馬華山陽一とよみ、當時の事を外夷と構ふるものを戒むるなりと、大君は時君（代宗）をさす。この第三の說宜しきかと考ふ、よりて之に從ひてとく。

【題義】此篇は武將兵を擁して割據し居ることの大害あるを歎息せり。

【詩意】幽薊の地方にはまだ封豕長蛇に比すべきわるい武將がをり、天地の間にはまだ虎狼のやうな夷狄がある。すなはち武將である諸侯どもは春にあたつて朝廷へ貢物をたてまつらず、朝廷から彼等に歸順をすすめにゆくお使が日日ひききりなしである。自分の考によれば青海地方を併呑することなどは注意してせぬ樣にすべきであり、越嶲（南詔）などいふ遠隔地のことなどは問ふにおよばぬことである。どうぞ大君におかせられてまつさきに戰爭といふことをおやめになつて周の武王みたいに馬を華山の南におかへしになりたいものである。

〔三〕

洛下舟車入。天中貢賦均。

洛下、舟車入る、天中、貢賦均し。

日聞紅粟腐。寒待翠華春。

日に聞く紅粟の腐するを、寒に翠華の春を待つと。

莫取金湯固。長令宇宙新。

金湯の固めに取ること莫れ、長く宇宙をして新ならしめむ。

不過行儉德。盜賊本王臣。

儉德を行ふに過ぎず、盜賊も本王臣なり。

【字解】【一】洛下　洛陽の地をいふ。【二】舟車入　「史記」に周の成王、召公をして洛邑を營ましめて曰く、此天下之中、四方入貢、道里均焉　と。此篇起二句其意を用ふ、舟車入るとは四方の舟も車もここにいり來るをいふ。【三】天中　上文の天下之中の意、四方からみて中央なりといふこと。【四】貢賦均　貢は各地の土產をたてまつる、賦はわりつけたる租稅をだすこと、均とは上文の道里均焉の意、貢賦をもつてくるに里程が平均した場處にあるといふこと。【五】日聞　作者日日之をきく、聞の字下句までへかかる。【六】紅粟腐　穀物を多く倉にたくはへおくためにそれが腐る、紅粟はもみの米があかく變色すること。【七】寒　春寒なり。【八】翠華春　翠華は天子の旗なり。是の時洛陽へ遷都すべしとの議あり、人人天子の御旗の來りて春色の生ぜんことを待つ。【九】莫取　これより以下は作者の議論なり、そこに取る所の何ものもない、そんなことにいりようはない、の意。【一〇】金湯固　金湯は金城湯池の略、金鐵できづいた城、熱水をためた濠池の義、固は堅固なること、普通ならばかかる防禦物は必要であるが天子の都にはそんなものはいらぬ。【一一】宇宙新　政治を一變して天下ぢうをあらたにする。【一二】行儉德　儉約といふ德をおこなふ、是の時代宗漸く奢侈ならんとする風あり、因て儉を說く。【一三】盜賊　人民より誅求する武將等をさす。【一四】王臣　天子のけらい。

【題義】此詩は遷都の議をきき政治一新の根本論を說く。仇氏は遷都の非を歎じたる詩なりととけるも、余は之に贊せず、むしろ遷都の是非云云を超越して君德をときたるものと考ふ。

【詩意】洛陽には四方から舟車がいりこむ、さうして其の地は天下の中央で四方から貢賦をはこぶに

は里程が平均した處だ。そこには穀あまりてくさり、人人寒時にあたり天子の遷幸の旗きたつて春の生せんことを待ちつつあると聞く。或る人は天子の都としては金湯の固めがいる、洛陽は金湯の固めをかいてゐるではないかといふが、自分の考では都に金湯の固めなんどいふものは取りえのないものだ、それよりもどうか天子がいままでのやりかたをかへ、この天下を永久に新にされんことを希望するのだ。天下を新にするというたところで格別むづかしい方法によるわけではない、ただ天子が躬ら儉約の德を行はれるだけのことだ。いま盜賊行爲をしてをる武將どもも、もとはみな天子のごけらいなのである。

〔四〕

丹桂風霜急。青梧日夜凋。
由來强幹地。未有不臣朝。
授鉞親賢往。卑宮制詔遙。
終依古封建。豈獨聽簫韶。

【字解】〔一〕丹桂　「きんもくせい」のこと、唐の王室をたとへいふ、漢の成帝の時の童謠に桂樹華不實の語あり、桂の花は赤色にして漢家の象なりといへり。〔二〕青梧　「あをぎり」唐の宗藩（親王家）にたとふ、「きり」の木は本幹より子枝孫枝がよくそだつ、由て王室の御親類すぢの象とす。丹桂・青梧の二句節物をのべ同時にたとへをとる。〔三〕强幹地　强幹はつよいみきなり、幹は王室なり、子孫の枝が王室を護れば、王室の幹はつよくなる、强幹地とは「つよいみきのあるところに於ては」の意。〔四〕臣朝　臣下と授くることは兵馬の權を委任するをいふ、親賢とは天子の近親にして且賢なるをいふ、此句は寶應元年に代宗位に即き雍王适を以て元帥とせしことをさす。〔六〕卑宮制詔遙　卑宮は天子が宮室を卑くし、みすぼらしき建物にすまはるること、儉約のさまなり、制詔はみことのりなり、代宗に卑宮の詔ありしや否や不明なるも此詩句によれば之ありしものとみるべきなり、（仇氏は授鉞二句について玄宗の時の事を引きて解きたるも恐くは是に非ず）遙とは作者遠方にありて之をきくをいふ。〔七〕古封建　周の仕方をさす。周は天子のこどもを諸國に封じて建て置きたり、それに由つて王室を護らしめんとせるなり。〔八〕聽簫韶　韶は舜の音樂の名、簫がおもなる樂器なるにより之を簫韶といふ、此句は諷意あるならん、蓋し干戚を舞はして三苗を服從せしめしの手段を非とするものにあらざるか。

【題義】　此篇は宗室を封じて王室を護らしむべきことを說けり。

【詩意】　丹桂のうへには風霜がしきりに置き、青梧もまた日となく夜となくしぼむ。王室宗室ともにふるはなくなりつつある。元來もし樹の本幹が强いならばそこに向つてはいかなる不心得ものも臣節をいたし參朝せぬものはないはずであるのだ。このごろわが天子におかせられては鉞を授けて親賢のお方（雍王适）を敵前へおつかはしになり、また吾吾は遙に卑宮の詔をうけたまはつた。まことに結構なことである。結局は今の世も古代の封建の趣旨に依るべきものである。ただ深宮に在つて簫韶の音樂をきいてをるといふことが目的ではあるまい。

〔五〕

胡滅人還亂。兵殘將自疑。　胡滅して人還亂れ、兵殘りて將自ら疑ふ。
登壇名絶假。報主爾何遲。　登壇、名、假を絶つ、主に報ずる爾何ぞ遲き。
領郡輒無色。之官皆有詞。　郡を領すれば輒ち色無く、官に之く皆詞有り。
願聞哀痛詔。端拱問瘡痍。　願くは聞かむ哀痛の詔、端拱、瘡痍を問ふを。

【字解】〔一〕胡　賊軍。〔二〕人　人民。〔三〕兵殘　兵の少數がのこるなり。〔四〕將自疑　將は賊の降將、自疑とは自ら信ぜざるなり、もと賊に從ひ居て新しく降りしものなればいつ官から罰せらるるかとあやぶみて疑ふなり、自ら疑ふによりて又た兵をつのりて自己を守ることになる。〔五〕登壇　漢の高祖、韓信を大將に任命するとき特別に壇をきづきそのうへに信を登らせたり、ここはただ武將を任命することをいふ。〔六〕名絶假　韓信齊の地を定めしとき假りに王とならんと請ふ、高祖「大丈夫諸侯を定むるには即ち眞王とならんのみ、何ぞ假を以て爲さん」といひて齊王を授けたり。いまその如く名には假なるものなく武將みな眞王となるといふなり、ただし唐の時王の稱はなし、武將は爵と土地と名實ともに之を受けしことをさす。〔七〕主　天子。〔八〕爾　武將をさす。〔九〕領郡　郡を支配する。唐にては郡なし、州の刺史に任ぜらるることを領郡といへり。〔一〇〕輒　すなはち、いつでもの義。〔一一〕無色　顏色うかばぬをいふ。〔一二〕之官　官に之く、とは州へ赴任するなり。〔一三〕有詞　詞は怨言なり。〔一四〕哀痛詔　天子自らいたみ過ちを悔ゆる意をのべたまへるみことのり。〔一五〕端拱　端坐して手を拱く、容儀をただすさま。〔一六〕瘡痍　きずあと、民のなんぎをいふ。

【題義】此篇は當時武將を重んじて郡守（州の刺史）を輕んぜるを慨する意をのべたり。

【詩意】胡賊は滅亡したにかかはらず人民はなほみだれたつておちつかぬ。兵は減少して殘りすくなになつたが武將は却つて自己の安否を疑ひつつある。苟くも將に任ぜられ壇にのぼるものはみな眞王の如く名稱實利をならびうけてをる。それになんで汝等は天子に報いたてまつることがおそいのであるか。武將はこんなであるに、他面、行政の官はといふと、郡を領し州の長官に任ぜらるればいつもその人は顏色がうかばぬ。さうして赴任するにあたつては皆ぶつぶつ怨みのことばをだす。こんなことではならぬ。自分はどうかして天子が悔過の哀痛の詔をおだしになり、端然容儀を正しうして人民の艱苦をお問になることを希望するのである。

春日戲題惱郝使君兄

使君意氣凌青霄。　春日戲に題して郝使君兄を惱ます
憶昨歡娛常見招。　使君の意氣、青霄を凌ぐ、
細馬時鳴金騕褭。　憶ふ昨、歡娛常に招かれしを。
佳人屢出董嬌饒。　細馬時に鳴く金騕褭、
東流江水西飛燕。　佳人屢〻出づ董嬌饒。
可惜春光不相見。　東に流るるは江水、西に飛ぶは燕、
　惜しむべし春光に相見ず。

【字解】〔一〕惱　なやます、こまらす。〔二〕郝使君　郝使君は某州の刺史にて通泉に居りしものならん。或は既に退居せしものか。〔三〕兄　年長者に對する敬稱。〔四〕青霄　あをぞら。〔五〕憶昨　昨とは去年冬通泉にゆきし時をさす。〔六〕細馬　良馬。〔七〕鳴　馬がなく。〔八〕金騕褭　即ち細馬と同物、騕

願攜(一四)王趙兩紅顏。
再騁(一五)肌膚如(一六)素練。』

通泉百里近梓州。
請公(一七)一來開我愁。

舞處重看花(一八)滿面。
樽前還有錦纏頭。』

願はくは王趙の兩紅顏を攜へて、
再び騁せよ、肌膚、素練の如し。』

通泉は百里、梓州に近し、
請ふ公一たび來りて我が愁を開け。

舞處重ねて看む花面に滿つるを、
樽前還錦纏頭有り。』

【一四】 王趙兩紅顏　二人の美妓。

【一五】 再騁肌膚如素練　此七字一句なるも再騁の二字は上句に屬せしめてみるべし、郝に向ていふなり、杜詩の無理なる句法の一例とすべし。【一六】 肌膚如素練　の五字は兩紅顏の補足的説明なり、素練はしろきねりぎぬ。騁の字を此句に屬せしめ「逞しくせしめよ」の義なりととくものあれど依りがたし。【一七】 公　郝をさす。【一八】 花滿面　前に笑時花近眼、舞罷錦纏頭の句あり、余さきに花は花枝かとのべおきたり。ここの花も同義かとおもふ、一説に花は顏面の裝飾に用ふるものなりといへり。

【題義】 春の日に戯れにかきつけて郝使君をこまらせた詩。廣德元年春梓州にての作。

【詩意】 使君の意氣はあをぞらをしのぐばかりだ、通泉でおもしろいたのしみをしたときいつもお招きにあづかつたことはいまもおもひだす。あのときは金騮裏の細馬が時時いななき、董嬌饒に比すべき佳人がときどきあらはれでた。』　水は東にながれる燕は西に飛ぶ。惜しくも春げしきは過ぎやすいのだが、その春げしきのをりからあなたとは面會せずにゐる。どうか王・趙・の二美人をたづさへてふたたび馬をとばせておいでなさい、彼女等美人はその肌膚はしろいねりぎぬのごとくうつくしいものどもである。』　あなたの居る通泉はたつた百里でわたしの居る梓州には近い。どうぞ一ど來てわたしの愁をはらしていただきたい。彼女等の舞ふ處、かさねて花の面に滿つるを看ませう。また酒樽の前には錦の纏頭もござる。

裏は赤喙黑身の駿馬、金とは金をかざれるをいふか。【九】 董嬌饒　漢末の美女の名、うへの佳人と同物。【一〇】 東流江水　水の流るる如く時はすぎ去る。【一一】 西飛燕　春すぐれば燕飛び來る。【一二】 春光　はるげしきのあるときにの意。【一三】 不相見　郝と面會せぬこと。【一四】 王趙兩紅顏　二人の美妓。

杜少陵詩集　卷十二

題鄠原郭三十二明府茅屋壁。

江頭且繫船。爲爾獨相憐。
雲散灌壇雨。春青彭澤田。
頻驚適小國。一擬問高天。
別後巴東路。逢人問幾賢。

【字解】【一】鄠原　原の字一に縣に作る。のちに「鄠城西原」の語あり、縣の字ならば鄠縣のこと、原の字ならば鄠城西原の意なるべし。鄠縣は梓州の治所、今の三臺縣治なり。【二】明府　縣令の敬稱。【三】江頭　江は涪江。【四】且　しばらく。【五】繫船　ここに船をつなぎ寓居するをいふ。【六】爾　郭をさす。【七】灌壇　縣の名、搜神記といふ小説に、太公望が灌壇の令となりしときに、泰山の女で西海の婦になつたものが文王の夢にあらはれていふには自分は泰山の方へかへらうとするに、灌壇の令にさまたげられてゆけぬ、自分のとほる處には必ず大風疾雨あり、と。文王、太公望を召して之に問ひしに果して急風暴雨が管外を通過せしとこたへたり。【八】春青　青とは耕作物が生じてあをみをるなり。【九】彭澤　縣の名、晉の陶淵明かつてここの縣令となる、灌壇・彭澤は鄠縣を比していへり。【一〇】適小國　小國とは鄠縣をさす、郭は賢者でありながらつまらぬ縣へばかり赴任させられてゐる。【一一】一

題鄠原郭三十二明府茅屋壁　鄠原の郭三十二明府が茅屋の壁に題す

江頭の船を繋ぐ、爾が獨り相憐むが爲なり。
雲は散ず灌壇の雨、春は青し彭澤の田。
頻りに驚く小國に適く、一に高天に問はむと擬す。
別後、巴東の路、人に逢はば幾賢かあると問はむ。

もつばらの義。【二】問高天　屈原「天問」を作りわからぬことを一一天に向て詰問せり、そのまねをする。【三】巴東　巴州の東、巴州は今の四川重慶府、作者は梓州から涪江をくだり巴州を經て三峽から出ようとの考をもちしなり。【四】問幾賢　幾賢とは幾人の賢者の義、郭ほどの賢者がいく人あるかをひとにたづねようといふなり。其の意はいくにんも居るまじといふに在り。

【題義】鄠縣の縣令郭某の茅屋の壁に題したる詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】自分はこの涪江のほとりにしばらく船をつないだのはあなたがひとりわたしを憐んでくれたがためである。あなたは賢人であるから灌壇の雨にも雨はきつからずすぐ雲が散らばつてしまひ、彭澤の田には春の作物が青青としてゐる。あなたほどの賢人が小さい地方へばかりゆくのには驚く、これはどうしたわけなのかそのわけを天にたづねてみよう。またあなたとわかれて巴東の路をとほるときには人に逢ふごとにあなたほどの賢い縣令がいくにんゐるかとたづねてみよう。

奉送崔都水翁下峽

崔都水翁が峽より下るを送り奉る

無數涪江筏。鳴橈總發時。
別離終不久。宗族忍相遺。
白狗黃牛峽。朝雲暮雨祠。
所過憑問訊。到日自題詩。

無數、涪江の筏、橈を鳴らして總て發する時。
別離終に久しからず、宗族、相遺すに忍びんや。
白狗黃牛峽、朝雲暮雨祠。
過ぐる所憑つて問訊せむ、到らむ日自ら詩を題せよ。

【字解】【一】崔都水翁　都水とは都水監使者なり、正五品上の官にて河渠諸津の監署を總ぶ。この崔某は作者の舅にあたる人なり、因て之を翁といへり。【二】下峽　三峽よりくだる、崔はそれより洛陽の方へゆかんとするなり。【三】筏　いかだ、木を組みて水に浮かせたるもの、此人筏にのりてくだるとみゆ。【四】橈　短き棹なり。【五】總發　一齊に出發する。【六】宗族　洛陽にある同姓の親族。【七】相遺　遺は遺棄しておくこと、別離二句は作者よりいふ。【八】白狗黃牛峽　白狗峽は湖北省歸州にあり、兩崖倒るが如く白石隱に起り其の狀狗の如し。黃牛峽は夷陵州（今の宜昌）にあり、石色人の牛を牽く狀のごとく人は黑く牛は黃なり。【九】朝雲暮雨祠　夔州府巫山縣の東にあり、楚の襄王の夢に巫山の神女あらはれ、妾は朝には行雲となり、暮には行雨となるといひしと傳ふ。峽と祠とは竝に崔が經過するところなり。【一〇】所過憑問訊到日自題詩　二句諸解あり、一に曰く、君が過ぐる所吾が相知のものあらば先づ君によりて問訊しおき、吾自らそこに到りし日に吾自ら詩を題して之に贈らん、と。この說は所レ過憑問訊シ到ラン日自題センレ詩とよますなり。仇氏この說をとれり。二に曰く、君がそこに到りし日に君自ら詩を題しおかれよ、君が過ぐる所、吾、君の詩によりて之を問訊すべし。のちに張籍の詩に願君到處自題セヨレ名ヲ　他日知ラム君從レ此去リシコトヲとあると同意なりと。余はこの第二說に依る。

【題義】舅にあたる都水監使者崔老人が三峽からくだつて洛陽の方へゆかうとするのを送る詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】數しれぬ多くの涪江の筏が、橈を鳴らして一齊に出發するとき。あなたといまはお別れするがこのお別れも結局はそんなにながくはあるまい、なぜかといふと洛陽においてある親族のもの、それをわたしだとてどうしてはふつておくに忍びませうぞ。あなたはこれから朝雲暮雨となつたといはれる巫山の神女の祠や、白狗峽、黃牛峽などをおとほりになるところはわたしも他日あなたのおかきになつたものによつてたづぬるよすがといたしますから、あなたは各地

におつきになつたときにはごじぶんでそこに詩を題しておいていただきたい。

鄠城西原送李判官兄・武判官弟赴成都府

鄠城の西原にて李判官兄・武判官弟が成都府に赴くを送る

憑高送所親。久坐惜芳辰。
遠水非無浪。他山自有春。
野花隨處發。官柳著行新。
天際傷愁別。離筵何太頻。

【字解】〔一〕鄠城西原　鄠縣の城の西方の高地。〔二〕李判官兄　判官李某、年長者ゆゑ兄といふ。〔三〕武判官弟　判官武某、年少者ゆゑ弟といふ。〔四〕憑高　高地によりて。〔五〕所親　したしき人、李・武・は兄弟なみに交る人人ゆゑ所親といふ。〔六〕芳辰　春のとき。〔七〕非無浪　浪ありて舟行には辛苦なるをいふ。〔八〕他山　他地方の山。〔九〕有春　春のけしきの見るべきものあるをいふ。〔一〇〕隨處　どこにでも。〔一一〕官柳　官にてうゑた柳、これは官道にならび立つ。〔一二〕著行　行は行列、著處はどこでもの義なるごとく著行は「どの行列も」の義。〔一三〕新　あらたにわか芽をふいたこと。〔一四〕天際　天涯のごとし、梓州は都よりみて天のはてなり。〔一五〕愁別　愁を帶びてのわかれ。〔一六〕離筵　わかれの宴席。〔一七〕太頻　蓋し崔翁を送り、また李・武・の二人を送る、これ「頻り」なるなり。

【題義】鄠縣縣城の西方高地で判官たる李・武・の二人が成都府の方へ赴くのを送る詩。廣德元年春梓州にての作。

【詩意】自分は高地によつて親しくしてゐた人たちを送り、じつとすわつて春のときを惜しむ。諸君がとほる遠方の川水には浪が無いわけでない、浪はあつて舟行にはなんぎなこともあらうが、他地方の山にはおのづと春景色があつて慰めらるるであらう。すなはち到るところ野のもの花はひらき、官道の柳の並樹はどれもわかめをふいてゐるだらう。自分は天のはてでかなしい別れにこころをいためる。なんでかくわかれの宴席が頻頻ともよほされるのであらう。

涪江泛舟送韋班歸京得山字

涪江に舟を泛べ韋班が京に歸るを送る山の字を得たり

追餞同舟日。傷春一水間。
飄零爲客久。衰老羨君還。
花雜重重樹。雲輕處處山。
天涯故人少。更益鬢毛斑。

【字解】〔一〕韋班　事歷詳ならず。〔二〕京　長安なるべきか。〔三〕追餞　あとをおひかけてはなむけする。〔四〕花雜　雜とは異種類の花がさきあへるをいふ、雜一に遠に作る。〔五〕天涯　京に對し居地梓州をさす。

【題義】涪江にて舟をうかべて韋班といふものがみやこへかへるのを送る詩。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】あとからおひかけて旅立ちのはなむけせんと同じ舟でゆくとき。この一すぢの江の流に於て春げしきに對してもこころをいためる。自分はおちぶれながら久しく旅客となつてゐるし、衰老の境涯にあるのでこのたび君がみやこへかへるのをうらやましくおもふ。君のとほる處にはいへにもかさなつた樹にはいろいろの花が咲き合うてゐるだらうし、處處の山には雲が輕くういてゐるだらう。君にわかれてしまへばこの天のはてではなじみのものもすくないがうへにさらに鬢の毛の霜斑なることが益すこととおもふ。

泛舟送魏十八倉曹還京。因寄岑中允參・范郎中季明

舟を泛べて魏十八倉曹が京に還るを送り、因つて岑中允參・范郎中季明に寄す

遲日深江水。輕舟送別筵。
帝鄉愁緒外。春色淚痕邊。
見酒須相憶。將詩莫浪傳。

「莫れ。酒を見ては須らく相憶ふべし、詩を將て浪に傳ふること」

若逢岑與范。爲報各衰年。

【字解】【一】泛舟　これも涪江に舟をうかべるなり。【二】魏十八倉曹　倉曹は官名、唐の制、諸衛府に倉曹參軍あり。【三】岑中允參　親友の岑參なり、是の年に參は虢州長史より太子中允に改められ、殿中侍御史を兼ね、關西節度判官に充てらる。【四】范郎中季明　范季明が事歴詳ならず、郎中は官名。【五】遲日　遲とは日のくれぬこと、春の永日を遲日といふ。【六】深江　ふかいかは、涪江をいふ。【七】帝鄉　みやこ。【八】愁緒　うれひのこころ。【九】酒　魏某等がのむさけ。【一〇】詩　作者のつくる詩。【一一】浪　みだりに。【一二】傳　世間へ流傳させる。【一三】爲報　吾がためにつげよ。【一四】各衰年　この各の字は衰年へかからず岑范各自をさすに似たり。

【題義】涪江に舟をうかべて倉曹の官魏某がみやこにかへるのを送り、ついでに太子中允岑參と郎中范季明に寄せた詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】はるの日永のときのふかき江の水。輕くうかんだ舟でのわかれを送る宴席。みやこは遠くわが愁のこころの外にあり、春のおもしろきけしきもわが涙痕のほとりにある。君はあちらへいつて酒をみたばあひにはわたしをおもうてくれ、またわたしが作つた詩をばやたらにわたしを知らぬ人たちに傳播させてはくれるな。岑參と范季明に逢うたなら、めいめいにわたしはもう老衰の年になつたとつげてくれ。

送路六侍御入朝

路六侍御が入朝するを送る

童稚情親四十年。
中間消息兩茫然。
更爲後會知何地。
忽漫相逢是別筵。
不分桃花紅似錦。
生憎柳絮白於綿。
劍南春色還無賴。
觸忤愁人到酒邊。

童稚、情親しむ四十年、
中間の消息兩に茫然たり。
更に後會を爲すは知る何の地ぞ、
忽ち漫に相逢ふは是れ別筵なり。
分とせず桃花の紅錦に似たるを、
生憎や柳絮綿よりも白し。
劍南の春色還無賴、
愁人に觸忤して酒邊に到る。

【字解】〔一〕路六侍御　侍御は官名、侍御史なり、路六の名詳ならず。〔二〕入朝　朝廷へゆく。〔三〕童稚　こどものとき。〔四〕中間消息　童時と老時とのなかごろのたより。〔五〕兩　彼我の兩方共にの意。〔六〕茫然　はつきりせぬ貌。〔七〕後會　これから後日の會合。〔八〕知何地　不レ知何地の意。〔九〕不分　汝の本分だとはせぬぞ。意譯すれば「それはきこえぬ」などの義とひとし。〔一〇〕生憎　「生」の字俗用にて助字なり、動詞の下にもつけ上にもつける、これは上につけたる例なり、太瘦生・可憐生・などは下につけた例なり。〔一一〕劍南　梓州地方も劍閣の南にあたれり。〔一二〕無賴　あてにならぬもの、ならずもの、春色を罵る語なり。〔一三〕觸忤　こころにふれさからふ。〔一四〕愁人　愁ある人、自己をさす。

【詩意】君とはこどものときたいそうなかがよかつたが、そののち四十年からたつた。いままたであふが童と老との中間のたよりはおたがひにはつきりしてはをらぬ。いまあふが後日またあふのはどこだらう。いま急にであふのがこの送別のむしろではないか。じつに氣にくはぬのは桃の花の錦のやうに紅であることであり、またにくさもにくきは柳の花の綿よりも白いことである。この蜀の春げしきといふやつはまことに無賴であつて、このわしが愁にたへかねてゐるのにそのこころにそむいてこのわかれの酒をのんでをるあたりにやつてくるとはふとどきしごくのやつだ。

涪城縣香積寺官閣

寺下春江深不流。
山腰官閣迴添愁。
含風翠壁孤雲細。
背日丹楓萬木稠。
小院迴廊春寂寂。
浴鳧飛鷺晚悠悠。
諸天合在藤蘿外。
昏黑應須到上頭。

涪城縣の香積寺の官閣
寺下の春江深うして流れず、
山腰の官閣迴かに愁を添ふ。
風を含みて翠壁孤雲細に、
日に背きて丹楓萬木稠し。
小院迴廊、春寂寂、
浴鳧飛鷺、晚に悠悠たり。
諸天合に藤蘿の外に在るべし、
昏黑應に須らく上頭に到るべし。

【字解】〔一〕涪城縣　梓州の西北五十五里にありと。〔二〕香積寺　香積山は涪城縣の東南三里にあり、北のかた涪江に枕む。寺は山上にあるなるべし。〔三〕官閣　官にてたてた二階。〔四〕春江　江は涪江。〔五〕深不流　ふかくして水のたたへてゐること。〔六〕山腰　腰とは中段をいふ。〔七〕添愁　容易にゆきつけぬとうれふるなり。〔八〕含風翠壁　翠壁含レ風の意、翠壁は山の絕壁。〔九〕背日丹楓　丹楓背レ日

の意、丹楓はわかばのあかきなるべし。【一〇】 稠 おほし。【一一】 小院 ちさき奥庭。【一二】 迴廊 まはりらうか。【一三】 悠悠 心のしづかなさま。【一四】 諸天 佛教の思想にて諸種の天あり、四天王天より非有想天・非無想天にいたる天はみな諸天なり、これ山頂の寺殿をさす。【一五】 昏黑 たそがれどきのまつくらきとき。【一六】 上頭 頂上をいふ。

【題義】 涪城縣の香積寺にある官閣についてよめり。廣德元年春、梓州にありしときの作。

【詩意】 寺のましたに春の江があるがこれは深くてながれてをらぬかの樣にしづかだ。そのうへ山の中段のあたりに官閣があるが、これはずつととほくていつあそこまでゆけるのかと心配をますほどだ。だんだんのぼるとみどりの絶壁は風を含んでほつそりひとひらの雲がうかび、日光をうしろにして若葉の丹楓が無數にたくさんにある。いよいよ官閣のところへくると小さな奥庭にまはり廊下があつて春のさまひつそりとしてをり、水面をみおろすと水をあびてゐる鳧だの飛んでゐる鷺なんどが夕ぐれにあたつてのんきさうにみえてゐる。佛法でいふ諸天は藤や蘿などのはえてゐる森林の以上にあるはずであつて、そんな絶頂へは日がとつぷりくれてからやつとゆきつくことであらう。

泛江送客

二月頻送客。東津江欲平。
煙花山際重。舟楫浪前輕。

江に泛びて客を送る

二月頻りに客を送る、東津、江、平ならむと欲す。
煙花、山際に重く、舟楫、浪前に輕し。

涙逐勸盃下。愁連吹笛生。
離筵不隔日。那得易爲情。

涙は勸盃を逐うて下り、愁は吹笛に連なりて生ず。
離筵、日を隔てず、那ぞ情を爲し易きを得む。

【字解】【一】 泛江 涪江に舟をうかべしこと。【二】 客 あるたびにゆくひと、何人なるやを知らず。【三】 東津 「打魚歌」にみえたり、綿州にあり。【四】 煙花 けぶりをおびた花。【五】 重 濃厚の意。【六】 不隔日 毎日ひきつづくをいふ。【七】 那得易爲情 難爲情といふ語あり、あまりつらくて情が情であり得ないことをいふ、「なんぞ情を爲し易きことを得ん」とはそれと同意。

【題義】 涪江にうかびて人を送つた詩。廣德元年梓州にありてしばらく綿州にいたりしときの作ならん。

【詩意】 二月にはしきりに人を送る。いまこの東津では江の水がたつぷりあつて岸と平にならうとしてゐる。山のきはみれば煙をおびた花が厚くみえ、浪かきわけて舟の楫がかろくこがれつつある。自分は客に盃をすすめるあとから涙がおちるし、笛を吹くおとにつれて愁の念が生ずる。わかれのさかむしろも一日おかずにつづいてはどうして自分の情が情でありえよう。つらくてたまらね。

雙燕

旅食驚雙燕。銜泥入北堂。
應同避燥濕。且復過炎涼。

雙燕

旅食、雙燕の、泥を銜みて北堂に入るに驚く。
應に同じく燥濕を避け、且復炎涼を過すなるべし。

養子風塵際。來時道路長。
今秋天地在。吾亦離殊方。

【字解】〔一〕雙燕　雌雄ふたつのつばめ。〔二〕旅食　たびずまひすること。〔三〕驚　この字下句へまでかかる。〔四〕北堂　婦人のへや、家屋の北方にあり、これは妻の室をさす。〔五〕同　雄と雌とおなじく。〔六〕燥濕　かわくと、しめると。〔七〕炎涼　あつさ、すずしさ。〔八〕養子　こどもをそだてる。〔九〕風塵　兵亂のちり。〔一〇〕來時　北からとんできたとき。〔一一〕長　遠き意。〔一二〕今秋　この二字は下句の離殊方へかかる。〔一三〕天地在　ここの地よりほかにもひろき天地が存在するの意。〔一四〕離　去るなり。〔一五〕殊方　他方に同じ、他鄉のこと、閬州をさす、閬州は今四川保寧府閬中縣なり。

【題義】雌雄のつばめについてよめり。作者自己夫妻のことをたとへていへり。廣德元年春、閬州にての作。

【詩意】自分はたびずまひをして驚くのは北のへやへ一對のつばめが泥をくはへてはひつてきたことだ。彼等はいつしよにかわき・しめり・を避け、そのうへまたあつさ・すずしさ・をもすごすことであらう。彼等は兵亂のほこりのとぶときに子どもをそだててゐる。そのとんできた道路はなかなかの遠いところからである。（じぶんもこのつばめに似てゐるの意）。しかし他にひろい天地もあるからして、ことしの秋には自分もこんな他鄉の地からたち去らうとおもうてゐる。

百舌

百舌來何處。重重秖報春。
知音兼衆語。整翮豈多身。
花密藏難見。枝高聽轉新。
過時如發口。君側有讒人。

【字解】〔一〕百舌　「もず」のとり。〔二〕重重　かさねてかさねて。〔三〕知音　音をよく知る。〔四〕衆語　さまざまのことば。〔五〕整翮　たちばねをととのへてとぶ。〔六〕豈多身　からだがいくつもあるのではない。〔七〕過時　時節をはづれて。〔八〕發口　くちをひらいて鳴くこと。〔九〕君側有讒人　「汲冢周書」に反舌有ㇾ聲　佞人在ㇾ側とみゆ。反舌は卽ち百舌なり。

【題義】「もず」の鳥に感じてよめる詩。君側の讒人をそしるなり。程元振を意味せるならんといふ。蓋し「雙燕」と同じころの作。

【詩意】「もず」のとりはどこから來たか、たびたび鳴くがただ春だぞとつげしらせるだけのことだ。このとりは音のことをよく知つてさまざまのことばを兼ねてなく。またたちばねをととのへて樣子をよくしてなくがその身はひとつでべつなとりがなくわけではない。花のこんで咲いてゐるところでなくからからだはかくされて見えぬ。枝の高いあたりに鳴くのでそのこゑをきけばきくほど新しくきこ

える。これがその鳴くべき時節に鳴いてゐるのはまだよいが、時節はづれに口をあいて鳴かうものなら、それこそ君のお側に讒言をするやうな悪人のある徴だ。

上牛頭寺。

牛頭寺に上る

青山意不盡。袞袞上牛頭。
無復能拘礙。眞成浪出遊。
花濃春寺靜。竹細野池幽。
何處啼鶯切。移時獨未休。

青山、意盡きず、袞袞、牛頭に上る。
復能く拘礙せらるる無し、眞成に浪りに出遊す。
花濃かにして春寺靜に、竹細くして野池幽なり。
何の處か啼鶯切なり、時を移して獨り未だ休まず。

【字解】【一】牛頭寺　梓州郪縣の西南二里に牛頭山あり、高さ一里、形、牛頭に似、四面孤絶、俯して州郭に臨む。寺は蓋し山上にありしもの。【二】意不盡　山をゆきて興味つきざるをいふ。【三】袞袞　絶えざる貌。【四】拘礙　こちらを拘束しさまたげる。【五】眞成　まことに。【六】移時　ひさしくの意。

【題義】牛頭寺にのぼりてよめり。廣德元年梓州にての作。

【詩意】青山をあるいてゆくが興味はつきぬ、それでひきつづいて牛頭山のうへの方へとのぼる。何等の拘束・障礙・をうけず、まことにきままにあそびにでかけるのである。寺についてみると、花の色こまやかで春の寺は靜であり、細つた竹がはえて池が幽邃である。どこでか鶯がしきりになないてそれだけはいくら時刻がうつつてもなきやまうとしない。

望牛頭寺

牛頭寺を望む

牛頭見鶴林。梯逕繞幽深。
春色浮山外。天河宿殿陰。
傳燈無白日。布地有黃金。
休作狂歌老。迴看不住心。

牛頭、鶴林を見る、梯逕繞りて幽深なり。
春色、山外に浮び、天河、殿陰に宿す。
傳燈、白日を無す、布地、黃金有り。
狂歌の老と作るを休めて、迴看せん不住の心。

【字解】【一】牛頭見鶴林　仇氏は寺の名とし、寺は梓州の南七里にあり、此詩は牛頭寺にて鶴林寺を望む詩にて題に誤ありといへり。然れども牛頭は山をさし、鶴林は牛頭寺をさせるものならん、後に「上兜率寺」、「望兜率寺」の二詩あるの例によりてみれば題には誤なからん。佛が涅槃に入りしとき東西の二雙樹、南北の二雙樹、それぞれ合して一樹となりて垂れて佛を覆ひ、その樹慘然として白に變じたり、その色鶴の白きがごとし、故に鶴林と名くと。鶴林は單に寺の意に用ひしなるべし。【二】梯逕　はしごの如くだんだんになれるこみち。【三】繞　紆回してゐる。【四】天河　あまのがは。【五】宿殿陰　ごてんのかげにやどる、殿の高きをいふ、これは實にみるに非ず想像にてのぶ。【六】傳燈　佛家は燈を以て法にたとふ、法をつぎつぎに傳へることを傳燈といふ、この寺には代代名僧がつぐとみえたり。【七】無白日　ひるも燈がきえぬ故白日はあれども無きにおなじ。【八】布地有黃金　給孤獨長者が黃金を地に布きて精舍をたてしはなし、已にしばしばみゆ。【九】狂歌老　自己をさす。【一〇】迴看　ふりかへつてみる。【一一】不住心　執著せざる心、悟りのこころ。

【題義】山のうへなる牛頭寺をのぞんだことをのべた詩。この詩は「上牛頭寺」より前にあるべきものに非るか。前の「上牛頭寺」と同じころの作なるべし。

【詩意】牛頭の山なる寺をみると、だんだんばしごのやうなこみちがぐるぐるめぐつておくふかくみえる。春げしきは山の外に浮びいで、夜ならばあまの河もこの寺の佛殿のかげにやどるだらうとおもはれる。ここの住僧は代代法燈を傳へて白日の光りをも無いものあつかひにし、長者は黃金を地面に敷いてこれほどのりつぱなものをたてたのだ。自分もこれから狂歌してゐるおやぢなどになつてゐることをやめて、佛法に歸依して不住心でもふりかへつてみた方がよいとおもふ。

登牛頭山亭子[一]

牛頭山の亭子に登る

路出雙林外。亭窺萬井中。
路は出づ雙林の外、亭は窺ふ萬井の中。

江城孤照日。山谷遠含風。
江城、孤にして日に照され、山谷遠く風を含む。

兵革身將老。關河信不通。
兵革に身將に老いむとす、關河、信、通せず。

猶殘數行淚。忍對百花叢。
猶殘す數行の淚、百花の叢に對するに忍びむや。

【字解】〔一〕亭子　ちん、こやすみ所。〔二〕雙林　雙樹の林、寺をいふ。〔三〕萬井　鄰縣の多くの人家。〔四〕江城　涪江にそひし城、梓州の城をいふ。〔五〕兵革　兵亂をいふ。〔六〕關河　關塞河川。〔七〕信　てがみ、たより。〔八〕百花叢　前の「上牛頭寺」に「花濃」とあるとおなじ花なるべし、多くの花のさけるくさむら。

【題義】牛頭山の亭にのぼつてよめる詩。前詩と同時の作なるべし。

【詩意】寺以外にうへの方に路がでる、そこをのぼつて亭について亭から多くの城内の人家をみおろす。城は孤立してゐて日光に照らされ、山谷は遠く風を內部にたくはへてゐるやうである。自分は兵亂のあひだに老いようとしてをる。故郷とは關河のへだたりがあつて音信は不通である。いままでずでに多くの涙をそそいだがまだ二三行ほどの涙はのこつてをる。どうしてこの百花の叢にうちむかふに忍びようか。之にむかへばまた涙をそそぎつくさねばならぬ。

上兜率寺[一]

兜率寺に上る

兜率知名寺。眞如會法堂。
兜率、知名の寺、眞如、會法の堂。

江山有巴蜀。棟宇自齊梁。
江上、巴蜀を有す、棟宇、齊梁よりす。

庾信哀雖久。周顒好不忘。
庾信哀しむ久しと雖も、周顒好むこと忘れず。

白牛車遠近。且欲上慈航。
白牛、車遠近、且慈航に上らむと欲す。

【字解】【一】兜率寺　梓州には大小十二の寺あり、北には慧義寺、南には兜率寺、西には牛頭寺、東には觀音寺ありといへり、兜率陀は梵語にして知足の義なりと。【二】眞如會法堂　眞如の法を領會する堂の義、眞如は圓覺の自性、本、僞妄變易なきものをいふと、（案するに起二句は仇氏によりて解きたるも、兜率知二名寺一　眞如會二法堂一と訓むも可なるに似たり。）【三】有巴蜀　巴蜀の江山を有すること。【四】棟宇　むなぎ、やれ。【五】自齊梁　この寺は隋の開皇中に建てられしとつたふ、作者齊梁といへるは何か據る所あるなるべし、齊梁は六朝の代の名、隋よりふるし。【六】庾信　北周の文豪、梁より北にゆきて、南をおもひ「哀江南」の賦を作る、作者之を以て自ら比す。【七】周顒　周の字もと何に作れるは誤ならん、周顒は齊梁の時の人、佛教を好みたり、これも顒を以て自ら比す。【八】白牛車　前にみえたり、法華經譬喩品に牛車を以て大乘の法にたとふ、遠近とは「法のところまで達するにみちのりは遠いか近いかわからぬが」の意。【九】慈航　すくひのふね、淸涼禪師の般若經序に、般若者苦海之慈航とあり、ここは蓋し說法をきくことをさして慈航に上るといへり。

【題義】兜率寺にのぼりてよめる詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】兜率寺は知名の寺であり、寺の眞如堂は眞如の法を領會する堂である。堂へきてみるとそのながめは巴蜀の江山をわがものとしてゐるし、そのむなぎ・屋根ははやくも齊梁時代からたてられてゐるものである。故郷をはなれてゐる庾信（自分）はながくかなしみつつあるが周顒（自分）は佛法に對して之を好むの念は忘れたことがない。自分は果して白牛車の大乘にのつてどれほどのみちを行きうるのかしらぬが、まづまづありがたい經文といふおたすけぶねにのぼらうかとおもふのである。

望兜率寺

樹密當山逕。江深隔寺門。
霏霏雲氣動。閃閃浪花翻。
不復知天大。空餘見佛尊。
時應淸盥罷。隨喜給孤園。

兜率寺を望む

樹密にして山逕に當り、江深くして寺門を隔つ。
霏霏として雲氣動き、閃閃として浪花翻へる。
復天の大なるを知らず、空しく佛の尊きを見るを餘す。
時に應に淸盥し罷みて、給孤の園に隨喜すべし。

【字解】【一】天大　「老子」に天大・地大・の語あり。【二】佛尊　佛は天上天下、惟我獨尊といへり。【三】淸盥　きよくたらひの水にて手をあらふ。【四】隨喜　喜びて來りしたがふ。【五】給孤園　給孤獨がたてた寺、兜率寺をさす。

【題義】兜率寺をのぞんだ詩。これも「上兜率寺」より前にあるべきものかとおもふ。前詩と同時の作ならん。

【詩意】山の逕のところに樹木がこみしげつてをり、寺門をへだてて涪江がふかく横はつてゐる。山の方には霏霏として雲氣が動いてをり、江の方には浪の花がちらちらとひかつてひるがへつてゐる。これをみると天は大きいとはいふもののその大きいことがわからなくなり、かへつていたづらに佛だけが尊いことがわかる樣な氣がする。自分も時としては不淨の手をきよくあらひをはつてこのお寺へ法をきくために隨喜してこようかとおもふ。

甘園

春日清江岸。千甘二頃園。
青雲羞葉密。白雪避花繁。
結子隨邊使。開籠近至尊。
後於桃李熟。終得獻金門。

【題義】みかんのはたけを見てよめる詩。廣德元年春の作。

【詩意】春のをりすんだ涪江の岸に千本ばかりのみかんをうゑた二百畝のはたけがある。その葉のこんであをあをとしてゐるのには青雲も羞かしがり、その花の繁くついてゐるのには白い雪も避けねばならぬ。これが子を結べばこちらからの使について朝廷の方へもつてゆかれ、かごからだせばもつていなくも一天萬乘の至尊のおそばにも近づく。このみの熟するのは桃や李よりはおくれるが、けつきよく天子の御門に獻らるることができるのである。（これは自己の境遇をたとへてのべしものとみゆ）

【字解】【一】甘園　甘は柑の略、みかんをいふ、詩中の千甘の甘もおなじ、柑園は梓州の城南十里にありと。【二】清江　涪江。【三】二頃　一頃は百畝。【四】結子　子は實をいふ。【五】邊使　邊地のつかひ、邊地とは蜀をいふ。【六】開籠　籠の字もと筒に作る、また筐に作るべしとの説あり、みかんをいれしかごをあける。【七】至尊　天子をいふ。【八】金門　金馬門。

陪李梓州・王閬州・蘇遂州・李果州・四使君登惠義寺

李梓州・王閬州・蘇遂州・李果州・四使君に陪して惠義寺に登る

春日無人境。虛空不住天。
鶯花隨世界。樓閣倚山巔。
遲暮身何得。登臨意惘然。
誰能解金印。瀟灑共安禪。

【題義】李・王・蘇・李・四人の刺史のともをして惠義寺にのぼつた詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】春の日にあたつてだれもをらぬばしよ。そのそらはつねにめぐつて變化しつつあるそら。ここにも鶯や花はそのばしよに應じてあらはれてをり、樓閣は山のいただきによつてたてられてある。自分は晩年になつてゐる身だがこれまで何ものを得てゐるか、なにも得てをらぬ。それでここへのぼ

【字解】【一】李梓州　梓州の刺史李某、李の字或は章に作る。【二】王閬州　閬州の刺史王某。【三】蘇遂州　遂州の刺史蘇某。【四】李果州　果州の刺史李某、梓州は今の潼川府、閬州は保寧府、遂州は潼川府遂寧縣、果州は順慶府なり。【五】使君　刺史の敬稱。【六】惠義寺　卽ち慧義寺、梓州の北に在るもの。【七】不住天　循環やまずして四時をなすをいふ。【八】世界　けだしこの寺境をさす。【九】山巔　寺は長平山にありといふ。【一〇】遲暮　晩年。【一一】何得　得る所のものなきをいふ。【一二】惘然　うらみをふくむ貌。【一三】解金印　黃金の印をときすてる、辭職すること。【一四】瀟灑　さらりとした貌。【一五】安禪　おちついて坐禪する。

つてみおろしてみてもこころがうらめしくはればれせぬ。諸君のうちでだれが金印などときすてて、さらりとしてここへきてともに坐禪しようか。そんなものはをらぬか。

數陪李梓州泛江有女樂在諸舫戲爲艷曲二首贈李

數陪李梓州に陪して江に泛ぶ、女樂有り諸舫に在り、戲れに艷曲二首を爲り李に贈る

〔一〕

上客迴空騎。佳人滿近船。
江清歌扇底。野曠舞衣前。
玉袖凌風竝。金壺隱浪偏。
競將明媚色。偸眼艷陽天。

【字解】〔一〕李梓州　李の字或は章に作る。〔二〕女樂　音樂を爲す女、歌舞の妓をいふ。〔三〕舫　二つならべた舟をいふ。〔四〕艷曲　つやつぽいうた。〔五〕上客　上等のおきやく、おきやくとは妓女よりのことばにて主人李梓州をさすなり。〔六〕迴空騎　迎へにきた騎兵たそのままのらずにかへらす。〔七〕近船　そばのふね。〔八〕歌扇　歌者のもつうちは。〔九〕玉袖　うつくしきそで。〔一〇〕凌風竝　二人でならんで舞ふ、舞ふとき袖が風をしのぐ。〔一一〕金壺　りつぱな酒壺。〔一二〕隱浪偏　偏隱浪とおなじ、浪にかくるとは船が高く低く動搖してあるときは浪にかくるるかとおもはるること多きをいふ。玉袖・金壺・の二句は諸說區區たれども余の見は上述のごとし。〔一三〕明媚色　めもとすずしく人にこびるやうなかほつき。〔一四〕偸眼　よこめで人をみる。〔一五〕艷陽天　はるのやうきなそら。

【題義】たびたび李梓州のともをして涪江にうかんだ。が、いろいろの舫に歌舞の妓がのつてゐる、それでたはぶれにつやつぽい曲二首を作つて李に贈つた。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】上客たる主人李君はせつかくきた騎兵をからつぽにかへされた、そしてそばの船には佳人がいつぱいのつてゐる。彼の女の歌扇のましたには江の水がきよくながれ、彼の女の舞衣のまへには田野がひろくよこたはつてゐる。風をしのいで幾人もの舞者がならんで袖をひるがへし、席上のさかつぼは船がうごくためとかく浪にかくるるかとみえがちである。さうして彼の女らはきそうて明媚なかほつきで、この陽氣なはるぞらによこめに人をぬすみみつつある。

〔二〕

白日移歌袖。青霄近笛床。
翠眉縈度曲。雲髻儼成行。
立馬千山暮。迴舟一水香。

白日、歌袖に移る、青霄、笛床に近し。
翠眉縈りて曲を度し、雲髻儼として行を成す。
馬を立つれば千山暮る、舟を迴せば一水香し。

使君自有婦(一四)。莫學野鴛鴦(一五)。　使君、自から婦有り、野鴛鴦を學ぶ莫れ。

【字解】【一】移歌袖　妓がうたひつつあるあひだに時間のたつをいふ。【二】青霄　あをそら。【三】近笛床　笛をのせる臺を笛床といふ、これは笛聲たかくのぼりて天にちかづくことを逆に天の方が笛床に近しといへるなり。【四】翠眉　あをくかいたまゆ。【五】榮　めぐる、これは數人にてくるま座を爲すをいふなるべし。【六】度曲　甲の調子から乙の調子へふしをうつす、度は渡と同じ。【七】雲髻　くもがたのびんのけ。【八】儼　ぎやうぎよく。【九】成行　行列を爲す、これは舞者をいふならん。【一〇】立馬千山暮　これは第一首の「空騎」とおなじ、騎兵は迎へにきたがただかへされたから馬を立ててゐると多くの山山は暮れてしまふ。【一一】迴舟　ふねをこぎもどす。【一二】一水香　美人滿船ゆゑ浣江の川全體がかんばし。【一三】使君自有婦　樂府「陌上桑」に、羅敷といふ女がある太守によめになれといはれしとき之を拒絶した語なり、使君はここは李梓州をさす。【一四】婦　つま。【一五】野鴛鴦　をしどりは雌雄野にてれむる。

【詩意】歌妓が袖をうごかすうちに時間はうつり、笛床より笛の音がのぼるところあをぞらはそれにむかうて垂れてゐる。あをくかきまゆをした女が圓陣をつくつて節うつしをなし、雲髻の美人が儼然と列をなして舞ふ。空騎は馬を立ててるまに山は暮れる、いざとて舟をこぎもどせば滿船香しきかとあやしまれる。李君にまをすが、あなたはおくさまをもつておいでになる、どうか野らにすんでゐる鴛鴦のまねなどなさらぬやうに。

送何侍御歸朝(一)　【原注】李梓州泛舟。筵上作（李は一に章に作る）

何侍御が朝に歸るを送る　【原注】李梓州舟を泛ぶ、筵上にて作る

舟楫諸侯餞(二)。車輿使者歸(三)。　舟楫、諸侯餞す、車輿、使者歸る。

山花相映發(四)。水鳥自孤飛(五)。　山花相映じて發く、水鳥自から孤飛す。

春日垂霜鬢(六)。天隅把繡衣(七)。　春日、霜鬢垂る、天隅、繡衣を把る。

故人從此去(八)。寥落寸心違(九)。　故人此れより去る、寥落、寸心違ふ。

【字解】【一】何侍御　侍御史何某。【二】舟楫　舟や楫で江にうかぶ。【三】歸朝　朝廷へかへる。【四】諸侯　李梓州をさす。【五】車輿　くるま、かご、陸路ののりもの。【六】使者　侍御史をいふ。【七】相映　繡衣とうつろふをいふ。【八】水鳥　「さぎ」の類、暗にみづから比す。【九】垂霜鬢　しもおきたるびんのけをたれる、自己をいふ。【一〇】天隅　天のすみ、天涯といふ類、梓州の地をさす。【一一】把繡衣　繡衣はしばしば前にみゆ、御史のきもの、把とは別れを惜みて之を手にとるなり。【一二】從此　此の時から。【一三】寥落　さびしきさま。【一四】故人　何侍御。【一五】寸心違　事、我が心とたがふ、自己は歸りたくおもひつつかへれぬなり。

【題義】侍御史の何某が朝廷へかへるのを送つた詩。梓州の刺史李が涪江に舟をうかべて送別の宴をひらいた、その宴席での作である。廣德元年春の作。

【詩意】諸侯の身分である李が舟楫でもつて江ではなむけする。御史である使者何某は陸を車でかへるのである。途中では山中の花が侍御の衣にうつろうてひらいてゐるだらう。いまここでは水鳥がひとりでにただひとつ飛んでゐる。自分はこの春日にあたり霜おいた鬢の毛を垂れて、天のすみで旅立つ侍御の繡衣を手にとつて別れを惜しむ。おなじみの君はこれからたち去るが、自分はさびしくて

もぶことがくひちがつてしまつた。

江亭送眉州辛別駕昇之得蕪字

江亭にて眉州の辛別駕昇之を送る、蕪の字を得たり

柳影含雲幕。江波近酒壺。　柳影、雲幕を含む、江波、酒壺に近し。
異方驚會面。終宴惜征途。　異方、會面に驚く、終宴、征途を惜しむ。
沙晩低風蝶。天晴喜浴鳧。　沙晩れて風蝶低れ、天晴れて浴鳧喜ぶ。
別離傷老大。意緒日荒蕪。　別離、老大を傷む、意緒日々に荒蕪す。

【字解】【一】江亭　閬州の江亭ならんといふ。【二】眉州　地名、成都の西南にあり。【三】辛別駕昇之　別駕の官たる辛昇之。【四】雲幕　たかくはつたまく。【五】異方　他郷。【六】終宴　宴の終るとき。【七】惜征途　たびぢにゆくことををしむ。【八】沙晩　江べりの沙がくれかかる。【九】低風蝶　低はひくくとぶこと、風蝶は風をうけた「てふてふ」。【一〇】意緒　こころ。【一一】荒蕪　あれてくさだらけになる。

【題義】閬州の江亭で眉州の別駕である辛昇之を送つた詩。廣德二年閬州にての作ならん。

【詩意】柳のかげは高く張つた幕をつつまんばかりにしだれかかり、江の波は酒つぼをならべたそばにわきたつてゐる。こんな他郷で君に面會したことを驚くとともに宴はてて君がすぐたびぢにのぼることを惜しくおもふ。もはや江べりの沙はらもくれかけて風をうけた蝶蝶がひくくとび、天はすつかり晴れて浴してゐる鳧がよろこんでゐる。別れをしながらまた自分のとしよつたことをもかなしみいたむ、これではこころは日日あれはててゆくのみである。

行次鹽亭縣。聊題四韻。奉簡嚴遂州・蓬州・兩使君・咨議諸昆季

行次鹽亭縣に次り、聊か四韻を題し、嚴遂州・蓬州の兩使君・咨議諸昆季に簡し奉る

馬首見鹽亭。高山擁縣青。　馬首、鹽亭を見る、高山、縣を擁して青し。
雲溪花淡淡。春郭水泠泠。　雲溪花淡淡たり、春郭水泠泠たり。
全蜀多名士。嚴家聚德星。　全蜀、名士多し、嚴家、德星聚まる。
長歌意無極。好爲老夫聽。　長歌、意極まり無し、好し老夫が爲に聽け。

【字解】【一】次　やどる。【二】鹽亭縣　梓州の東九十里にあり。【三】四韻　この八句の五言律詩をさす。【四】奉簡　てがみとしてやる。【五】嚴遂州蓬州兩使君　遂州の刺史嚴某と、蓬州の刺史嚴某と。遂州は今潼川府に屬す、蓬州は順慶府に屬す。【六】咨議諸昆季　昆季は兄弟をいふ、咨議は官名、鹽亭の人嚴震、字は遐聞といふもの肅宗の朝に王府の諮議參軍となる、其の同族嚴礪なるもの後に德宗の朝に山南西道の節度使となる、咨議昆季とは震・礪・をさすならんといへり、遂州・蓬州・の刺史の名は詳ならず。【七】擁　だきかかへる。【八】聚德星　漢末に陳寔といふもの子姪とともに荀淑父子のところにいたる、時に德星聚まる。太史奏す、五百

里内に賢人の聚まるあらんと。これ賢人をさしていふ。【九】長歌　ながくふしつけてうたふ。【一〇】老夫　自己をさす。

【題義】梓州から東へとでかけて鹽亭縣にやどり、この四韻八句の詩をつくつて嚴遂州・嚴蓬州のふたりの刺史・諮議參軍をしてゐる嚴氏の諸兄弟にてがみとしてやつた詩。廣德元年鹽亭にての作。

【詩意】自分ののつてゐる馬の首さきに鹽亭縣が見られる、縣は高い山に青くかこまれてゐる。やうやくちかづいてみると雲のゐる溪にはあはく花がさいてをり、春の時節の城郭には水が泠泠とおとたててながれてゐる、いつたい蜀中全體には名士が多いが、ことに嚴氏の家には賢人があつまつてをる。自分はいま極まりなき意をこめて長歌するが、どうかそのうたをわたしのためにきいてくれたまへ。

倚杖(一)　【原注】鹽亭縣作

杖に倚る　【原注】鹽亭縣にて作る

看花雖郭內。倚杖卽溪邊。
花を看るは郭內なりと雖も、杖に倚るは卽ち溪邊なり。

山縣早休(二)市。江橋春聚船。
山縣、早く市を休む、江橋、春、船を聚む。

狎(四)鷗輕白浪。歸雁喜青天。
狎鷗、白浪を輕んじ、歸雁、青天を喜ぶ。

物色(七)兼(八)生意。淒涼(一〇)憶(一一)去年。
物色と生意と、淒涼、去年を憶ふ。

【字解】【一】「倚杖」題の二字は詩中の倚杖の二字をぬきだして用ひしに止まる。【二】休市　交易をやめる。【三】聚船　民の多きなり。【四】狎鷗　なれたるかもめ。【五】輕　なんともおもはぬ。【六】歸雁　北へかへる「かり」。【七】物色　景物のさま。【八】兼「と」。【九】生意　生活しつつあるこころもち、鷗雁についていふ。【一〇】淒涼　かなしきさま。【一一】憶去年　去年亂を避けるためここをとほりしなり、そのときは物色生意ともにことしほどのどかではなかりしなり。

【題義】鹽亭縣の溪邊で杖によつてながめたときのことをよめる詩。前詩とおなじく廣德元年春、梓州より鹽亭縣にいたりしときの作。

【詩意】花を看たのは郭の內であつたが、杖によつてながめるのは溪流のほとりである。ここでみると山間の縣であるだけに早く貨物の交易をやめてしまひ、江の橋のところには春にあたつて多くの民船があつまつてゐる。なれたかもめは平氣で白浪のあるところにうかび、北へかへる雁ははれたあをぞらをよろこんで飛んでゆく。いまはかやうにのどかであるが、物の樣子といひ、またその生きごころちといひ去年はどんなであつたか、自分はものがなしく去年のさまをおもひだすのである。

惠義寺送王少尹赴成都得峰字

惠義寺送王少尹赴成都得峰字

惠義寺にて王少尹が成都に赴くを送る、峰の字を得たり

苒苒谷中寺。娟娟林表峰。(一)(二)

苒苒たり谷中の寺、娟娟たり林表の峰。

(四)闌干上處遠。(五)結構坐來重。(七)闌干上る處に遠く、結構坐し來れば重なる。
(八)騎馬行春徑。(九)衣冠起暮鐘。馬に騎つて春徑に行き、衣冠、暮鐘に起く。
(一一)雲門青寂寂。此別惜相從。雲門青くして寂寂たり、此の別、相從ふことを惜しむ。

【字解】【一】王少尹　成都府少尹王某。【二】苒苒　草の盛なる貌。【三】娟娟　うつくしきさま。【四】闌干　石段路のわきの「らんかん」。【五】結構　石段のくみたて。【六】坐來　坐とあれどもそれをふむことなるべし。【七】重　級の多きをいふ。【八】騎馬　賓主ともにいふ。【九】衣冠　衣冠をつけたりつばな役人、主として王少尹についていふ。【一〇】起暮鐘　くれのかれの音におどろいて起ちあがる。【一一】雲門　雲のゐる絶崖、寺をさす。【一二】青　暮色をいふ。【一三】惜相從　もすこしともどもに居たしとおもふなり。

【題義】惠義寺において成都府少尹王某が成都に赴任するのを送つた詩。廣德元年春、梓州にての作なるべし。

【詩意】草のしげつた谷の中の寺。うつくしく林のうへにあらはれてゐる峰。路にある石段のらんかんはのぼつてゆくとなかなか遠く、それをふまへてゆくとくみたてはよほどの級層がかさなつてゐる。共に馬にのつて春のこみちをあるいてかたりあふうちに、いつしか夕暮の鐘がなりだすので官服をきたものはおどろいてたちあがる。雲門も暮色が青くとざしてひつそりとする。このわかれはまだなごりがつきぬ、もすこしいつしよにゐたいものだとをしくおもはれる。

惠義寺園送辛員外。惠義寺の園にて辛員外を送る

朱櫻此日垂朱實。郭外誰家負郭田。萬里相逢貪握手。
高才仰望足離筵。

朱櫻此日朱實垂る、郭外誰が家ぞ負郭の田。萬里相逢うて握手を貪る、高才仰望離筵足る。

此の篇、及び次の「又送」の篇は卞圜・吳若・黃鶴の本にありとのことなるが恐くは贋作ならん。解釋を省略す。

又送　又送る

雙峰寂寂對春臺。萬竹青青照客杯。細草留連侵坐軟。
殘花悵望近人開。同舟昨日何由得。竝馬今朝未擬迴。

雙峰寂寂春臺に對す、萬竹青青客杯を照らす。細草留連すれば坐を侵して軟かに、殘花悵望すれば人に近づいて開く。同舟昨日何に由りてか得む、竝馬今朝未だ迴らむと擬せず。

直到綿州始分首。江邊樹裏誰與共來。

直ちに綿州に到りて始めて首を分つ、江邊樹裏誰と共にか來らむ。

巴西驛亭觀江漲。呈竇十五使君。二首

巴西の驛亭にて江漲を觀、竇十五使君に呈す。二首

〔一〕

宿雨南江漲。波濤亂遠峰。
孤亭凌噴薄。萬井逼春容。
霄漢愁高鳥。泥沙困老龍。
天邊同客舍。攜我豁心胸。

【字解】〔一〕巴西驛亭　巴西は綿州をさす。〔二〕江漲　涪江のみなぎり。〔三〕竇十五使君　某州の刺史竇某なり、竇はここへ客寓したるものにて此地の刺史には非るなり。〔四〕宿雨　まへのばんからの雨。〔五〕南江　城南の江水。〔六〕亂遠峰　波濤も峰のごとくみゆるゆゑ遠方の峰とはどれがまことの峰かとまがふ。〔七〕孤亭　卽ち江亭。〔八〕噴薄　水氣のわきたつさま。〔九〕萬井　城中の人家をいふ。〔一〇〕春容　水のぶつつかるこゑのさま。〔一一〕霄漢　あをそら、あまのがは。〔一二〕愁　水勢におそれてうれふる。〔一三〕困　水がでて安居を失はんとす、故に困す。〔一四〕天邊　天のはて。〔一五〕同客舍　ともに客舍すまひをしてゐる。客寓の身なるをいふ、同一家屋に住むにはあらず。

【題義】巴西すなはち綿州の驛亭で江水のみなぎるをみて竇使君にたてまつつた詩。廣德元年春、綿州にての作。

【詩意】前晩からの雨で南の江が出水になり、波濤がわきたち遠方の峰とはどれがまことの峰かわからぬほどになつた。この亭はその水のわきたつてゐるところをしのいで高處にあり、ここでみると城中萬家はとどろく水勢にごくくつついてゐる。そらでは高くとんでゐる鳥も心配をし、泥沙では老龍も居處を失はんとしてこまつてゐる。竇君は自分と天涯に同じく客寓してゐる人であつて、自分をつれてこの水のありさまをみせてくれたので自分の胸はひろびろとした樣な感がある。

〔二〕

轉驚波作惡。卽恐岸隨流。
賴有盃中物。還同海上鷗。
關心小剡縣。傍眼見揚州。
爲接情人飲。朝來減片愁。

【字解】〔一〕作惡　あれること。〔二〕賴　よる、おかげ、「幸に」とよむを便とす。〔三〕盃中物　酒をいふ。〔四〕同　同じく居るをいふ、「列子」の海上の人鷗鳥を好むものありて之となれゐたりとの事を用ふ。〔五〕關心小剡縣　關心はこころにかけること、剡縣は今浙江省紹興府嵊縣、山水の美を以て稱せらる、「小とす」とは之を重くみゐをいふ。〔六〕傍眼　よそめにみる、これも輕視することなり。〔七〕揚州　大江の經る所にして水勢壯なるところ。〔八〕接　接受する。〔九〕情人　有情の人、なさけゐるひと、竇をさす。〔一〇〕飲　さけをのませること。〔一一〕片愁　一片の愁心。

【詩意】波がこんなに猛烈な勢をたくましくするにはいよいよ驚かれる、岸がいまにも水勢に隨つて流れさりはせぬかと氣づかはれる。幸に盃中の酒があり、また海上（水上）の鷗となかまになつてあそんでゐる。この水勢をみては、ひごろ氣がかりにしてゐた剡縣をも小さしとしてゐる氣になり、揚州などもよそめにみる氣になる。さうして情愛ある主人の酒のおもてなしをうけたため、自分はけさから平生一片の愁心が減じてしまつた。

又呈賓使君

向晩波微綠。連空岸却青。
日兼春有暮。愁與醉無醒。
漂泊猶杯酒。踟躕此驛亭。
相看萬里外。同是一浮萍。

又賓使君に呈す

晩に向つて波微しく綠なり、空に連りて岸却つて青し。
日と春と暮るる有り、愁、醉と醒むること無し。
漂泊にも猶杯酒、踟躕すこの驛亭。
相看る萬里の外、同じく是れ一浮萍。

【字解】【一】青　暮色をいふ。【二】兼　「と」。【三】踟躕　ためらふ貌。【四】浮萍　うきたる水くさ、ただよふをいふ。

【題義】また賓使君にたてまつつた詩。前の「觀江漲」の詩と同時の作。

【詩意】ひぐれに向つて波がすこし綠になつた、空につづいて岸の方はかへつて青みをおびてきた。

太陽と春とには暮れるといふことがあるが、自分の愁と醉とには醒めるといふことがない。漂泊の境遇でもやつぱり杯酒を手にして、この驛亭でぐづぐづしてゐる。おたがひは萬里のはてで面會して、おなじやうに浮き草の身であるのだ。醉つてくらすのも不思議ではあるまい。

陪王漢州留杜綿州泛房公西湖

王漢州が杜綿州を留めて房公の西湖に泛ぶに陪す

舊相恩追後。春池賞不稀。
闕庭分未到。舟楫有光輝。
政化蕁絲熟。刀鳴鱠縷飛。
使君雙皂蓋。灘淺正相依。

【字解】【一】王漢州　漢州の刺史王某、漢州は成都の東北にあり、綿州への途中にあり。【二】留　ひきとめること。【三】杜綿州　綿州の刺史杜某。【四】房公西湖　この湖は漢州にあり、上元元年八月に房琯漢州の刺史に任ぜられてこの湖をうがつ、一に西湖といふと。【五】舊相　もとの宰相、房琯をさす、琯は宰相をやめられて漢州へ刺史としてだされしなり。【六】恩追　琯は上元元年八月漢州刺史に任ぜられ、寶應二年（卽ち廣德元年）四月に特に刑部尚書に進められる。此詩は春のことをいひたるを以て之を見れば四月以前に召されしなり、恩追とは一たび地方へだしたものをあとからおひかけて恩典を加へられしをいふ。【七】賞不稀　たびたび春

池のけしきを賞した。蓋し王漢州の宴に陪せしならん。【八】 闕庭　天子のごもん、おには。【九】 分未到　そこへゆけぬことを本分とかんがへてゐる。【一〇】 有光輝　王漢州の舟の宴ゆゑ之をほめていふ。【一一】 豉　みそまめ、じゆんさいにつけてたべるものなり。【一二】 化　できあがること。【一三】 蓴絲　ほそくて絲のやうな「じゆんさい」。【一四】 刀　料理につかふかたな。【一五】 鱠縷　ほそづくりの「なます」、いきづくり。【一六】 使君　刺史をさす。【一七】 雙皂蓋　一對のくろき車蓋、一對とは王と杜との二人をいふ。【一八】 灘淺　水流のあさきところ、けだしそこに舟をとどむるならん。【一九】 相依　車蓋相依る、依るとはひつつきあふこと、なかのよきことをいふ、いかに灘淺くとも水中にては車蓋よりあふはずなきも車蓋をいふは單に刺史の身分をいふものにて交情の密なるを形容するなり。

【題義】漢州の刺史王君が綿州の刺史杜君をひきとめて舟を房公のうがつた西湖に泛べてさかもりをしたとき、その席に加はつてよめる詩。廣德元年春、漢州に至りしときの作。

【詩意】もとの宰相房公が中央へお召しかへしになつてからも自分はこの春の池ではたびたび風景を賞した。自分は朝廷の方へゆけぬのはあたりまへだとかんがへてゐる。ここで舟あそびの宴にあふことはまことに光輝あることだ。けふは、みそもできてじゆんさいも熟してたべどきであり、庖刀の音がして飛ぶがごとくさかなのほそづくりがこしらへられる。さうしてあさせのところの舟中でふたりの刺史どのがくつつきあうてしたしく酒をのみかはされる。

得房公池鷲[一]

房公が池の鷲を得たり

房相西池鷲一群。
眠沙泛浦白於雲。
鳳凰池上應回首。
爲報籠隨王右軍。

房相が西池の鷲一群、
沙に眠り浦に泛び雲よりも白し。
鳳凰池上應に首を回らすべし、
爲に報せよ籠は王右軍に隨へりと。

房琯につげよ。【五】 籠隨王右軍　王右軍は晉の右軍内史王羲之なり、羲之は能書を以て著はる、性、鷲を好む、山陰の曇礦村に道士ありよき鷲十あまりを養ふ、羲之往て之をなにかと易へんことを求む、道士いふ君若しよく道德經兩章を書せばすべて之をたてまつらんと、羲之とどまること半日、爲めに寫し畢り、鷲を籠にして歸る。詩句の籠は鷲をいれたかごをいふ、隨とは王右軍のところへいつたといふこと、王右軍は作者自ら比す。

【題義】房公がうがつた漢州西湖の鷲を得たことについてよめり。廣德元年漢州にての作。

【詩意】房公の西池のひとむれの鷲鳥。それは沙のうへに眠つたり、浦べにうかんだりして雲よりも白い。房はこの鳥とはなれて都へゆかれたが、都の中書省の鳳凰池でもつてさだめて漢州の方へかうべをむけてこの鳥のことをかんがへてをらるるであらうが、どうぞわたしのために鷲鳥をいれた籠は王右軍（作者自己）の方へいつたとつげてもらひたい。

【字解】【一】 房公池　漢州の西湖をさす。【二】 鷲　がてう。【三】 鳳凰池　晉の荀勗が故事、已にみゆ。池は中書省をさす、房琯はさきに中書省にあり、故に之を用ひて琯のことをいふ。【四】 爲報　わがために

答楊梓州[一]

楊梓州に答ふ

悶到房公池水頭。　坐逢楊子鎮東州。　却向青溪不相見。
迴船應載阿戎遊。

悶して到る房公池水の頭、坐ながら逢ふ楊子東州に鎮するに。却つて青溪に向つて相見ず、迴船應に阿戎を載せて遊ぶべし。

此篇古人の解にも服する能はず。余も亦私見なし。疑はしきを闕き、賢者の教を待つ。

舟前小鶩兒(一)　【原注】漢州城西北角官池作

舟前の小鶩兒　【原注】漢州城の西北の角の官池にて作る

鶩兒黃似酒。對酒愛新鶩。　鶩兒黃なること酒に似たり、酒に對して新鶩を愛す。
引頸嗔船逼。無行亂眼多。　頸を引て船の逼るを嗔り、行無くして眼を亂ること多し。
翅開遭宿雨。力小困滄波。　翅開きて宿雨に遭ひ、力小にして滄波に困す。
客散層城暮。狐狸奈若何。　客散ず層城の暮、狐狸、若を奈何。

【字解】【一】鶩兒　がてうのこども。【二】引頸　えりくびをさしのべること。【三】無行　行は行列、無行とは次第もなきこと。【四】亂眼　めさきをみだる。【五】翅開遭宿雨　翅開は遭宿雨の結果なり、前夜の雨にであうたために翅がひらける。【六】滄波　ひろき水のなみ。【七】客散　舟遊の人人のちらばること。【八】層城　漢州のたかいしろ。【九】若　汝、狐狸をさしていふ。【一〇】奈何　いかにせん、若をいかにせんを奈若何とかき奈と何のあひだに「若」をいれるなり。

【題義】房公湖にあそんで舟の前にゐる鶩鳥のこどもをみてよめり。廣德元年漢州にての作。

【詩意】鶩鳥のひなは黃いろなことは酒の樣だ。酒にむかうては酒に似てゐるわかびなはことにかはいい。ひなはえりくびをさしのべて船がちかよるのをいかつたり、行列もなくあるきたててみる人のめさきをみだすことが多い。前夜の雨にあうては翅がくつつかずにあいてをり、まだ力がすこししかなくて波にぶつつかるとこまつてゐる。城がくれかかると舟遊びの人人はみな散り散りにかへつてしまふ。このとき狐狸がでるがそいつをどうしようか、こまつたものだ。

官池春雁二首

官池の春雁。二首

〔一〕

自古稻粱多不足。　古より稻粱多く足らず、
至今鸂鶒亂爲群。　今に至りて鸂鶒亂れて群を爲す。
且休悵望看春水。　且悵望春水を看るを休めよ、

【字解】【一】官池　卽ち房公湖【二】稻粱　いれ、よきいれ。【三】鸂鶒　をしどり。【四】看春水　春の水をみては雁は北へかへられればな

更恐歸飛隔暮雲。[五]　更に恐る歸飛暮雲に隔てられむことを。

のとほざかるをいふ。

【題義】房公湖の春の雁をみてよめり。自己の境遇を托したるなり。前詩とおなじく廣德元年春の作ならん。

【詩意】むかしから稻粱のたべものは足らぬがちのものだ、それに今日に至つても「をしどり」ががやがや羣をなしてをる。どうして雁のたべるものがあるものか。まあまあうらめしくながめて春の水を看、ここからはなれたくない樣な樣子をすることをやめよ、ぐつぐづしてゐたならかへりに飛ぶと途中で日がくれ、雲にへだてらるるといふ恐れがあるぞ。

〔二〕

青春欲盡急還鄉。[一]
紫塞寧論尙有霜。[二]
翅在雲天終不遠。[三][四]
力微矰繳絕須防。[六][七]

〔二〕

青春盡きむと欲す急に鄉に還らむ、
紫塞寧ぞ論ぜむ尙霜有るを。
翅在り雲天終に遠からず、
力微なり矰繳絕須らく防ぐべし。

【字解】〔一〕紫塞　紫色瓦にて築きたるとりで、山西太原府雁門關下に在り。〔二〕有霜　北方は寒し、故に春にあたりても霜あり。〔三〕翅在　つばささへ存在すれば。〔四〕雲天　雲のあるそら。〔五〕矰繳　いぐるみ、鳥を射る器械。〔六〕絕　はなはだ。〔七〕防　防禦。

【詩意】春も盡きかけた、いそいで故鄉にかへらう。北のかた紫塞の方にはまだ霜があるが、そんなことは論ずるにおよばぬ。翅さへ存在してゐれば雲のゐるそらも結局は遠いといふことは無い。ただ飛ふ力がすこしで弱いからいぐるみに射おとされることは十分氣をつけて防がねばならぬ。

投簡梓州幕府。兼簡韋十郎官[一]

梓州の幕府に投簡し、兼ねて韋十郎官に簡す

幕下郎官安穩無。[四][五]　幕下の郎官安穩なりや無や、
從來不奉一行書。[六][七]　從來、奉せず一行の書。
固知貧病人須棄。[八][九]　固知る貧病、人の須らく棄つべきを、
能使韋郎跡也疎。[一〇][一一]　能く韋郎をして跡也疎ならしめむや。

【題義】梓州の幕府にゐる人人のところへてがみとしてやり、兼ねて韋某にてがみとしてやつた詩。廣德元年漢州にての作。

【字解】〔一〕投簡　てがみとしてやる。〔二〕幕府　州の幕僚。〔三〕韋十郎官　郎の官なる韋某。〔四〕幕下郎官　これはひろく州の幕僚たる郎官の人人をさす。〔五〕安穩　穩を一に隱に作る、安穩はお だやか、無事。〔六〕無　いなや。〔七〕不奉　奉とは先方の書をうけるをいふ。〔八〕書　てがみ。〔九〕貧病　びんばふと病氣、作者自己をいふ。〔一〇〕能使　能の字反語としてよむ。〔一一〕韋郎　韋十をさす。〔一二〕跡也疎　跡は行ひをいふ、也は亦なり、疎は疎音、こちらととほざかるをいふ。

【詩意】そちらの幕下の郎官諸君、諸君は無事であるかどうか。これまで諸君から一行の手がみの文をもらつたことがない。自分は貧にしてかつ病めるものであるから人から棄てらるべきものだといふことはもとより知つてゐるが、韋郎までをも疎音にさせるといふことはどうしてありうるか、これはできぬこととおもふ。

漢川の王大錄事が宅にて作

漢川。王大錄事宅作

南溪老病客。相見下肩輿。南溪の老病客、相見て肩輿より下る。
近髮看烏帽。催蓴煮白魚。髮に近きて烏帽を看、蓴を催して白魚を煮る。
宅中平岸水。身外滿牀書。宅中平岸の水、身外滿牀の書。
憶爾才名叔。含悽意有餘。憶ふ爾が才名の叔、含悽、意餘り有り。

【字解】【一】漢川　仇氏は漢川とし漢川は漢中なりとしてときたり、然れども此詩は郭知達本に見え、郭本には川を州に作れり、川は州の誤なるべし、余は漢州としてとく。【二】王大錄事　大は長男をいふ、この人は王氏の長男ゆゑ大といふ、錄事は官名、錄事參軍をいふ、王大錄事とは漢州の錄事の官なる王某、作者、詰王錄事許修草堂貲詩あり、かの王錄事と同一人なるべし。【三】南溪老病客　作者自己をいふ、南溪とは成都の浣花溪をいふ、そこに草堂を置くゆゑに南溪の客といふ。【四】肩輿　人のかたでかつぐこし。【五】近髮　作者のかみの毛にちかよる。【六】看烏帽　くろきばうしをみる、あたまに白髮のあるなしを注意してみることをいへり。【七】催蓴　じゅんさいをだせと催促する。【八】爾　汝、王錄事をさす。【九】才名叔　舊解に叔とは尊者の稱なりとし、王は作者より尊位のものゆゑかくいへりと爲せり。しかし「才名の叔」とはきこえがたき語法ならずや。余は叔は寂の誤ならんと考ふ、今寂としてとく、才名寂とは才名世間に聞ゆべきにきこえず寂寞たるをいふ。【一〇】含悽　ものがなしさをふくむ。【一一】有餘　十分にありすぎる。

【題義】漢州の錄事王某が宅にて作りし詩。廣德元年の作。

【詩意】南溪の客で老病である自分は主人をたづねてきてかごからおりて面會した。主人はわたしの頭髮にちかよつて烏帽をながめ（わたしのしらがを氣にし）、家のものには蓴菜を催促し、白い魚を煮させて肴としてもてなしてくれる。主人の宅中は岸と平になるばかりの川水のそばであり、からだを容れる以外は書架ぢういつぱいの書物である。これほどのおまへがさつぱり世間に才名のきこえぬのはどういふものだ、自分はそれをおもうてかなしさを含むこころが十分にありあまるほどである。

短歌行。送祁錄事歸合州。因寄蘇使君

前者途中一相見。前者途中一たび相見る、
人事經年記君面。人事經年君が面を記す。

【字解】【一】短歌行　古樂府の題に長歌行・短歌行・あり、短歌はふしみじかくうたふ。【二】祁錄事

(七)後生相勸何寂寥。　後生相勸むる何ぞ寂寥なる、
(九)君有長才不貧賤。」　君長才有り、貧賤ならず。
君今起柂春江流。　君今柂を起す春江の流、
余亦沙邊具小舟。　余も亦沙邊に小舟を具ふ。
(一四)幸爲達書賢府主。　幸に爲に書を達せよ賢府主、
(一六)江花未盡會江樓。」　江花未だ盡きざるに江樓に會せむ。

望だから勉強せよ」などいふなり。【八】寂寥　さびし、人物乏しきをいふ。【九】君　祁をさす。【一〇】長才　他人にまさつた才。【一一】不貧賤　富貴となるべきをいふ。【一二】起柂　かぢをおこす、舟を漕ぎだすこと。【一三】春江　春時の涪江。【一四】幸爲「爲めに」は「我がために」の意。【一五】賢府主　かしこい御主人、蘇使君をさす、刺史は錄事の長官なり。【一六】江花未盡　春、花の散りきらぬうちに。【一七】江樓　合州の江邊の樓。

【題義】みじかくうたふうた。之を作つて錄事祁君が合州へかへるのを送り、ついでに合州の刺史たる蘇君に寄せた。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】君とはこのまへ途中でいちどおめにかかつたが、そののち久しく人事にとりまぎれてゐたがいまお逢うてみるとやはり君のかほをおぼえてゐる。ちかごろのわかものには之を勸奬すべきほどの人物がなくてさびしいのだが、君は人なみすぐれた才をもつてゐるからいつまでも貧賤でゐることは

錄事の官祁某。【三】合州　今重慶府の北部にある州の名、ここにては涪江と他の江とが合流す。【四】蘇使君　合州の刺史蘇某。【五】人事經年　幾年か人事にまぎれたがの意。【六】記　記憶する。【七】後生相勸　後生はわかもの、後輩をいふ、相勸とはこちらからその者に向て勸奬の言を爲すなり、「おまへは前途有

ない、きつと富貴の身分になるだらう。」　君は自分もかはの沙はらに小舟を具へてゐる、(それでかはをくだらうとおもうてゐるのだ)。君はあちらへいつたら幸にわたしのためにてがみを御主人(蘇君)へとどけてもらひたい、その意味は江べりの花が散つてなくならぬうちにそちらの江樓で會合しようといふのだ。

送韋郎司直歸成都

韋郎司直が成都に歸るを送る

(一)竄身來蜀地。同病得韋郎。　竄身、蜀地に來る、同病、韋郎を得たり。
天下兵戈滿。江邊歲月長。　天下、兵戈滿つ、江邊、歲月長し。
別筵花欲暮。春日鬢俱蒼。　別筵、花暮れむと欲す、春日、鬢俱に蒼たり。
(四)爲問南溪竹。抽梢合過墻。　爲に問へ南溪の竹、抽梢合に墻を過ぐべし。

【原注】余草堂在成都西郭

【字解】【一】韋郎司直　前に簡韋十郎官詩あり、一本に官の字なしといふ、しからば此詩の韋郎は韋十郎と同人かとおもへども明ならず。韋郎の郎はただ男子を稱する言なり、司直は官名。【二】竄身　身をのがれかくす。【三】長　久しきをいふ。【四】爲　我がために。【五】南溪　成都の浣花溪。【六】抽梢　ぬきでたこずゑ、合　まさに云云すべし。

【題義】司直韋某が成都へかへるのを送る詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】自分は身をのがれかくすために蜀の地へ來て、同病相憐むものに韋君といふものを得た。いま天下には兵戈が滿ちてをり、自分は江べりで久しく歲月をへた。この送別の席では花が暮れかかつてをり、春の日にあたつて鬢の毛はおたがひにごましほになつてゐる。君は成都へいつたらわたしのために南溪の竹がどんなになつてゐるかたづねてくれたまへ、そのぬきでたこずゑはもうかきよりうへにでてゐるはずだ。

寄題江外草堂

我生性放誕。雅欲逃自然。
嗜酒愛風竹。卜居必林泉。
遭亂到蜀江。臥痾遣所便。
誅茅初一畝。廣地方連延。
經營上元始。斷手寶應年。
敢謀土木麗。自覺面勢堅。
亭臺隨高下。敞豁當清川。
惟有會心侶。數能同釣船。
干戈未偃息。安得酣歌眠。
蛟龍無定窟。黃鵠摩蒼天。
古來賢達士。寧受外物牽。
顧惟魯鈍姿。豈識悔吝先。
偶攜老妻去。慘澹凌風煙。
事跡無固必。幽貞貴雙全。
尚念四小松。蔓草易拘纏。
霜骨不堪長。永爲隣里憐。

江外の草堂に寄せ題す

我生れて性放誕なり、雅に自然に逃れむと欲す。
酒を嗜み風竹を愛し、居を卜すれば必ず林泉にす。
亂に遭ひて蜀江に到る、痾に臥して所便に遣る。
誅茅初め一畝、廣地方に連延たり。
經營す上元の始、手を斷つ寶應の年。
敢て土木の麗なるを謀らむや、自から面勢の堅きを覺ゆ。
亭臺、高下に隨ふ、敞豁、清川に當る。
惟會心の侶有り、數〻能く釣船を同じくす。
干戈未だ偃息せず、安ぞ酣歌して眠ることを得む。
蛟龍、定窟無く、黃鵠、蒼天を摩す。
古來賢達の士、寧ぞ外物の牽を受けむ。
顧みて惟ふ魯鈍の姿、豈悔吝に先んずるを識らむや。
偶〻老妻を攜へ去りて、慘澹、風煙を凌ぐ。
事跡、固必無く、幽貞、雙全を貴ぶ。
尚念ふ四小松、蔓草、拘纏し易し。
霜骨、長ずるに堪へず、永く隣里の憐みを爲さむことを。

【字解】【一】江外草堂　江は錦江、草堂は成都浣花溪の草堂。【二】放誕　やりつぱなし。【三】雅　常なり。【四】蜀江　蜀の錦江。【五】痾　ながきやまひ。【六】遣所便　自己の便とする所に於て病閑を遣る。【七】誅茅　かやをきりて、屋根を葺く。【八】連延　まちかにつづいてゐる。【九】經營　こしらへかける。【一〇】上元　年號の名、(上元元年は西紀七六〇)。【一一】斷手　しごとをやめる。【一二】寶應　寶應元年は西紀七六二。【一三】面勢　向ふ所と、高下の形勢。【一四】高下　土地のたかいところ、ひくいところ。【一五】敞豁　からりとひらけたこと。【一六】清川　錦江のすんだ水。【一七】惟有　「惟」は唯なり、或は雖に作

る、雖ならば次句までへかけてよみ、安得酣歌眠の句に至て完結す。【一八】 會心侶　心を諒解しあうたなかま。【一九】 偃息　武器なふせやすませる。【二〇】 定窟　きまつたいはや。【二一】 外物牽　牽はつなにてひく、拘束をいふ。【二二】 悔吝先　悔は後悔、吝は恨辱、先とはそのことの起るまへにこちらが舉動するをいふ。【二三】 風煙　けだし風塵といふほどの意。【二四】 固必　固は一のことにこりかたまる、必はきつとそのことでなければならぬとすること。融通のきかぬこと。「論語」の語。【二五】 幽貞　幽はしづかにひつこんでゐること、貞は正しきみちをかたくまもること、易經の語。【二六】 雙全　幽と貞とをふたつとも全くする。【二七】 四小松　草堂に植ゑた四本の小松。【二八】 拘纏　からまりまとふ。【二九】 霜骨。松の幹をいふ。【三〇】 長　生長。【三一】 爲隣里所ヲ憐の略。

【題義】 錦江のそとなる草堂に寄せ題した詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】 自分は生れて性質がやりつぱなしで、いつも自然の世界に逃れようとおもうてゐた。酒をたしみ、風の吹く竹の姿を愛し、すまひを卜するには必ず林泉のあるところに於てした。』 それが兵亂にあうて蜀江へやつてきて、やまひに臥して自分の便とする所に於て病悶を遣ることにした。すなはち草堂を建てたのだが初は一畝の地に茅ぶきを設けたにすぎぬがとなりに廣い地面がつづいてゐた。上元の始からつくりかけ、寶應の年に至つて仕事をやめた。土木のうるはしいことを謀つたのではないがおのづと形勢が堅固らしく感せられる。亭や臺は地勢の高下に隨つて設けられ、からりとしてすんだ川が前面にひらけてゐる。ただ心を知りあうたなかまがきてときどきいつしよに釣船にのつてあそぶ。』 しかし兵亂はまだやまぬのだからどうして酒によひうたをうたうて眠つてゐることができよう。蛟龍にはきまつたいはやはない、黃鵠といふ鳥はあをぞらをこするばかり高くとぶ、たとへばそのごとくむかしから賢達の士はどうして外物の拘束を受けよう。自分は魯鈍な姿のもので賢達の士のやうなわけにはゆかぬ、悔吝の來ぬまへに先んじて行動することなどはわからぬが、偶然に老妻をつれて草堂からたち去つて、ものがなしきうちに風塵のあひだをしのいだのである。自己の行ひには必ずこれでなければならぬといふへばりつきは無く、「易」にいはゆる幽と貞とをふたつとも全うしたいとかんがへるのだ。』 それにつけてもまだ念はれるのはせつかく植ゑた四本の小松のことだ。小松ははびこる草にまつはれやすい、だから霜をしのぐの骨幹も或は生長するにたへずしてあたりの人人の憐む所となつて枯れてしまひはせぬか、これがきがかりである。』

陪章留後侍御宴南樓得風字

章留後侍御陪して南樓に宴す、風の字を得たり

絶域長夏晩。茲樓淸宴同。　絶域、長夏の晩、茲樓、淸宴同じ。
朝廷燒棧北。鼓角漏天東。』　朝廷、燒棧の北、鼓角、漏天の東。』
屢食將軍第。仍騎御史驄。　屢〻食す將軍の第、仍つて騎る御史の驄。

陪章留後侍御宴南樓得風字

本無丹竈術。那免白頭翁。』　本丹竈の術無し、那ぞ免れむ白頭の翁たるを。』
寇盗狂歌外。形骸痛飲中。　寇盗、狂歌の外、形骸、痛飲の中。
野雲低度水。簷雨細隨風。』　野雲低く水を度り、簷雨細かにして風に隨ふ。』
出號江城黑。題詩蠟炬紅。　號を出せば江城黑し、詩を題すれば蠟炬紅なり。
此身醒復醉。不擬哭途窮。』　此身醒めて復醉ふ、途窮に哭せむと擬せず。』

【字解】【一】章留後侍御　章は章彝なる人なり、留後とは留守役なり、節度使が朝廷へかへるとそのあとやくに留後を任命するなり、章彝は梓州に於て東川節度使の留守役を命ぜられたるなり、侍御は侍御史、これも帶びてをるなり。【二】南樓　梓州城の南樓。【三】絶域　かけはなれた地方、蜀地をさす。【四】燒棧　蜀の棧道はむかし漢の張良が燒きはらひしところなり。【五】漏天　蜀には雨多く「漏るる天」ありといはる、邛都縣・僰道縣におのおの漏天ありと稱せらる。【六】將軍　章をさす。【七】御史驄　驄はあたうま、已にしばしばみゆ、御史は章をさす。【八】丹竈術　丹藥をかまどにて錬る術、丹藥黃金をねりうれば不老不死なりとせらる、仙人の術なり。【九】出號　號は號令、章が部下に晩にあたりて命令をだすなり、一方には宴をしても他方には事務を視る。【一〇】題詩　作者のすることをいふ。【一一】蠟炬　らふそく。【一二】哭途窮　阮籍が故事。

【題義】東川節度使の留後であり、また侍御史である章彝がともをして梓州城の南樓でさかもりをしたことをよめり。廣德元年夏、梓州にての作。

【詩意】この遠方の土地での日ながの夏のくれがた。この樓で主人といつしよにさかもりをする。朝廷は遠く棧道の北にあり、鼓角の音はまだ漏天の東に於てたえない。』　自分はたびたび將軍のやしきでごちそうになり、またそのついでに御史の驄までかりて騎り、眷顧をうけてをる、ただ仙人の術をこころえぬから白頭の老人となることは免れがたい。』　いま狂歌しつつ寇盗のやまざるをきき、形骸を痛飲のうちに托してをると、野らの雲はひくくさがつて水をわたり、のきばの雨は風のまにまにこまかくふりそそぐ。』　江ぞひの城もくらくなるので將軍は號令を出す、自分はらふそくの火のあかいところでこの詩をかきつける。このからだは醒めてはまた醉うてゐる、これが自分の現在の生活でこれで滿足して、阮籍のごとく途の窮まつたところへぶつつかつて慟哭するなんどのまねをしようとはおもはぬ。』

臺上得涼字

改席臺能迴。留門月復光。
雲霄遺暑濕。山谷進風涼。
老去一杯足。誰憐屢舞長。
何須把官燭。似惱鬢毛蒼。

臺上、涼の字を得たり

改席、臺能く迴なり、留門、月復光る。
雲霄、暑濕を遺る、山谷、風涼を進む。
老い去つて一杯足れり、誰か憐まむ屢舞ふの長きを。
何ぞ須ひむ官燭を把るを、鬢毛の蒼たるに惱ましむるに似たり。

【字解】〔一〕改席　さかもりをなすに場所をかへること。〔二〕迴　はるか、とほくまでみえるをいふ。〔三〕留門　門にとどまるなり、ここの章家の門にひきつづいて居ること、城門をとざすことをさしとめおくといふ解は取らず。〔四〕雲霄　くも、そら、臺の高きをいふ。〔五〕遣　遺忘の意。〔六〕進　こちらへ送ってよこすをいふ。〔七〕長　久しきをいふ。〔八〕把官燭　燭をとるとはともし火をとるとはあかるくするなり、將軍の宅の燭なれば官燭といふ。〔九〕惱　こまらされること。〔一〇〕蒼　黑白のまじること、ごましほ。

【題義】これは前篇のひきつづきの詩にして、宴席をかへて高臺のうへで飲みなほしたことをのべたり。

【詩意】席がかへられたがまことにとほくまでみることのできる高臺である。ひきとめられて居のこつたが幸と月もひかつてきた。雲霄にちかい高いところだから暑さも濕りけもすつかりわすれるし、山や谷の方からはすずしい風をだんだんよこしてくれる。自分は老いたので酒は一杯でも十分だ、このおやぢのながながと時時舞ひだすのをだれが愛して見てくれようか。ここでは燭をとる必要はない。あかるくされると自分はびんの毛のごましほなのにこまらされるやうな氣がするのである。

送王十五判官扶侍還黔中。得開字

王十五判官が扶侍して黔中に還るを送る、開の字を得たり

大家東征子逐〻子回。
風生洲渚錦帆開。
青青竹笋迎〻船出。
白白江魚入〻饌來。
離別不〻堪無限意。
艱危深仗濟時才。
黔陽信使應稀少。
莫怪頻頻勸酒盃。

【字解】〔一〕王十五判官　判官王某、事歴詳ならず。〔二〕扶侍　母に侍して之を扶くるをいふ。〔三〕黔中　詩中の黔陽なり、今辰州府の地。〔四〕大家　後漢の班昭なり、昭は彪の女にして曹壽(字は世叔)に嫁し、穀をうむ、穀、陳留の長官となるや之に隨ひて洛陽より東のかた陳留に赴き、東征賦を作る。昭はまた「女誡」を著はす、老いて宮中に入り女官等の師となる、女官等之を尊びて大家(家音姑)とよびしとぞ。

大家東征子逐〻子回。　逐の字は隨の字に改むべしとの說あり、しかし改めずとも逐の字のままにても俗用にてはあと

風生洲渚錦帆開。　風生じて洲渚錦帆開く。

青青竹笋迎〻船出。　青青たる竹笋、船を迎へて出で、

白白江魚入〻饌來。　白白たる江魚、饌に入り來る。

離別不〻堪無限意。　離別堪へず無限の意に、

艱危深仗濟時才。　艱危深く仗る濟時の才。

黔陽信使應稀少。　黔陽信使に稀少なるべし、

莫怪頻頻勸酒盃。　怪む莫れ頻頻酒盃を勸むるを。

〔五〕東征　上にみゆ。〔六〕逐子回　逐の字は隨の字に改むべしとの說あり、しかし改めずとも、逐の字のままにても俗用にてはあとからついてゆく義となる、唐人は追〻涼といふべきを逐〻涼といへり。子とは曹穀をさす。ここにては大家を王判官の母に、曹穀を王判官にあてて用ひたり。〔七〕竹笋　笋は「たけのこ」。孟宗といふもの孝行にて、その母笋をこのむ、宗、冬、林中に入りて哀號せしに笋之がために生じたりとの話あり。〔八〕江魚　姜詩が話。詩も孝行のものにて、その母は江の水を飲むことを好み、魚鱠をたしむ、俄にして泉、いへの側にわきいでその味は江の水の如く、かつ毎あさ二匹の鯉を出だせりと。〔九〕饌　食物。〔一〇〕仗　よる。〔一一〕濟時才　時世をすくふの才。〔一二〕黔陽　黔中。〔一三〕信使　手紙をもつてゆくつかひ。

【題義】判官王某がおつかさんのおともをして黔陽へかへるのを送つた詩。廣德元年、夏梓州にて

の作。

【詩意】むかし曹大家がその子について東の方へでかけたごとく、このたび王君のおつかさんは王君のあとについておかへりになる。それで江邊の洲渚に風がおこつてそれとともに錦の帆がかかげられて船がでだす。王君はおや孝行であるからさだめし青青として笋が船をまちうけて出だし、まつしろの江魚が食物のなかに加へらるることがあらう。（孟宗や姜詩のやうに）。自分はこのわかれには限り無きこころもちにたへられぬ、君の樣な人は時世を濟ふ才をもつた人で今の艱危な時節にふかくあてにすべき人なのだがその人がゐなかへかへつてしまふといふのではないか。黔陽といふ遠方ではたよりをする使もいとまれであるであらう、してみればわたしがしきりに酒の杯をおすすめしてもなんの不思議もござるまい。

喜雨

雨を喜ぶ

春旱天地昏。日色赤如血。
農事都已休。兵戎況騷屑。』
巴人困軍須。慟哭厚土熱。

春旱、天地昏し、日色赤くして血の如し。
農事都て已に休す、兵戎況んや騷屑たるをや。』
巴人、軍須に困しむ、慟哭す厚土の熱するに。

滄江夜來雨。眞宰罪一雪。
穀根小蘇息。沴氣終不滅。
何由見寧歲。解我憂思結。』
崢嶸群山雲。交會未斷絶。
安得鞭雷公。滂沱洗吳越。』

滄江夜來の雨、眞宰罪一雪す。
穀根小しく蘇息するも、沴氣終に滅せず。
何に由りてか寧歲を見、我が憂思の結びたるを解かむ。』
崢嶸たる群山の雲、交會未だ斷絶せず。
安んぞ雷公に鞭うちて、滂沱として吳越を洗ふことを得む。』

【原注】時浙右多盜賊

【字解】【一】春旱　はるひでりする。【二】騷屑　安からざる貌。【三】巴人　梓州地方の民。【四】軍須　軍需なり、軍のいりようとするもの、さまざまの物を徵發せらるるなり。【五】滄江　ひろきかは、浩江をいふ。【六】眞宰　造物主、天。【七】罪一雪　ひでりをさせたは天の罪なり、その罪も雨をふらせたがため全く雪ぎきよめたといふなり。【八】蘇息　よみがへりいきつく。【九】沴氣　悪氣。【一〇】寧歲　やすらかなとし。【一一】崢嶸　山の高い貌。【一二】交會　いりまじる。【一三】安得　希望のことば。【一四】雷公　かみなり。【一五】滂沱　雨水のあふれるさま。【一六】吳越　作者の注に浙右に盜賊多しとあり。史によるにいふ、寶應元年八月、台州（浙江省にあり）の人袁晁反し、浙東の州郡を陷れ、廣德元年四月、李光弼之を討つ、と。浙右とは浙西なり、けだし浙西より起りて浙東を陷れしなり。

【題義】雨のふりしことを喜びて作れる詩。廣德元年春、梓州にての作ならん。

【詩意】春ひでりがして天地はまつくらく、太陽の色は赤くて血の樣になつた。農事はすべてをはつ

たりである、まして兵亂があつておちつかぬに於てをやだ。』巴地の人民は軍需をとりたてらるるに苦しみ、大地が熱してゐるのには慟哭しつつある。そこへ江上に夜からかけての雨でこれでやつと造物主も罪ほろぼしをしたといふものだ。ただ穀物の根は少しいきをふきかへした樣だが、惡氣はまだなくなりきらぬ。どうしたらやすらかな歳がらを見て、自分の憂のむすぼれを解くことができるであらう。』あたりをながめると多くの山山の高い雲はたがひにまじはつてまだたえきれはせぬ。どうかして雷公に鞭をくれておしながすほどの雨をふらせ、吳越の地方まで洗ひさつてしまひたいものだ。

述古三首

古を述ぶ　三首

〔一〕

赤驥頓長纓。非無萬里姿。
悲鳴淚至地。爲問馭者誰。
鳳凰從東來。何意復高飛。
竹花不結實。念子忍朝饑。
古來君臣合。可以物理推。

〔一〕

赤驥、長纓に頓す、萬里の姿無に非ず。
悲鳴、淚、地に至る、爲に問ふ馭する者は誰ぞと。
鳳凰東より來る、何の意ぞ復高飛す。
竹花、實を結ばず、念ふ子が朝饑を忍ぶことを。
古來君臣の合、物理を以て推す可し。

賢人識定分。進退固其宜。

賢人、定分を識る、進退固より其の宜なり。

【字解】【一】述古　ふるきいにしへの事をのべ以て今の事を諷するなり。【二】赤驥　くりげの駿馬。【三】頓　つかれること。【四】長纓　ながきひも、ひもがじやまになりてつかれる。【五】萬里姿　一日に萬里をゆくだけの能力あるすがた。【六】爲問　此がためにしてとふ。【七】何意　どんなつもりか。【八】高飛　たかく飛び去る。【九】竹花不結實　鳳凰は竹の實を食すといはる。【一〇】子　おまへ、鳳凰をさす。【一一】朝饑　あさのひもじさ。【一二】君臣合　合とは際會してあふこと。【一三】定分　きまつた本分。【一四】固其宜　固其所レ宜の義、どちらでもよろしきにかなふ。

【題義】此篇は賢人が明君にであはぬことをいへり。此の三首は廣德元年代宗卽位の後、梓州にありての作なるべし。

【詩意】ひもがながすぎてもくりげの駿馬はつかれる、萬里をゆくだけの姿は無いではないが悲鳴して涙が地に垂れる、いつたいこの馬を馭する者はだれであるか。（これは馭者が馭する道を知らぬのである）。また鳳凰が東からやつてきた。どういふつもりなのかそれがまた高く飛び去つてしまうた。竹の花には實がむすばぬし、さだめしおまへは朝ひもじからうがそれをがまんしてゐるのだらう。此の駿馬と鳳凰の道理で推してかんがへれば古來君臣といふものはどうして遇合するものであるかがわかるはずだ。賢い人はきまつた本分をしつてゐるから、進んで仕へるべきときは進んで仕へるし、退いて去るべきときには退いて去つてしまふ。進まうが退かうがどちらでも宜しきにかなうてゐるのである。

〔二〕

市人日中集。於利競錐刀。
置膏烈火上。哀哀自煎熬。
農人望歲稔。相率除蓬蒿。
所務穀爲本。邪贏無乃勞。
舜舉十六相。身尊道何高。
秦時任商鞅。法令如牛毛。

〔二〕

市人、日中に集まり、利に於て錐刀を競ふ。
膏を烈火の上に置く、哀哀自ら煎熬す。
農人歲の稔るを望む、相率ゐて蓬蒿を除く。
務むる所は穀を本と爲す、邪贏は乃ち勞すること無から[むや]。
舜は十六相を擧ぐ、身尊くして道何ぞ高き。
秦の時商鞅に任ず、法令、牛毛の如し。

【字解】〔一〕市人　市ばの人。〔二〕日中　日のさかり。〔三〕錐刀　きり、かたなのさきほどのわづかな利益。〔四〕置膏二句　「莊子」に膏火自煎ルの語あり。〔五〕農人　ひやくしやう。〔六〕稔　さくもつのよくできること。〔七〕相率　ともどもに。〔八〕蓬蒿　よもぎのくさ。〔九〕穀　こくもつ。〔一〇〕邪贏　よこしまなるまうけ、欺僞によりて得る利益をいふ、これは市人の利をさす。〔一一〕無乃勞　あまりにごくらう千萬なことではあるまいか、其事の無用なるをいふ。〔一二〕十六相　八元八愷と稱する十六人のかしこい宰相なり、事は「左傳」（文公十八年）にみゆ。〔一三〕商鞅　衞の國の公子にして秦の孝公に仕へ法によりて秦の富强をはかりし人。〔一四〕如牛毛　法令の密なるをいふ。

【題義】此篇は政治には市利を追ふよりは農を重んずべく、最上は賢德によりて治むるに在りとの意をのべたり。當時第五琦・劉晏・元載・等の宰相が市利を追ひ、法を設けて重稅を取りたるをそしれるなりといへり。

【詩意】市場の人人は日ざかりに集つて、利益にかけては錐刀の小利でも之をきそふ、こんなのはたとへば烈火のうへに膏を置いた樣のものであはれにもじぶんじしんをにるものである。農民はとしがらのいいのをのぞむで、ともどもに草とりをしてはたらく、農民の務むる所は穀物を得るのが本である、之にくらべると市場のものが競爭して不正の手段でまうけを得るのはあまりにごくらうなことではなからうか。（今の政治家はこの市場の利を競ふことを奬勵してゐるものである、それはいかぬ、といふ意ならん。）根本的にいふと、むかし舜は十六人の賢相をあげて用ひた、それで自身は尊くなり、その道は高尙である。秦の時をみよ、秦の孝公は商鞅に一任して法令がむやみに牛毛の如く綿密であつたにすぎぬではないか。

〔三〕

漢光得天下。祚永固有開。
豈惟高祖聖。功自蕭曹來。
經綸中興業。何代無長才。
吾慕寇鄧勳。濟時信良哉。

〔三〕

漢光、天下を得たり、祚の永きは固より開くこと有り。
豈惟高祖の聖なるのみならむや、功は蕭曹より來れり。
中興の業を經綸するに、何の代か長才無からむ。
吾は慕ふ寇鄧の勳、濟時信に良なるかな。

耿賈亦宗臣。羽翼共徘徊。
休運終四百。圖畫在雲臺。

【字解】【一】漢光　後漢の光武帝。【二】祚永　さいはひながし、國運のながくつづいたこと。【三】有開　これをはじめたものがある。【四】高祖　前漢の高祖劉邦。【五】蕭曹　高祖の臣たる蕭何・曹參。蕭何は民を養ひ賢者を招き致し、曹參は攻レ城略レ地の功あり。【六】經綸　すぢみちをたてること。【七】長才　人にまされる才。【八】寇鄧　寇は寇恂、鄧は鄧禹。【九】良　良臣なるをいふ。【一〇】耿賈　耿弇、賈復。【一一】宗臣　一代のたつとぶ所の臣。【一二】羽翼　天子のたすけとなる。【一三】休運　よき運命。【一四】四百　四百年。【一五】雲臺　後漢の明帝、前世の功臣に追感して二十八將を南宮の雲臺に圖畫にせり。

【題義】兩漢の君、人材を用ふるによりて天下をながく保有せしことをのべたり。

【詩意】後漢の光武は天下を得て、その國運がながかつたのはもとよりさきに之を開きはじめたものがあるのだ。それは漢の高祖である。しかし高祖はまた自分が聖德あつたためのみではなくその功は蕭何や曹參から來てゐるのだ。凡そ中興の業を經綸するにいづれの代でもすぐれた人才が無いわけではない。之を用ふると否とにある。自分は後漢では寇恂や鄧禹の勳を慕ふ、彼等は時世を濟うたものでまことに良臣といふべきものである。それから耿弇だの賈復だのも一代の宗臣であつて光武のつばさとなつてともにたちはたらいたものである。かくのごとくにして後漢のめでたき運命はつひに四百年もつづいて、彼等功臣は圖畫にかかれて雲臺に列せられてゐるのである。

陪章留後惠義寺餞嘉州崔都督赴州

章留後が惠義寺にて嘉州の崔都督が州に赴くを餞するに陪す

中軍待上客。令肅事有恒。
前驅入寶地。祖帳飄金繩。
南陌既留歡。茲山亦深登。
清聞樹杪磬。遠謁雲端僧。
迴策匪新岸。所攀仍舊藤。
耳激洞門飈。目存寒谷冰。
出塵閟軌躅。畢景遺炎蒸。
永願坐長夏。將衰棲大乘。
羇旅惜宴會。艱難懷友朋。
勞生共幾何。離恨兼相仍。

【字解】【一】章留後　已にみゆ。【二】惠義寺　已にみゆ。【三】嘉州　今の嘉定府、成都の南にあり。【四】崔都督　都督、崔

某。【五】州　嘉州をさす。【六】中軍　本軍をさす、ここは本軍のかしら卽ち章彝をさす。【七】待　もてなす。【八】上客　崔都督をさす。【九】令肅　號令嚴肅。【一〇】事有恒　事にきまりがある。【一一】前驅　さきがけのもの。【一二】寶地　寺をいふ。【一三】祖帳　別筵のまく。【一四】金繩　うつくしきなは。【一五】南陌　南のみち、これは蓋し城中南樓の宴をいふ。【一六】留歡　崔をひきとめて歡びをつくす。【一七】茲山　長平山をさす。【一八】清　磬聲のすめるをいふ。【一九】樹杪磬　こずゑのうへにたちのぼる磬石のおと。【二〇】迴策　つゑをめぐらす。仇氏は下山のことをいふといへるも余はここへきたことをいふものとみる、めぐらすとは城からこちらへめぐらしてきたといふ義ならん。【二一】匪新岸　岸は溪岸なるべし、一に崖に作る、新岸に非ずとはこの寺ははじめて來たわけでなく已にたびたびきてゐることをいふ。【二二】蹤　ふきまはすかぜ。【二三】出塵　塵界から超出する。【二四】閱軌躅　くるまのあとも、人のあしあとも無きをいふ、畢景　景は影に同じ、日かげのなくなるまで、終日の義。【二五】將衰　老衰になりかけて。【二六】棲大乘　大乘の教のなかにくらす。【二七】羈旅　たびの身のうへ。【二八】惜宴會　宴の短きを惜しむなり。【二九】艱難　國事のなんぎなること。【三〇】友朋　崔をいふ。【三一】勞生　この世に生きるために勞してゐること。【三二】共　おたがひに。【三三】幾何　どれほどの年月ぞ。【三四】仍　ひとつあるうへにまたひとつかさなること。

【題義】 章留後のともをして惠義寺で崔都督が嘉州へ赴くのを餞した詩。廣德元年夏、梓州にての作。

【詩意】 本軍の將章君はたふとき客をもてなされるに、號令いかめしくちやんと事にきまりがあつてみだれぬ。すなはち前驅の者は早く寶地に入り、金繩をはつて別筵のまくをふはふはとひるがへらせてゐる。』城中の南のみちでもすでに客をひきとめて歡をつくしたのだが、またこの寺の山へも深くわけのぼつてきた。こずゑたかくたちのぼる磬聲のすんだおとを聞きつつ、遠く雲端に住んでゐる僧に面會する。ここへ策をめぐらしてやつてきたがはじめての崖をとほるのではなく、よぢのぼる藤づるもやつばりもとよぢたことのあるつるだ。耳には洞門の回風が激し、目にはつめたい谷の氷がみえる。』ここは全く塵界から超出して車や人のあともなく、ひいつぱいあつくるしさをわすれるのである。どうかいつまでもこの日ながの夏ここにすわつてゐたい、そして老衰ながら大乘の法門のなかにすみたい。自分はたびの身のうへでこの宴のながくないのを惜しくおもふ、それとともに今の國事の難儀のをりからわかれゆくともだちをおもふ。いつたい我我はおたがひどれだけのあひだ生きるために骨折るのだ。そんなことをかんがへる苦痛のうへにまた友だちとのわかれの恨みがかさなつてくるのである。』

送竇九歸成都

文章亦不盡、竇子才縱橫。
非爾更苦節、何人符大名。
讀書雲閣觀、問絹錦官城。
我有浣花竹、題詩須一行。

竇九が成都に歸るを送る

文章も亦盡きず、竇子、才、縱横なり。
爾が更に苦節なるに非ずんば、何人か大名に符せむ。
書を讀む雲閣觀、絹を問ふ錦官城。
我に浣花の竹有り、題詩、一行を須つ。

【字解】【一】賓九　成都の賓少尹が子ならん、これその父をみたまふためにかへるなり。【二】亦　才に對していふ。【三】不盡　盡し詞源のゆたかなるをいふ。【四】賓子　即ち賓九をさす。【五】才　世に處するの才。【六】苦節　くるしきみさををたもつ、これは行ひのうへについていふ。【七】符　一致する、もつてゐる實力に相應するだけの名を得るをいふ。【八】大名　大なる名聲。【九】雲閣觀　成都にある道觀の名ならん。【一〇】問絹　父を問ふこと、魏の胡威が故事。胡質といふもの荆州刺史となる、その子威みやこより往きて省す、みづから驢を驅りやどにとまらず十餘日にして歸る、質これに絹一匹を與ふ、威曰く、大人は清貧なり、何を以て此を得たるや、質曰く、これ吾が俸餘なり、聊か汝が糧を助くるのみと。【一一】錦官城　成都の西城の名。【一二】浣花竹　浣花溪の草堂の竹。【一三】一行　ひとくだり。

【題義】竇某が成都に父をみまひにゆくのを送る詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】おまへは處世の才は縱横にあり、そのうへ文章の技量もつきぬほどゆたかにもつてゐる。おまへの如きものがもつと我慢して苦しいみさをを守るに非んばだれが大名にぴつたり合するものがあらう。おまへはこれからかへつて雲閣觀で書物をよんで勉强し、錦官城へ絹の仔細をたづねにゆく。そのついでにおねがひがある。わしには浣花溪の竹がある。あれにおまへの詩を一行だけ題してもらひたい。

章梓州水亭【原注】時漢中王兼道士席謙在會。同用荷字韻

章梓州が水亭【原注】時に漢中王兼び道士席謙會に在り、同じく荷の字の韻を用ふ

城晚通雲霧。亭深到芰荷。
吏人橋外少。秋水席邊多。
近屬淮王至。高門薊子過。
荆州愛山簡。吾醉亦長歌。

【字解】【一】章梓州　梓州の留後章彝。【二】水亭　水にのぞんだ「ちん」。【三】漢中王　已に見ゆ。【四】席謙　梓州肅明觀の道士にして棊を善くす、作者の絶句に席謙不見近彈棊とある其人なり。【五】通雲霧　通とは城内とここととにみなぎること。【六】亭深　亭が池の中央に奥まつてあるなり。【七】到芰荷　だんだんゆくと芰荷のあるところまできたといふこと。芰は「ひし」、荷は「はす」。【八】橋　亭に達するまでにあるなるべし。【九】席　亭にてのしきもの。【一〇】近屬　天子の近きおつづきあひ。【一一】淮王　淮南王、漢中王を比していへり、前にもみゆ。【一二】高門　章彝が家といふこと。【一三】薊子　薊子訓といふ仙人なり、この仙人は都に至り二十三家の貴族の宅に同時に奏をあらはしたりとの話あるものなり、以て席謙に比す。【一四】荆州　荆州の民。【一五】山簡　晉の山簡襄陽に鎭す、つねに習家池に出遊し酒をのむ、兒童之をうたふ、已に前にみゆ、簡を以て彝に比す。

【題義】章彝が池中の亭で作つた詩。この時漢中王だの道士席謙も座にあり、みなが「荷」の字の韻をつかつて詩をつくつた。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】城もくれになつて雲や霧が一體にかかるやうになつた。だんだん水亭をおくまでたづねて芰荷のあるところまできた。橋のそとには役人どもはまれだし、坐席のそばには秋の水がたくさんにある。ここへ皇族である淮王（漢中王）がおいでになり、またこのお宅へ仙人の薊子（席謙）もきた。

荆州の人人は山簡を愛してこどもが歌をつくつたが、章留後も山簡の樣なひとだ、それでわたしも醉うて荆州の兒童をまねて長くうたふ。

章梓州橋亭餞成都竇少尹得涼字

章梓州が橋亭にて成都の竇少尹を餞す、涼の字を得たり

秋日野亭千橘香。　秋日野亭、千橘香し、
玉杯錦席高雲涼。　玉杯錦席、高雲涼し。
主人送客何所作。　主人、客を送る、何の作す所ぞ、
行酒賦詩殊未央。　酒を行らし詩を賦す殊に未だ央きず。
衰老應爲難離別。　衰老應に離別を爲し難かるべし、
（應難爲離別。）
賢聲此去有輝光。　賢聲此を去りて輝光有り。
豫傳籍籍新京兆。　豫め傳ふ籍籍たる新京兆、
青史無勞數趙張。　青史、趙張を數ふるを勞する無し。

【字解】〔一〕橋亭　みかんばたけのなかにあるちん。〔二〕主人　章をさす。〔三〕行酒　さけを客の杯につぎまはること、勿論主人みづからなすにあらず、給仕人にさせるなり。〔四〕央　盡くるなり。〔五〕爲難　爲難にては通じがたし、難爲に作るべし。〔六〕賢聲　かしこいとのひやうばん、〔七〕此去　「このちの」の義。〔八〕籍籍　うはさのやかましき貌。〔九〕新京兆　至德二載に成都は府に改められ、尹を置き東西二京に比せらる、故に少尹をも京兆尹に比していへり。〔一〇〕青史　ふるい書物をいふ、古は竹にて簡をつくり、文字をそのうへに書するには火にてあぶり竹の青みを去る、之を「殺青」といふ、しかしかいたものを青史といふ。〔一一〕勞　わづらはす、それだけの骨を折る。〔一二〕趙張　漢の趙廣漢と張敞、二人相繼で京兆尹となりしもの、吏民、語して曰く、前有趙張、後有三王と。

【題義】章彝がみかんばたけのちんで成都の竇少尹をはなむけした詩。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】秋の日野らの亭のそばでたくさんのみかんの樹がかんばしくにほひ、錦の席をしき玉の杯をやりとりして高く浮いた雲がすずしげにみえてゐる。主人は客を送るになにをするかといふと、酒をつぎまはらせたり、詩をつくつたりしてまだなかなかやまない。自分は老衰の身だから人とわかれなどすることはしにくいはずであるが、竇君はこののちはその賢いとの評判はますます光輝をますことであらう。まだ著任もせぬさきから新任の京兆尹がくるとのうはさがやかましい。わざわざ歷史をたづねて趙廣漢や張敞をかぞへたてる御苦勞はいらぬことだ。

隨章留後新亭會送諸君

章留後が新亭の會に隨ひ諸君を送る

新亭有高會。行子得良時。　新亭、高會有り、行子、良時を得たり。

(六)日動映江暮。風鳴排(七)檻旗。　日は動く江に映ずる暮、風は鳴る檻に排せる旗。
(八)絶葷終不改。勸(九)酒欲無辭。　絶葷、終に改めず、勸酒、辭する無からむと欲す。
已墮(一〇)峴山淚。因題零(一一)雨詩。　已に墮す峴山の淚、因つて題す零雨の詩。

【字解】【一】新亭　あたらしくたてた「ちん」。【二】諸君　たびだつもの一人に非るなり。【三】高會　高堂の會。【四】行子　たびにでかける人人。【五】良時　よきをり。【六】日動　日光がちらつく。【七】排檻　てすりにならべる、檻は板がこひしたてすりなり。【八】絶葷　くさきにほひの食物をたつ、佛道にしたがひ精進するなり、自己のことをいふ。仇氏は座中にかかる人あるならん、或は漢中王をさすかなどいへるも、作者自身のこととみるを當れりとす。【九】勸酒　人からすすめらるるさけ。【一〇】墮峴山淚　已にしばしばみゆ。晉の羊祜民望あり、祜沒するや百姓襄陽の峴山に碑をたつ、見るもの淚を流さざるなし、杜預因て之を墮淚碑と名く。ここは其人去て他人之を思ふことを意味し、これまで梓州に仕宦して今たち去る人を慕ふことをいへり。【一一】零雨詩　此の送別の詩をさす。晉の孫楚が陟陽候送別詩に曰く、晨風飄ニ歧路一、零雨被ニ秋草一と。零雨はおつるあめ。

【題義】章彝が新築の亭で送別の會をした席にともをして多くの人人を送つた詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】新亭でさかんな會がもよほされる。たびにゆく人人もよい時節にあうたといふものだ。みれば江水に映うた幕には日光がちらつき、てすりにたてならべた旗には風がはたはた鳴つてゐる。自分はこの席でもなまくさものの禁食はあくまでまもるが、ひとが酒をすすめてくれればそれはいなまずうける。諸君と別れるためすでに昔人が峴山でおとしたやうな淚をおとし、そのついでにこの零雨の詩ともいふべき送別の詩をかきつける。

客舊館

舊館に客たり

(一)陳迹隨ニ人事一。(二)初秋別ニ此亭一。　陳迹、人事に隨ふ、初秋此の亭に別る。
(三)重來梨葉赤。依ニ舊竹林青一。　重ねて來れば梨葉赤し、舊に依つて竹林青し。
(四)風幔何時卷。(五)寒砧昨夜聲。　風幔何の時か卷ける、寒砧、昨夜聲あり。
無ニ由一出ニ江漢一。(六)愁緒日冥冥。　江漢より出づるに由無し、愁緒日に冥冥たり。

【字解】【一】客舊館　舊館に客となるをいふ、舊館とは梓州の客寓をいふ、梓州より一時立去りてまたかへりてもとの客寓にすみしをいふ。【二】陳迹　ふりたるあと、あとふりたりといふも同じ意なり、迹とはこの館の存在するをいふ。【三】人事　主として生計の事をいふ、作者の旅行はつねに生計に追はれてのことなり。【四】初秋　はつあき、あきのはじめ。【五】別此亭　仇氏はここより去て閬州に赴きしなりといへり。ただ必ず閬州にゆきしや否は不明なり、一時其地に赴きしをいふならん。【六】重來　歸りてまたきた。【七】風幔　風をうくるまんまく。【八】何時卷　いつまき去つたのか。蓋しさきには垂れてあつたのに今は卷かれてゐるなり。【九】寒砧　さむぞらにうつきぬた。【一〇】昨夜聲　ゆうべはそのこゑがきこえた。【一一】江漢　作者は梓州地方をさして江漢といへり、作者は梓州より涪江を下りて揚子江にいで三峽をくだりて故郷にかへらんことを念としてゐたるなり。【一二】愁緒　うれへのこころ。【一三】冥冥　くらき貌、はれやかにならぬさま。

【題義】梓州の舊館へもどつてふたたび客寓の身となつたことをよめり。廣德元年晩秋又は初冬の

節に梓州にての作。

【詩意】人事におはれてゐるうちに假りにとおもつたところがふるびた迹とかはる。このやかたはついこの秋の初めに別れたのだ。いまもどつてふたたびきてみると梨の葉は赤くそまつてゐるし、竹林はもとどほりに青青としてゐる。風幔はいつしか卷き去られ、ゆうべは寒砧の聲をきくに至つた。またここにやどらねばならぬ始末でこの江漢の地方から出てしまふよすがはなく、うれへのこころは日日くらくなるばかりである。

戲作寄上漢中王二首

【原注】王新誕(一)(二)明珠

戲れに作りて漢中王に寄せ上る　二首　【原注】王新に明珠を誕す

〔一〕

雲裏不聞雙雁過。(三)
掌中貪看一珠新。(四)
秋風嫋嫋吹江漢。(五)
只在他鄉何處人。(六)

〔一〕

雲裏聞かず雙雁の過ぐるを、
掌中貪り看る一珠の新なるを。
秋風嫋嫋、江漢を吹く、
只他鄉に在るは何處の人ぞ。

【字解】【一】誕　誕生なり、うむこと。【二】明珠　眞珠、男子をいふ。【三】雙雁　雙の字にふかき意味なし、ただ雁をいふ、雁はつらをなしてとぶ、雁はてがみをいふ。【四】一珠新　あらたにうまれた一つぶの眞珠、男の子をさしていふ。【五】嫋嫋　なよなよとふくさま。【六】江漢　梓州地方の水をさす。【七】只在他鄉　他鄉にばかりゐる。【八】何處人　自己をさすものなれど婉曲にいへり。

【題義】戲れにつくつて漢中王に寄せたてまつつた詩。

る。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】雲まに雁がとほるこゑをさつぱりきかぬ。(近來おたよりがない)。これはおもふに新に得られた掌中の珠(男のおこさん)をあんまり看つめてをられるせゐでありませう。なよなよとわたる秋風が江漢(梓州)の地方を吹いてゐます、このときここから出られず他鄉にばかりゐるをとこがありますがそれはいつたいどこの人間でござりませう。(このわたくしにほかならぬのでございます)。

〔二〕

謝安舟楫風還起。(一)
梁苑池臺雪欲飛。(二)
杳杳東山攜妓去。(三)
泠泠修竹待王歸。(四)

〔二〕

謝安が舟楫風還起る、
梁苑の池臺、雪飛ばむと欲す。
杳杳、東山に妓を攜へ去る、
泠泠たる修竹、王の歸るを待つ。

【字解】【一】謝安舟楫　晉の謝安、孫綽等と海に泛びしに風浪起る、諸人懼る、安は平氣なりしといふ、此句は第三句の攜妓と連絡す。【二】梁苑　漢代の梁の孝王の園、孝王、睢陽城をひろめ東苑をきづく方三百里、此句は第四句修竹と連絡す。【三】雪欲飛　謝惠連が雪賦に、梁王遊於兎園、俄而微霰零、密雪下とあり。【四】東山攜妓　謝安が故事。【五】泠泠　水の鳴る音なり、これ蓋し風の竹梢を拂ふ聲をさしていへり。【六】修竹　せのたかい竹、梁王の園には竹多し、

枚乘が兎園賦に修竹檀欒夾二池水一とみゆ。

【題義】此篇は王が妓を攜へ舟遊して風浪にあへるをききて早く歸れといひやりしものなり。

【詩意】謝安（王をさす）が舟あそびするに風が起つたさうである。梁苑（王の園をさす）の池臺には雪が飛びかけてをりまする。あなたは謝安氣どりではるばる東山へ妓をつれてあそびにおでかけになつてゐるが、お苑の泠泠たる修竹はあなたのおかへりを待つてをりまするぞ。（蓋し作者梁園の賓客を以て自ら比し、自ら王の歸るを待つことをいひやりしものならん）。

櫻拂子[一]

櫻拂且薄[二]陋。豈知身効能。
不レ堪レ代二白羽一[三]。有レ足レ除二蒼蠅一[四]。
熒熒[五]金錯刀[六]。濯濯[七]朱絲繩[八]。
非二獨顏色好一[九]。亦由二顧盻[一〇]稱一。
吾老抱二疾病一。家貧臥二炎蒸一。
啞膚倦二撲滅一[一一]。賴レ爾[一二]甘服膺[一三]。

櫻拂子

櫻拂且薄陋なり、豈知らむや身に効能あり。
白羽に代ふるに堪へざるも、蒼蠅を除くに足る有り。
熒熒たり金錯刀、濯濯たり朱絲繩。
獨り顏色の好きのみに非ず、亦顧盻に稱ふに由る。
吾老いて疾病を抱く、家貧にして炎蒸に臥す。
啞膚、撲滅するに倦む、爾に賴りて甘んじて服膺す。

物微[一五]世競[一六]棄。義在誰肯徵[一七]。
三歲[一八]清秋至。未二敢闕一二緘縢[一九]。

物微なれば世競ひ棄つ、義在るも誰か肯て徵せむ。
三歲、清秋至る、未だ敢て緘縢を闕かず。

【字解】【一】櫻拂子　しゆろの毛でつくつた「ほつす」、蠅をはらふに用ふ。【二】薄陋　つまらぬみすぼらしきもの。【三】白羽　鳥の白いはねにてつくりしうちは、諸葛孔明は白羽扇を以て軍事を指揮せしといふ。【四】蒼蠅　あをばへ。【五】熒熒　かがやく貌。【六】金錯刀　刀をいふときと錢をいふときとあり、是は刀をいふならん、金錯とは金すぢの模樣をいろいろにつけたるをいふ、之を拂子のどの部分に施したるか不明なるも恐くは柄が刀形をなしそれに金錯が施されあるに非るか。【七】濯濯　鮮かに潔き貌。【八】朱絲繩　あかききぬいとのなは、これは柄についてゐるひもなるべし。【九】顏色　みば。【一〇】顧盻稱　顧盻とは左右をふりかへつてみること、稱とはつりあひがよきこと。【一一】啞膚　啞は嚘と同じといへり、「莊子」天地篇に蚊亟嚘レ膚則通夕不レ寐矣の語あり、啞膚は膚をかむものにて、ここは蠅をさせり。【一二】撲滅　うちころしてたやす。【一三】爾　汝、ほつすをさす。【一四】服膺　むねにあててほつすを持つこと。【一五】物微　つまらぬものであれば。【一六】世　世人。【一七】義在　之を貴ぶべきわけあひの存在すること、ほつすに蠅を拂ふだけの効能あるをいふ。【一八】徵　めす、之をめしもとめること。【一九】三歲　久しきあひだをいふ。【二〇】緘縢　なはにてからげる、これは箱にいれたうへをさらになはでからげ嚴重にしまつておくをいふ。

【題義】しゆろの「ほつす」のことをよめり。廣德元年夏秋の間の作。

【詩意】しゆろのほつすはいはばつまらないものだ、が意外にも身に効能のあるものだ。白羽扇の代用にはならぬが蒼蠅を除くには十分である。かがやいた金錯刀の柄、さつぱりとした朱絲の繩。その體裁みばのよいばかりでなく、之を持つて左右をみるときに持つてる人によくうつるところがあるからばかにはならぬ。』自分は年よつて病氣をもち、貧乏であつてあつくるしいときに臥てゐる。膚を

かみにくる蠅は之を撲滅するのにうみつかれてゐるが、おまへ（ほつす）といふものがあるおかげで甘んじていつもそれをもつてゐるのだ。物が微小であると世の人はあらそうてそれを棄ててしまふ。その用ふべきわけあひがあつてもだれも之を求めるものはない。自分はそれとちがふ、だから三年のあひだすずしい秋がくるといふと、いつも鄭寧にこのほつすをしまひこんでおく、決して箱をなはでからがくことを缺いたことはない。』

送陵州路使君之任

王室比多難。高官皆武臣。
幽燕通使者。岳牧用詞人。』
國待賢良急。君當拔擢新。
佩刀成氣象。行蓋出風塵。
戰伐乾坤破。瘡痍府庫貧。
衆寮宜潔白。萬役但平均。』
霄漢瞻佳士。泥塗任此身。

陵州の路使君が任に之くを送る

王室、比多難、高官は皆武臣なり。
幽燕、使者通ず、岳牧、詞人を用ふ。』
國、賢良を待つこと急なり、君、拔擢に當ること新なり。
佩刀、氣象を成す、行蓋、風塵を出づ。
戰伐、乾坤破れ、瘡痍、府庫貧なり。
衆寮宜しく潔白なるべし、萬役但平均なれ。』
霄漢、佳士を瞻る、泥塗、此の身を任す。

秋天正搖落。回首大江濱。』

秋天正に搖落す、首を回す大江の濱。』

【字解】〔一〕陵州　今成都府の南、資州の仁壽縣境。〔二〕路使君　陵州の刺史路某。〔三〕比　このごろ。〔四〕幽燕　幽州及び燕國の地、今の直隸北部、賊軍の據れる所。〔五〕通使者　賊將歸順し、朝廷よりの使者自由に通ずる樣になれり。〔六〕岳牧　地方の長官をいふ、古昔舜のとき四岳十二牧あり、ここは刺史を州牧とみていへり。〔七〕詞人　文學出身の人、上の武臣に對していふ。〔八〕賢良　かしこくよき人物。〔九〕拔擢　多くの人のうちよりひきぬかるること。〔一〇〕佩刀　呂虔が故事、已にみゆ、晉の呂虔刺史となる、虔佩刀あり、相する者ありこれ三公のおぶべきものなりと、虔乃ち之を王祥に贈れり。〔一一〕成氣象　前途三公の位にものぼるべききざしをあらはすをいふ。〔一二〕行蓋　管内を行ぐる車の蓋、刺史は馬車にてめぐる。〔一三〕風塵　兵亂のちり。〔一四〕瘡痍　民力のきずつくこと。〔一五〕府庫　官の金穀をいれるくら。〔一六〕衆寮　多くの役人ども。〔一七〕潔白　金錢をむさぼらず、賄賂などとらぬこと。〔一八〕萬役　よろづの賦役、稅または力役。〔一九〕平均　公平に民に課す。〔一〇〕霄漢　あをそら、あまのがは、高き地位をいふ、刺史をほめていふ。〔一一〕佳士　路をさす。〔一二〕任　泥まみれにならうとかつてしだい。〔一三〕搖落　この葉が風にゆられおつる。〔一四〕大江　涪江をいふ。

【題義】陵州の刺史に任ぜられた路某が任地へゆくのを送る詩。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】王室はちかごろさまざまの難儀があり、高官のものといへば皆武人であつた。それが幽燕の地方が平定して朝廷からの使者も自由に通ずる樣になり、やつと地方官にも文學出身のものを用ふる樣になつた。』　國家はいま賢良なる人物を待つことが急であるので、君は新に拔擢せらるることになつた。君の佩刀は呂虔のそれのごとく前途有望の氣象をあらはし、君の管内巡察の車蓋ははじめて兵亂の塵から出てのしごとである。いま戰伐のあつたため天地は破損してをり、人民はいたでをおう

て官の府庫は貧乏である。このとき君の部下の楽寮たるものは廉潔でなければならぬ、人民に課する種種の賦役はただ公平であるべきである。』　自分は君の如きよき人物があをぞらのうへたかくのぼるをうれしく仰ぎみて、このからだは泥にまみれてもそれにまかせておく。いま秋のそらで木の葉がゆられておつる、このとき君を見送つて、大江のほとりでひとへに君の方をふり反つてみるのである。』

送元二適江左

【原注】元結也

元二が江左に適くを送る　【原注】元結なり

亂後今相見。秋深復遠行。亂後、今相見る、秋深くして復遠く行く。
風塵爲客日。江海送君情。風塵、客と爲る日、江海、君を送る情。
晉室丹陽尹。公孫白帝城。晉室、丹陽の尹、公孫、白帝城。
經過自愛惜。取次莫論兵。經過せば自ら愛惜し、取次、兵を論ずること莫れ。

【原注】元嘗應孫吳科舉

【字解】〔一〕元二　元二は原注に元結なりといへり。錢謙益は元結の傳によりて元結となすの謬れることを辯じ、結は蜀にも至らず江左にもゆきしことなしとせり。王維が集に送元二適安西詩あり、有名なる陽關三疊の曲是なり、かの元二と同一人なるべきは推察にかたからざるも、そが元結なりや否やはなほ決し易からず、暫く疑を存す。〔二〕適　ゆく。〔三〕江左　江東なり、卽ち江南のこと、今の江寧府地方をいふ。〔四〕江海　支那人は江のひろき處を海といふ、江左の方面の江は江海なり。〔五〕晉室丹陽尹　晉の時の丹陽は今の江寧府地方にあたる、尹はその長官なり。〔六〕公孫白帝城　白帝城は四川省夔州府の魚復浦にある城にして漢末公孫述が築く所なり、地理よりいへば白帝城を過ぎてのち丹陽のかたへ赴くなり、押韻の都合にておきかへていへり、丹陽白帝の二句は經過の地をいふ、次ぎの「經過」の語へ接する句法なり。〔七〕經過　白帝城、丹陽をとほつたときには、の意。〔八〕自愛惜　自己の身をたいせつにする。〔九〕取次　或は曰く從容の意なり、或は曰く卽次の意なり、或は曰く次第の意なり、と。今次第の義に從ふ。〔一〇〕論兵　兵略上について議論する。元二は孫吳の科といふ武事の試驗科目に應じたことのある人なりと。

【題義】元某が江左の方へゆくのを送る詩。廣德元年の作ならんといふ。

【詩意】君とは兵亂以後いまはじめて面會する、しかるにこの秋の深いときにあたつて君はまた遠くへゆくのである。風塵中に客寓の身となつてゐるこのとき、江海の方へゆく君を送る自分の情はどんなであるか、察してくれたまへ。君は道すがら白帝城や丹陽をとほるだらう。白帝城は公孫述が獨立したところ、丹陽には晉の王室で力强い臣が尹となつてゐたところだ。白帝丹陽には今もそんな人物がゐるかも知れぬ、だからそこをとほつたとてもきをつけて自己のからだを大切にし次第に兵事など論じてはいけない。

九日

去年登高鄰縣北。　去年高きに登る鄰縣の北、

【字解】〔一〕九日　陰曆九月九日重陽の菊節句。〔二〕去年　賓應

今日重在涪江濱。
苦遭白髮不相放。
羞見黃花無數新。
世亂鬱鬱久爲客。
路難悠悠常傍人。
酒闌却憶十年事。
腸斷驪山清路塵。

今日重ねて涪江の濱に在り。
苦みて遭ふ白髮の相放たざるに、
羞ぢ見る黃花の無數に新なるを。
世亂に鬱鬱久しく客となり、
路難に悠悠常に人に傍ふ。
酒闌にして却つて憶ふ十年の事、
腸は斷ゆ驪山清路の塵。

【題義】重陽の節を迎へた感をのぶ。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】去年は鄰縣の北で高地にのぼつて厄拂ひをしたが、こんにちもふたたびおなじ涪江のほとりで菊節句をする。白髮が自分をつかまへて放してくれぬにはこまるが運命まぬかれぬ。また年がよる

元年。【三】登高　重陽には高いところにのぼつて厄を拂ふ。【四】鄰縣　梓州をいふ。【五】涪江濱　これも梓州の涪江のほとりをいふ。【六】苦遭　こきりながらであふ。【七】不相放　放とはゆるしてはなすこと、不放はしつかりつかめてはなさぬこと。【八】鬱鬱　心のふさぐさま。【九】路難　行路難なり、よわたりのむつかしきをいふ。【一〇】傍人　他人にたよるをいふ。【一一】闌　たけなは、さかりのすぎんとするころ。【一二】十年事　十年前の事、天寶十四年冬作者驪山の麓をすぎ赴奉先縣詩を作る、これが玄宗の朝の太平の最後にして同年冬安祿山反し、爾來天下大亂となる、天寶十四年より廣德元年までにて九年なり、十年とは成數をあげしなり。【一四】驪山清路塵　驪山のこと上にいへり、玄宗時に驪山華清宮に在りしなり、清路とは天子行幸になるときは道路の掃除をして清めることをいふ、きよめた路ならば塵は無きはずなれど韻字なれば加へて用ひしなり、清路のことについておもひだすといふ義にとどまる。

雨に對す

莽莽天涯雨。江邊獨立時。
不愁巴道路。恐濕漢旌旗。
雪嶺防秋急。繩橋戰勝遲。
西戎甥禮。未敢背恩私。

莽莽たり天涯の雨、江邊獨立の時。
愁へず巴の道路、濕さむことを恐る漢の旌旗。
雪嶺、防秋急なり、繩橋、戰勝遲し。
西戎甥の禮、未だ敢て恩私に背かざらむ。

【字解】【一】莽莽　くらきかたち。【二】天涯　天のはて、梓州をさす。【三】江邊　江は涪江。【四】巴　梓州地方をさす。【五】恐濕漢旌旗　漢とは唐をいふ、旌旗は軍人のもつもの、旗を濕ほさんことを恐るといふは軍人がぬれんことをきづかふなり。【六】雪嶺　西山なり、已にしばしばみゆ。【七】防秋　秋にあたりて敵の侵入し來るを防ぐこと、このとし七月に吐蕃は河隴の地方を取りたり、因て雪嶺のかたに防禦をなす。【八】繩橋　卷十「入奏行」をみよ。【九】西戎　吐蕃をさす。【一〇】甥禮　唐は中宗の景

龍二年（西紀七〇八）に金城公主を贊普（吐蕃の酋長）に妻はし、之と親戚關係を結びたり。故に彼はみづから甥の身分に居り、唐の天子を舅さんとして敬禮すべき地位にありといふなり。【二】未敢　これは「よもやすまい」といふことなれども、事實をいふにあらず、希望をいふなり。【三】恩私　恩愛、私寵なり。

【題義】雨にうちむかひて感をのぶ。廣德元年秋、梓州より閬州に往かんとするころの作。

【詩意】自分が江邊にひとりで立てゐると、天涯に莽莽とくらく雨がふる。自分はこの巴の地方が雨のためになんぎにならうとそれは心配せぬが、この雨が漢（唐）の軍隊の旗をうるほしはせぬかと恐れるのである。いま吐蕃の侵入のために蜀では雪嶺の方は秋の防禦に急であり、繩橋の方面は官軍の戰勝がぐずぐずしておそい。どうか西戎は我が唐との關係に於て甥舅の禮をおもんじ敢て我が天子の恩寵に背かぬ様にありたいものだ。

薄暮

江水長流地。山雲薄暮時。
寒花隱亂草。宿鳥探深枝。
故國見何日。高秋心苦悲。

薄暮

江水長流の地、山雲薄暮の時。
寒花、亂草に隱れ、宿鳥、深枝を探る。
故國見る何の日ぞ、高秋心苦だ悲し。

人生不再好。鬢髮白成絲。

【字解】【一】薄暮　くれにせまる、くれかかるときをいふ。【二】江水　これは嘉陵江、閬州にての詩なればなり。【三】探　さぐる、一に擇（えらぶ）に作る。

【題義】日のくれかかつたときのことをよめり。廣德元年秋、閬州（次の篇に於て說明す）にての作。作者このとし九月閬州に至りしといへり。

【詩意】江水のながく流れてゐるところ、山の雲のくれかかつたとき。寒さうなあはれに咲いた花はみだれた草のなかに隱れてゐるし、やどりを求める鳥はおくふかい木の枝をさがしてゐる。ふるさとはいつ見られるだらう。そら高き秋にあたつて自分の心は非常にかなしい。人生はもいちどよいときにあふことはできぬ、びんの毛は白くて絲の様になつてしまつた。

閬州奉送二十四舅使自京赴任青城

閬州にて二十四舅使が京より青城に赴任するを送り奉る

聞道王喬舄。名因太史傳。
如何碧雞使。把詔紫微天。
秦嶺愁回首。涪江醉泛船。

聞道王喬が舄、名は太史に因つて傳ふと。
如何ぞ碧雞の使、詔を把る紫微の天に。
秦嶺愁へて首を回らし、涪江醉ひて船を泛べむ。

青城漫汚雜。吾舅意淒然。

【字解】【一】閬州　今四川省保寧府閬中縣。【二】二十四舅使　二十四は排行なり、舅は母の兄弟をさす、この人も姓は崔ならんか、使とは詩に碧雞使とあれば天子の命を帶びて蜀に使ひせしならん。【三】京　長安。【四】青城　山の名、又縣の名、成都府灌縣の西南。【五】王喬舄　後漢の王喬、葉縣の令となり、一日と十五日とに朝廷へゆくに先づ二匹の鳧がくるので天子、太史(天文記錄のかかりの官)をして之を伺はしめしに禮用の舄二つを得たりといふ。縣令の故事として用ひたり。【六】因太史傳　上にみゆ。【七】如何とがめかつ怪しむ語なり。【八】碧雞使　漢の王褒、宣帝の命をうけて蜀にありといふ金馬碧雞の神を祀るために使としていだされたり、この舅は碧雞を祀るためなるや否やは不明なるもともかく天子より蜀へつかひにだされたるなり、それが朝廷へ報告にかへりてまたこんどは縣令としてだされたるなり。【九】把詔紫微天　紫微は宮殿の名、開元四年に縣令の試驗をここに行ふ、二十四年には新任の縣令をここに宴す。把詔とは縣令に任ぜられたる詔をここにて手にするをいふ。【一〇】秦嶺　藍田縣の南にあり、舅が途中にて經しところ。【一一】涪江　これまた舅が經べきところをいふ。【一二】汚雜　風俗汚れて、居民雜多なり。【一三】淒然　ものがなし。

【題義】閬州で天子のお使者にたつたことのある舅がみやこから青城縣へ赴任するのを送つた詩。廣德元年閬州にての作。

【詩意】きけば王喬の舄は太史によつてその名が傳へられた、むかしは縣令もかく重んぜられた。しかるに今はなんで碧雞の使をつとめたほどのものが紫微宮で縣令任命の詔書などを手にする樣になつたのか。あなたはこちらへくる途中、秦嶺では愁へてみやこをふりむいてみ、さらに涪江では醉つて船をうかべるであらう。さうして青城につけば、そこはやたらに汚雜なところであるから、あなたはいやなものがなしいここちがするであらう。

王閬州筵奉酬十一舅惜別之作

王閬州が筵にて十一舅が惜別の作に酬い奉る

萬壑樹聲滿。千崖秋氣高。
浮舟出郡郭。別酒寄江濤。
良會不復久。此生何太勞。
窮愁但有骨。群盜尚如毛。
吾舅惜分手。使君寒贈袍。
沙頭暮黃鶴。侶失亦哀號。

【字解】【一】王閬州　閬州の刺史王某。【二】酬　あいさつする。【三】十一舅　十一は排行、舅は母かたのをぢ、崔氏なるべし、次篇に「青城に往く」とありてこの十一舅は二十四舅に從て赴任すとみえたり。【四】惜別之作　十一舅が別れを惜しむためにつくつた詩。【五】樹聲滿　どこもみなこがらしのこゑ。【六】秋氣高　崖なるゆゑに秋の氣たかくそびゆ。【七】浮舟　別宴をひらくためにうかべたふね。【八】別酒　わかれををしむさけ。【九】寄　托する義。【一〇】江濤　江は嘉陵江。【一一】良會　よき會合、したしきものがいつしよに居るはよき會合なり。【一二】此生　人生をいふ。【一三】窮愁　こまりかつうれふ。【一四】但有骨　肉おちて骨のみがある。【一五】如毛　多きをいふ。【一六】吾舅　十一舅をさす、吾とはしたしみをもつていふことば。【一七】分手　わかれること。【一八】使君　王閬州をさす。【一九】寒贈袍　むかし戰國のとき范雎といふもの秦に至りその舊友須賈に面會す、須賈、

雎が寒げなるを憐みて之に綠袍を贈りたりとの話あり、王闐も作者に袍をめぐみたるなり。【二〇】黃鶴　鶴一に鵠に作る、鶴と鵠とは古來混用せり。【二一】失侶　なかまをうしなふ。【二二】亦　自己に對して「また」といふ。

【題義】王闐州が送別の宴を舟でやつたとき十一舅が別れを惜しむ詩を作つた。それにあいさつするためにつくつた詩。廣德元年九月、闐州に至りしときの作。

【詩意】よろづのたにがらしが吹きみち、多くの崖には秋の氣が高くそびえてゐる。このとき舟をうかべて郡のそとぐるわから出かけ、江の濤のうへに托して別れの酒をくむ。』かく親しいものがともにゐることも久しくはない、この人生はなんでこんなに骨折りが多いのであらう。自分は窮愁の極ただ骨をあますばかりである、盜賊どもはまだ毛のごとくむらがりおこつてゐる。王闐州は親切にも寒さにあたつて自分に袍を贈つてくだされるが、吾がをぢはわかれを惜しんでこれから立ち去られる。これがため自分は非常にかなしいが、沙頭にゐるゆふぐれの黃鶴をみると彼等もまたわがごとくそのなかまを失うたものとみえしきりにかなしみさけんでをる。』

闐州東樓筵奉送十一舅往青城得昏字

闐州の東樓の筵にて十一舅が青城に往くを送り奉る、昏の字を得たり

曾城有高樓。制古丹雘存。曾城、高樓有り、制古りて丹雘存す。
迢迢百餘尺。豁達開四門。迢迢たり百餘尺、豁達、四門開く。
雖有車馬客。而無人世喧。車馬の客有りと雖も、而も人生の喧しき無し。
遊目俯大江。列筵慰別魂。遊目、大江に俯し、列筵、別魂を慰む。
是時秋冬交。節往顏色昏。是時秋冬の交、節往いて顏色昏し。
天寒鳥獸伏。霜露在草根。天寒くして鳥獸伏す、霜露、草根に在り。
今我送舅氏。萬感集清樽。今、我、舅氏を送る、萬感、清樽に集まる。
豈伊山川間。回首盜賊繁。豈伊山川の間つるのみならむや、首を回せば盜賊繁し。
高賢意不暇。王命久崩奔。高賢は意ふに暇あらず、王命に久しく崩奔す。
臨風欲慟哭。聲出已復吞。風に臨みて慟哭せむと欲す、聲出でて已に復呑む。

【字解】【一】闐州東樓　保寧府治の南、嘉陵江のほとりにあり。【二】青城　前にみゆ、これはこの十一舅についてゆくなり。【三】曾城　曾は層に同じ。【四】丹雘　丹は朱の色、雘は彩色。【五】迢迢　はるかなる貌。【六】豁達　ひろびろとしたさま。【七】遊目　みまはす。【八】列筵　むしろをつらねる。【九】別魂　わかれのこころ。【一〇】交　あはひ。【一一】節往　時節がすぎさる。【一二】舅氏　十一舅。【一三】伊　これ。【一四】間　隔つること。【一五】高賢　舅氏の德をいふ。【一六】意　おもふに、こちらが推察するなり。【一七】不暇　賢者は國事のために勞するを以ていとまなし。【一八】王命　天子の命令によりて。【一九】崩奔　奔走の義。【二〇】呑　泣き聲をのみこむ、むせびてなくこと。

【題義】　閬州の東樓の別れの宴席で十一舅が青城へゆくのを送つた詩。前詩と同時の作。

【詩意】　閬州のかさなれる城に高い樓がある、其の制はふるめかしく丹雘の色彩もまだ殘つてゐる。それは百尺あまりもたかくそびえ、四方の門がひろびろと開かれてゐる。ここは車馬にのつてとほる人人はあるが人世のやかましさがない。ここであちらこちらとみまはしながら大江の流れに俯し、さかむしろをしきならべて別れのこころを慰めるのである。『時はちやうど秋冬のあはひで、時節もすぎて歳のくれになりかけるので集まつた人人のかほつきもはればれしくはない。そらは寒く鳥や獸も起きず、草の根には露霜がおいてゐる。いま自分は舅氏を送るにつけて清樽にむかうて萬感が集つてくる。それはをぢとわかれて中間に山や川が我我をへだてることをかなしむだけのことではなく、首をめぐらしてみると盜賊がはなはだ多くあるからである。』あなたの樣な賢者はおもふにいつも暇がなく、天子の命令によつていつまでも奔走されるのである。こんなことをかんがへて風にのぞんで慟哭しようとおもふが、ひとたびはなきごゑも出るがやがてそれはひつこんでむせびなきとなる。

放船

送客蒼溪縣。山寒雨不開。

船を放つ

客を送る蒼溪縣、山寒くして雨開けず。

直愁騎馬滑。故作放舟迴。
青惜峰巒過。黃知橘柚來。
江流大自在。坐穩興悠哉。

直愁ふ騎馬の滑かならむことを、故に舟を放ちて迴る。
青には惜しむ峰巒の過ぐるを、黃には知る橘柚の來るを。
江流は大だ自在なり、坐穩にして興悠なる哉。

【字解】　【一】放船　水流に船をだしたこと。【二】送客　客はだれかわからぬが旅行する人なり。【三】蒼溪縣　閬州閬中縣の北にある縣、江の上流にあたる、上流へいつたから船でくだつて閬中へもどるなり。【四】騎馬滑　馬にのつて陸をとほると路がすべる。【五】迴　閬中へかへる。【六】青　峰巒の色。【七】過　とほりすぎてしまふ、流れのはやきさま。【八】黃　橘柚の色。【九】橘柚　みかん、ゆずの樹になつてゐる實。【一〇】來　前面からくる、これも水流のはやきさまを示す。【一一】江流　江は嘉陵江。【一二】自在　自由の意。【一三】坐穩　船にのつてゐるゆゑ馬とちがひじつとしてをられる。【一四】興　峰巒橘柚を見去り見來るおもしろきをいふ。【一五】悠　ゆつたりとしたさま。

【題義】　船を放つて嘉陵江をくだつたことをのぶ。廣德元年秋、閬州にての作。

【詩意】　自分は蒼溪縣まで客を見送つたが、山は寒く雨ははれない。馬にのれば路がすべるだらうと心配されたのでわざと舟を水流に放つてかへることにした。青い色がみえる、もつとみてゐたいとおもふうちにその青い色の持ちぬしたる峰巒はとほりすぎてしまふ。さうかとおもふと前面から黃のものがやつて來る、それはすなはちこの地方で作つてゐる橘・柚の實の色である。陸とはちがひ江流はまことに自由自在なもので、じつとすわつてゐられるし、興味も悠然としてつきない。

薄遊

淅淅風生砌。團團日隱牆。
遙空秋雁滅。半嶺暮雲長。
病葉多先墜。寒花只暫香。
巴城添淚眼。今夕復清光。

【字解】〔一〕薄遊　いささかあそぶ、「かりのさまよひ」の義、一地に永住せず暫時寓遊するをいふ、詩は薄遊中のことをのべたり。〔二〕淅淅　風のおとの細きさま。〔三〕砌　みぎり。〔四〕巴城　閬州の城をさす。〔五〕添淚眼　眼淚を添へる義なり。〔六〕清光　明月の光りすめるをいふ。

【題義】客遊中のふとしたことをのべたり。廣德元年秋、閬州にての作ならん。

【詩意】砌に風がさわさわ吹きだして、まんまると太陽がかきねにかくれた。はるかの空では秋の雁が消えてゆき、嶺のなかほどにはゆふぐれの雲が長くひきはへてゐる。枯れた葉は多くは他の葉よりさきに墜ちるし、寒さうな色をした花はただしばしのあひだにほふのである。これだけみたのでさへ自分の涙の材料には十分なのだが、巴城の今夕はこれにさらに自分の涙を添へさせるものがある、それはこよひはさらに月の光りがすんでゐるといふことだ。

嚴氏溪放歌

天下兵馬未盡銷。
豈免溝壑常漂漂。
劍南歲月不可度。
邊頭公卿仍獨驕。
費心姑息是一役。
肥肉大酒徒相要。
嗚呼古人已糞土。
獨覺志士甘漁樵。
況我飄蓬無定所。
終日慽慽忍羈旅。
秋宿霜溪素月高。
喜得與子長夜語。

嚴氏溪の放歌

天下の兵馬未だ盡く銷せず、
豈溝壑に常に漂漂たるを免れむ。
劍南の歲月、度るべからず、
邊頭の公卿仍獨り驕る。
費心姑息是れ一役、
肥肉大酒徒らに相要す。
嗚呼、古人、已に糞土なり、
獨り覺ゆ、志士の漁樵に甘んずるを。
況んや我飄蓬、定所無し、
終日、慽慽、羈旅を忍ぶ。
秋、霜溪に宿すれば、素月高し、
喜ぶ、子と長夜に語ることを得るを。

【字解】〔一〕嚴氏溪　嚴は閬州の大姓の一、溪は蓋し嚴氏の族によつて名を得たるなり。〔二〕放歌　きままにうたひだしたうた。〔三〕溝壑　餓死してみぞ、たに、にはまりこむほどの境遇をいふ。〔四〕漂漂　ただよふ。〔五〕劍南　蜀の地をいふ。〔六〕度　わたる、すごすをいふ。〔七〕邊頭公卿　邊頭は邊地、ゐなか、公卿は大臣、これは章彝を指せるならんといふ。〔八〕費心　心をくばる。〔九〕姑息　かりそめの愛をほどこすをいふ、「禮記」に君子之愛レ人也以レ德、細人之愛レ人也以二姑息一とみゆ、たとへば酒食にてもてなすの類、次句に「肥肉大酒」とあるは是なり。〔一〇〕一役　一役夫、しごとにん、勞働者。〔一一〕相要

(二)東遊西還力實倦。　東遊西還、力實に倦む、
(三)從此將身更何許。　此れより身を將ゐる更に何れの許ぞ。
知子松根長茯苓。　知る、子が松根茯苓を長ずるを、
(六)遲暮有意來同煮。』　遲暮、來つて同じく煮るに意有り。』

てゐる。【一六】飄蓬　ひるがへる「よもぎ」のごとく。【一七】慽慽　うれふるかたち。【一八】霜溪　しもおけるたに、嚴氏溪をさす。【一九】素月　しろくひかる月。【二〇】子　嚴家の主人をさす。【二一】東遊西還　圜州に遊んだり、梓州へかへつたり。【二二】從此　今後。【二三】將身　からだをもつてゆく。【二四】何許　何處に同じ。【二五】茯苓　「ぶくりやう」、藥草なり。【二六】遲暮　晩年。

【題義】嚴氏溪にてきままにうたひでた歌。廣德元年秋、圜州にての作。

【詩意】天下の騷亂はまだすつかりなくなつたわけではない。だから自分は溝壑にころがりこむやうな樣子でいつも漂泊してゐることから免れるわけにゆかぬ。蜀でもながくくらすことはできぬ、何となればこのゐなかの大臣はやつぱりひとりで威張つてゐる。自分に對して心を用ひてくれたとて姑息なことにとどまるので自分を視ること一人の役夫をみるがごときにすぎず、肥肉や大酒を以ていたづらによんで御馳走してくれるくらゐのことだ、眞に自分を知つて尊敬してくれるのではない。ああ士を重んずるやうな古人はもはや死んでつちになつた、志士たるものが俗界を去つて漁樵に甘んずるはもつとものことだといふことがわかる。』さして自分は風にひるがへるよもぎのやうにきまつたゐばしよがなく、あさからばんまでうれへのこころをもちながら旅ずまひをがまんしてゐる。このたびこの霜のおいた溪邊にやどるとしろい月が高くてりかがやいてゐる、このをりおまへと夜長にものがたることのできることは喜ばしいことだ。自分は東へでかけたり西へかへつたりするのでつかれてゐる、このさきどこへこの身をもつていつたらよいのであるか。おまへのところの松の樹の根には「ぶくりやう」が生えるさうであるが、自分は晩年にはここへやつてきてその藥草をいつしよに煮てのまうとおもうてゐるのである。』

要は邀、むかへ招待すること。【三】古人　むかしの士を好み之を尊敬せしごとき人物。【三】糞土　死して糞土に化したり。【四】志士　有爲の志をもつたもの。【五】甘　漁樵　漁者樵者の生活をして甘んじ

警急

(一)警急【原注】高公適領(二)西川節度(三)

才名舊楚將。妙略擁(四)兵機。(五)
玉壘雖(八)傳檄。(九)松州會解圍。(一〇)
和親(一一)知計拙。(一二)公主漫(一三)無歸。(一四)
青海(一五)誰得。西戎(一六)實飽飛。(一七)

【原注】高公適西川の節度を領す

警急、才名、舊の楚の將、妙略、兵機を擁す。
玉壘、檄を傳ふと雖も、松州會ず圍みを解かむ。
和親、計の拙なるを知る、公主、漫に歸る無し。
青海、今誰か得る、西戎、實に飽いて飛ぶ。

【字解】〔一〕警急　吐蕃の侵入の事變ありて警戒すべきことの急なることをのべたり。〔二〕高公適　親友高適、節度使なるにつき貴びて公といふ。〔三〕領西川節度　西川地方の兵馬の權を支配するをいふ。〔四〕才名　才ありとの評判。〔五〕舊楚將　適は嘗て揚州左都督府長史・淮南節度使となる、揚州・淮南はむかしの楚地なり、故に楚の將といふ。〔六〕妙畧　ふしぎなはかりごと。〔七〕擁兵機　軍事上の機微をにぎる。〔八〕玉壘　山の名、灌縣の西にあり。〔九〕傳檄　檄文を以て吐蕃侵入をいそぎしらす。〔一〇〕松州　今の松潘廳。〔一一〕會　「必ず」、俗語。〔一二〕和親　吐蕃と和睦し親密にする。〔一三〕公主　唐より吐蕃へやりたるひめみや。「留花門」の詩の公主歌黃鵠の句の注をみよ。〔一四〕漫　漫然、とりとめなき貌。〔一五〕青海　甘肅の西の地方、もと唐の地にして吐蕃にとられたる地方。〔一六〕西戎　吐蕃。〔一七〕飽飛　已にしばしばみゆ、鷹のごとく饑うれば人に從ひ飽けば飛び去ること。

【題義】吐蕃侵入の急變につきてのべたる詩。廣德元年十月、閬州にての作なるべし。

【詩意】才名ある舊の楚の將軍である高適は妙略を抱いて兵機をにぎつてゐる。だから玉壘の方面まで檄文を傳へ急を報じてゐるけれども松州の圍まれはきつと解けるであらう。いま吐蕃と和親をするなどいふことはその計のまづいことはわかつてゐる。その證據は姬宮をよめにやつてもそれはむだで漫然おかへりが無いことに終はつたでないか。青海一帶の地、これは今はそもだれの所有なのだ。西戎などいふやつはじぶんの都合のいいときだけはこちらへつくが、たべものに飽けばすぐ飛び去つてしまふ勝手千萬のものなのだ。

王命

漢北豺狼滿。巴西道路難。
血埋諸將甲。骨斷使臣鞍。
牢落新燒棧。蒼茫舊築壇。
深懷喻蜀意。慟哭望王官。

漢北、豺狼滿つ、巴西、道路難し。
血は埋む諸將の甲、骨は斷ゆ使臣の鞍。
牢落たり新燒棧、蒼茫たり舊築壇。
深く懷ふ喻蜀の意、慟哭、王官を望む。

【字解】〔一〕王命　「詩經」に王命＝南仲」とあり、周の天子が南仲といふ武將に命じ夷狄を征伐せしむることをいふ。これは朝廷より蜀を治める將を命ぜんことを希望する意をのべて「王命」と題したり。結句の「望＝王官」といふの意。〔二〕漢北　漢中府の北。〔三〕豺狼　吐蕃の兵をいふ。巴西　綿州・漢州あたりをさす。〔四〕血埋　渭北兵馬使呂月將といふもの吐蕃と盩厔に戰ひ擒にせらる、の類。〔五〕骨斷使臣鞍　廣德元年李之芳・崔倫、吐蕃に使す、吐蕃之を留めてかへさず。〔六〕牢落　さびしきさま。〔七〕新燒棧　上元二年二月、奴刺黨項、寶雞縣に寇し、大散關を燒く。又廣德元年七月吐蕃大震關に入り、蘭廓河鄯洮岷秦成渭等の州を陷る、等の類。〔八〕蒼茫　はつきりせぬ貌。〔九〕舊築壇　從前名將を任命せられしこと、仇注に郭子儀の事を引きたるは恐らくは當らず。〔一〇〕喻蜀意　喻蜀は司馬相如が故事。漢の武帝のとき唐蒙、夜郎（今の雲南地方）に通じ、巴蜀の吏卒を徵し、暴舉を爲す、巴蜀の人民大に驚く、武帝、相如に命じ使して唐蒙を責め、巴蜀の人民に蒙がしわざの天子の意に非ることを喻さしむ。〔一一〕王官　天子の任命せる官。

【題義】「字解」の條に詳かなり。前の「警急」と同じころの作ならん。

【詩意】漢北には豺狼がいつぱいあり、巴西は道路が不通である。味方の諸將の甲は血に埋められ、こちらから使にでかけた臣の鞍には死骸の骨さへないありさまだ。新に燒かれた棧道はさびしく、從

前壇をきづいて大將を任命したことなどは昔話みたやうにとりとめもないことがらとなつてしまつた。自分はむかし漢の武帝がわざわざ司馬相如を使者に任命して蜀の安堵をはかられた御趣意をおもうて、慟哭してさやうなお使ひの人でもきてくれればよいとのぞんでゐるのである。

征夫

十室幾人在。千山空自多。
路衢唯見哭。城市不聞歌。
漂梗無安地。銜枚有荷戈。
官軍未通蜀。吾道竟如何。

十室、幾人か在る、千山空しく自ら多し。
路衢、唯哭するを見る、城市、歌を聞かず。
漂梗、安地無く、銜枚、荷戈有り。
官軍未だ蜀に通ぜず、吾が道竟に如何。

【字解】〔一〕征夫　征伐にでてゐるひと。〔二〕十室　十戸。〔三〕衢　またみち。〔四〕漂梗　梗は棒切れ、漂梗は自己を比す。〔五〕銜枚　枚は箸のごときもの、それに紐をつけ、口にくはへさせて紐をうしろにしばる、兵卒に物を言はさず行軍するときの器なり、銜はふくむ、くはへること。〔六〕荷戈　戈をになふもの、兵卒をいふ。〔七〕未通蜀　蜀へかよふことができぬ。〔八〕吾道　自己のゆくべきみち、前途をいふ。

【題義】征夫のことに感じてより、前詩と同時の作ならん。

【詩意】このへんの地方では十軒の家にはたして幾人がのこつてゐるか。山だけがいたづらに多くあるばかりだ。路をあるいてみると哭してゐるものばかりみうける、城市をとほつても歌ふこゑはすこしもきこえぬ。自分も水にただようてゐる棒切のごとくおちついたばしよをもたぬが、それ以上に枚を口にくはへて戈を荷うて從軍してゐるものさへあるのである。まだ官軍が蜀への道をひらいてくれぬさうだが、いつたい自分の前途はどうなるだらう。

西山三首

〔一〕

夷界荒山頂。蕃州積雪邊。
築城依白帝。轉粟上青天。
蜀將分旗鼓。羌兵助鎧鋋。
西南背和好。殺氣日相纏。

夷界、荒山の頂、蕃州、積雪の邊。
築城、白帝に依る、轉粟、青天に上る。
蜀將、旗鼓を分ち、羌兵、鎧鋋を助く。
西南、和好に背く、殺氣日に相纏ふ。

【字解】〔一〕西山　雪嶺をいふ、吐蕃との接境なり。〔二〕依白帝　白帝は西方をつかさどる帝なり、その帝のゐるところに依つてゐるとは高きをいふ。〔三〕轉粟　兵糧をはこぶこと。〔四〕上青天　山をのぼるの高きをたとへていふ。〔五〕分　部隊に分配す

る。【六】羌兵　唐に降參した羌種の兵。【七】助　吐蕃の亂に内應するをいふならん。【八】鎧鋌　鎧は頭盔なり、鋌は小さき矛なり。【九】西南　蜀の吐蕃と境を接した地をいふ、西南とは都よりして西南の義、一本に南を戎に作る、簡明なりといふべし。【一〇】和好　なかをよくすること。

【題義】吐蕃が松州を圍みしときのことをのぶ、雪嶺その境にあるを以て「西山」と題せり。廣德元年の作。

【詩意】夷の界は荒れた山の頂にあり、蕃の州は雪の積もつてゐるあたりにある。之をふせぐに味方は城を築くに白帝の居る樣な高いところに依り、兵糧をはこぶに青天にのぼるほどの困難をしてゐる。さうして蜀將は旗鼓を分ちて之をふせぎ、降參した羌兵までが敵に内應して鎧鋌のことのてつだひをしてゐる。西南境吐蕃のものが和好を破つたために、かくして日日殺氣がまとひつつある。

〔一〕

辛苦三城戍。長防萬里秋。
煙塵侵火井。雨雪閉松州。
風動將軍幕。天寒使者裘。
漫山賊營壘。迴首得無憂。

辛苦、三城の戍、長く防ぐ萬里の秋。
煙塵、火井を侵し、雨雪、松州を閉づ。
風は動く將軍の幕、天は寒し使者の裘。
漫山、賊、壘を營む、首を迴らして憂無きを得むや。

【字解】【一】三城　松・維・保・三州の城。【二】防秋　秋の來寇をふせぐ。【三】火井　邛州の火井をさすならん。【四】閉　城門とづ、即ち敵にかこまれてゐること。【五】風動　幕の不安をいふ。【六】使者裘　蓋し和親を議するため使者をだせしならん。【七】漫山　山にはびこる。【八】迴首　作者圍州にあるものなれば圍州より松州の方面へむくをいふ。

【詩意】吐蕃に對する三城の戍は辛苦なことで、萬里のとほくにでていつまでも秋の侵入をふせいでゐるのだ。いま敵の兵馬の塵は火井の方面を侵し、雨雪のときに松州はかこまれその城門は閉ぢられてゐる。將軍の陣營の幕には風がはためき、こちらから出した使者の裘にはいたづらに天が寒く感ぜられる。みわたす山山賊がとりでを營んでゐる。これではそちらをむいて心配せずにゐられようか。

〔二〕

子弟猶深入。關城未解圍。
蠶崖鐵馬瘦。灌口米船稀。
辯士安邊策。元戎決勝威。
今朝烏鵲喜。欲報凱歌歸。

子弟猶深く入る、關城未だ圍を解かず。
蠶崖、鐵馬瘦せ、灌口、米船稀なり。
辯士、安邊の策、元戎、決勝の威。
今朝、烏鵲喜ぶ、凱歌して歸るを報せむと欲す。

【字解】【一】子弟　邛州雅州及び羌兵のわかもの。【二】深入　敵地へおくふかくはひる。【三】關城　せきしよを設けたしろ。【四】蠶崖　關の名、導江縣西北七十里にありと、導江縣は唐のとき今の灌縣を分ちて置きたるものなり。【五】鐵馬　よろひたるうま。【六】灌口　鎮の名、導江縣西六十里にありと。【七】辯士　雄辯をふるふ策士。【八】安邊策　邊境を安全に

するはかりごと。【九】元戎　總大將、けだし節度使をさす。【一〇】決勝威　かちいくさをきめる威力。【一一】烏鵲喜　「西京雜記」に烏鵲噪而行人至の語あり、かささぎのよろこぶはいいことのあるきざしなりといへり。【一二】報　かささぎがしらせる。【一三】凱歌歸　官軍がかちどきをあげてかへる。

【詩意】諸方のわかものがまだおくふかく攻め入つてゐるが、關城はまだ圍みがとけぬ。蠶崖關ではみかたの鐵馬は痩せ、灌口鎭には兵糧ぶねもまれである。このとき辯士は邊地を安全にするはかりごとをたて、大將は勝敗を決定するだけの威力を示さうとかかつてゐる。けさはかささぎが喜んでゐるが、それをみると味方がかちどきをあげてかへるぞといつてしらせてくれるつもりであるかの樣にみえる。

與嚴二郎奉禮別

嚴二郎奉禮と別る

別君誰暖眼。將老病纏身。
君に別るれば誰か暖眼ならむ、將に老いむとして病、身に纏ふ。

出涕同斜日。臨風看去塵。
出涕、斜日に同じくす、臨風、去塵を看る。

商歌還入夜。巴俗自爲隣。
商歌還た夜に入る、巴俗自ら隣を爲す。

尙愧微軀在。遙聞盛禮新。
尙愧づ微軀の在るを、遙に聞く盛禮の新なるを。

【字解】【一】嚴二郎奉禮　嚴二郎は排行二なる人ならん、奉禮は官名、奉禮郎なり、君臣の班位を掌りて以て朝會祭祀の禮を奉ずるものなり。【二】暖眼　冷眼の反對、あたたかいめでみてくれるをいふ。【三】出涕同斜日　斜日のときに同じく涕をだす。【四】去塵　嚴が去りゆくみちにたちのぼるちり。【五】商歌　商調のうた。「淮南子」に齊の桓公、寧戚といふものが牛を飼ひ車のそばで牛の角をうちながら疾く商歌するを聞きその賢なるを知りて擧げ用ひたり。また孔子の門人子貢の商歌せること「莊子」にみゆ。【六】巴俗　巴地の風俗、これは輕喪していへるものなるべし。【七】微軀　ささいなからだ。【八】盛禮新　盛禮は長安にて行はるるさかんなる儀禮にて大事を宗廟に告げ、また俘虜を獻ずる等のことをさす。【九】山東　太行山の東、河北、直隸の地方をいふ。【一〇】盜散、受降　このとき薛嵩は四州を以て降り、田承嗣は魏州を以て降れり、是、盜散受降のことなり。【一一】諸將　はじめ賊軍に從ひし武將等をさす。【一二】題書　てがみをかく。【一三】旅人　作者自己をさす。

【題義】嚴某が奉禮郎に任ぜられて長安へゆくので之と別れることをのべた詩。廣德元年閬州にての作。

【詩意】あなたと別れたなら、だれが果してわたしをあたたかいめでみてくれようか、わたくしは老いんとして病氣にまとはれてゐる。日のかたむくときいつしよに涕をながし、風にのぞんであなたの去るあとに立ちのぼるほこりをながめやる。』それから商調のうたをうたうてまた夜になつた。あたりを見れば自分ととなるものは巴地の風俗である。自分はじぶんの樣なつまらないからだがなくなり

山東群盜散。闕下受降頻。
山東、群盜散ず、闕下、受降頻なり。

諸將歸應盡。題書報旅人。
諸將、歸する應に盡くべし、書を題して旅人に報ぜよ。

もせずまだ存在してゐるのかと愧づかしくおもうてゐるが、はるかにみやこに盛禮があらたに行はれるときくはうれしい。いま山東に盜賊は離散してしまひ、御所のごもんでは賊の降參をしきりにおうけになつてゐる。賊の武將等はすつかり歸順したとおもはれるが、あなたはそのことがあつたら手紙にかいてこの旅人たるわたしにしらせてください。』

贈裴南部（一）【原注】聞袁（二）判官自來欲有按（三）問

裴南部に贈る　【原注】袁判官自ら來り按問する有らんと欲すと聞く

塵滿萊蕪甑。堂橫單父琴。
人皆知飲水。公輩不偸金。
梁獄書應上。秦臺鏡欲臨。
獨醒時所嫉。群小謗能深。
卽出黃沙在。何須白髮侵。
使君傳舊德。已見直繩心。

塵は滿つ萊蕪の甑、堂には橫はる單父の琴。
人皆、水を飲みて、公が輩の金を偸まざるを知る。
梁獄、書應に上るなるべし、秦臺、鏡、臨まむと欲す。
獨醒、時の嫉む所、群小、謗能く深し。
卽ち黃沙を出でて在らむ、何ぞ須ひむ白髮の侵すを。
使君、舊德傳ふ、已に見る直繩の心。

【字解】【一】裴南部　南部は縣の名、關中縣の南にあり、裴南部とは南部縣令裴某をいふ。【二】袁判官　判官袁某。【三】按問　裴某が罪惡をしたかどうかをとひただししらべる。【四】萊蕪甑　後漢の范丹が故事、丹、字は史雲、萊蕪縣の長となり清貧なり、人歌うて曰く、甑中生レ塵范史雲、釜中生レ魚范萊蕪と。甑は米を炊ぐもの、「脚のなきなべ」なり、范を以て裴に比するなり。【五】單父琴　單父は縣の名、孔子の門人宓子賤單父の宰となり琴を彈じ、堂より下らずして治まるといへり、子賤を以て裴に比す。【六】飲水　晉の鄧攸、吳郡の守となる、米を載せて官にゆき、俸祿は受くる所なく、吳の水を飲むのみ、鄧攸を以て裴に比す。【七】公輩　公は裴をさす、あなたのごとき人人の意。【八】不偸金　漢の直不疑が故事。不疑、郎となる、同舍に休暇にてかへるものあり、同舍の郎の金を持ちて去る、金の所有者不疑を疑ふ、不疑なんともいはず金を償ふ、のち休暇にてかへりし男歸り來る、金の所有者大に慙づと。不疑を以て裴に比す。この裴某は蓋し他人の財をどうかせしとの嫌疑をうけしとみゆるなり。【九】梁獄書應上　漢の鄒陽が故事、鄒陽、梁の孝王に從て遊ぶに羊勝之といふものの讒言をうけ獄にくださる。陽獄中より書を上りて獄よりいづることを得たり。裴某時に辯明書をだせしをいふ。【一〇】秦臺鏡欲臨　秦に廣四尺、高五尺九寸の方鏡あり、表裏洞明にして腸胃五臟をも照らし見るといふ、臺は鏡をのせる臺、鏡は袁判官の明知にたとふ、臺に臨まんとするとはしらべにこようとしてゐることをいふ。【一一】獨醒　屈原が故事、原は衆人が醉へるにひとりさめたり、裴、之に似たるをいふ。【一二】群小　多くの小人。【一三】黃沙　地名にして獄を意味す、晉の太康五年六月初めて黃沙の獄を置くと史にみゆ。【一四】何須白髮侵　心配して白髮に侵されるなかれといふなり。【一五】使君　袁判官をさす。【一六】傳舊德　これまでの德が世につたへられてゐる。【一七】直繩心　正直の心、正直なればその裁判の正しきこともしらるる。

【題義】南部縣の縣令裴某に贈つた詩。裴は疑獄事件にひつかかりて袁判官のとりしらべをうけんとしてゐた。それでこの詩をやつてなぐさめたのである。廣德元年閬州にての作。

【詩意】范萊蕪の甑には塵がいつぱいだ。單父の縣宰宓子賤の堂には琴が一張おいてあるきりだ。あ

なたはそんなひとだ。だから人はみんなあなたは鄧攸のごとく水ばかりのみ、直不疑のごとく他人の金などぬすまぬものだといふことを知つてゐる。』　あなたは鄒陽のごとく辯明書をだしたでありませう、いまや秦鏡の如きあかるい裁判官がこようとしてゐるのである、醉つぱらひのなかにひとりで醒めてをれば時世の人たちにねたまれる、つまらぬやつらはずゐぶん深くひとのことをわるくいふものだ。あなたはすぐに黄沙の獄から出られること(一)であらう。心配して白髪に侵される必要はちつともない。判官袁君は評判の徳のある人だ。この人がくるなら法にかなつたまつすぐな裁判することは見えてゐる。

巴山

巴山遇中使。云自陜城來。
盜賊還奔突。乘輿恐未回。
天寒邵伯樹。地濶望仙臺。
狼狽風塵裏。羣臣安在哉。

【字解】【一】巴山　閬州の山をいふ。【二】中使　宮中よりの使者。【三】云　使者が云ふ。【四】陜城　陜州の城、陜州は河南省にあり、廣德元年十月、吐蕃は邠州及び奉天を陷れ、代宗の車駕陜州に行幸あり、又三日にして吐蕃は長安を陷れたり。【五】盜賊　吐蕃をいふ。【六】奔突　はしつてついてくる。【七】乘輿　天子(代宗)のおのりもの。【八】回　長安へかへる。【九】邵伯樹「詩經」に甘棠の詩あり、甘棠(やまなしのき)の樹のしたで周の邵伯が訴をきいたといはれ、樹が陜州府署にのこつてゐると稱せられてゐる。【一〇】地濶　濶はひろき義なるも作者は遠き義に用ふ、ここからかしこまでまびろいといふので遠い義を生ずる。【一一】望仙臺　漢の武帝の建てし臺にて華州華陰縣に在り、陜州へゆくには華州を經てゆく、近地の名所をあげたり。【一二】狼狽　うろたへる。【一三】風塵　兵亂のちり。【一四】羣臣　多くの朝廷の臣。

【題義】閬州の山地で當時代宗の逃げてをられた陜州からきた使者にあうたことをのべたり。廣德元年十一月閬州にての作。

【詩意】自分は巴山で宮中からきた使者にであうた。彼がいふに「自分は陜州の城から來た。また盜賊が奔つて突擊してきた。お上(代宗)のおのりものは未だ都へおかへりにはならぬであらう。」と。邵伯の訴をきいた樹のあるところには寒ぞらがきた。望仙臺のあるところはここからよほどとほい。そんなところまで兵亂のちりのなかをうろたへて逃げだしたとはなんといふざまだ。朝廷に果して羣臣が居るといへるのか。

早花

西京安穩未。不見一人來。

西京、安穩なりや未や、見ず一人の來るを。

臘日巴江曲。山花已自開。
盈盈當雪杏。艷艷待春梅。
直苦風塵暗。誰憂客鬢催。

臘日、巴江の曲、山花已に自ら開く。
盈盈、雪杏に當る、艷艷として春梅を待つ。
直風塵の暗きに苦しむ、誰か憂へむ客鬢の催すを。

【字解】〔一〕早花　はやざきの花、花は桃花ならん。〔二〕西京　長安。〔三〕臘日　十二月の臘日、臘日のこと已にみゆ。〔四〕巴江　嘉陵江。〔五〕曲　みくまり。〔六〕盈盈　みづみづしき貌。〔七〕當　匹敵する。〔八〕雪杏　雪のごとくしろいあんずの花。〔九〕艷艷　つやあるさま。〔一〇〕待春梅　春梅のさくのを待つてゐる、自分がはやくさいたからである。〔一一〕直苦　作者の感じをいふ。〔一二〕風塵　兵亂のちり。〔一三〕催　次第に生じ來るをいふ。

【題義】はやざきの桃花をみてよめり。廣德元年十二月の作ならん。

【詩意】長安は安穩であるのやらどうやら、だれひとりこちらへ來たものがない。ここの巴江のみくまりには臘日であるのにはや山の桃の花がさいた。花の樣子はみづみづしくて雪のやうな杏の花にも匹敵してをり、つやつやとして梅がさくのを待つてをるやうだ。自分は之を見てただ兵亂の塵がまだ暗くとざしてゐることのみにこまつてをる。（兵亂の塵ある故に長安へかへれず巴地に居る、巴地にをるからこんな時ならぬ花をみるとの底意なるべし）。客中のびんの毛がおひおひに白髮になることなどはだれが心配するものか。

發閬中

前有毒蛇後猛虎。
溪行盡日無村塢。
江風蕭蕭雲拂地。
山木慘慘天欲雨。
女病妻憂歸意急。
秋花錦石誰能數。
別家三月一書來。
避地何時免愁苦。

閬中より發す

前には毒蛇有り、後には猛虎。
溪行盡日、村塢無し。
江風蕭蕭として、雲、地を拂ふ。
山木慘慘として、天、雨ふらむと欲す。
女病み妻憂へて歸意急なり。
秋花錦石、誰か能く數へむ。
家に別れて三月、一書來る。
避地何の時か愁苦を免れむ。

【字解】〔一〕閬中　閬州の閬中縣。〔二〕溪行　溪邊をあるく。〔三〕村塢　塢は「どて」。〔四〕女病妻憂　これは後にある書中の內容なり、梓州に於てむすめが病み、妻がしんぱいしてゐるなり。〔五〕歸意急　家へかへらうとの意が急だ。〔六〕秋花　今は冬なれど秋から咲いてゐる花をいふ。〔七〕錦石　うつくしい石。〔八〕別家　家は梓州の家。〔九〕三月　九月に閬州へきたのであるから、十二月で三月になる。〔一〇〕避地　騷亂の土地をさける。

【題義】閬中から出發して梓州へかへつたときの詩。廣德元年十二月の作。

【詩意】前には毒蛇がゐる、うしろには猛虎がゐる、あさから晩までたにがはにそうてゆくが村のどてのやうなものはみあたらぬ。江風はさびしく吹いて雲は地面を拂ひ、山の木はものがなしさうで雨がふりだしさうなそらだ。きけばむすめは病氣であり妻は心配してゐるといふので自分のかへるここ

わはいそいでゐるのだ。秋草の花だの錦紋の石などが溪のそばにあつたとてそんなものをだれがかぞへたててゐられようぞ。うちから別れて三月めに一本の手紙がきたのだ。あちこち土地をよけてゐてはいつ愁苦から免れることができようか。

江陵望幸

雄都元壯麗。望幸歎威神。
地利西通蜀。天文北照秦。
風煙含越鳥。舟楫控吳人。
未枉周王駕。終期漢武巡。
甲兵分聖旨。居守付宗臣。
早發雲臺仗。恩波起涸鱗。

江陵幸を望む

雄都元壯麗、望幸歎ち威神。
地利、西、蜀に通ず、天文、北、秦を照らす。
風煙、越鳥を含み、舟楫、吳人を控す。
未だ枉げず周王の駕、終に期す漢武の巡。
甲兵、聖旨より分つ、居守、宗臣に付す。
早く雲臺の仗を發して、恩波、涸鱗を起さむ。

【字解】【一】江陵望幸　江陵は湖北の荆州府江陵縣、これは江陵の人人をさす、望幸とは天子の行幸をのぞむをいふ。建都十二韻の詩とくらべてみるべし。上元の初に呂諲といふもの荆州に南都を置かんことを請ひたり、因て荆州を江陵府とし諲をその尹とし、永平軍一萬人を置きたり。廣德元年十月に代宗吐蕃の亂を避けて陝州に幸するや、衞伯玉が才幹あるを以て之を江陵尹に任じ、荆南節度觀察等使に充てたり。當時代宗陝州より江陵に巡幸せんと欲すとのうはさありしによりてこの詩を作りたり。作者は「建都」に於ては建都に不滿の意を示したるが、この詩には行幸を望むことをのべたり。【二】雄都　地形の雄大なみやこ、江陵をさす。【三】歎威神　威神とは尊嚴の意、たちまち威神とは「にはかに尊嚴をますがごとし」との意ならん。【四】天文　南方朱鳥の星宿をさすといへり。【五】含越鳥　越は今の浙江省、荆州とはかけ離れたるも風煙は越の鳥までいれてゐると大きくいひしなり。【六】控吳人　吳は江蘇省の地、吳の人をもひかへてゐる。【七】周王駕　周の穆王の車駕、穆王は天下を周遊してどこにも車轍馬迹あらしめんとしたといふ人なり、ここは代宗にあてていふ。【八】漢武巡　漢の武帝の巡幸。武帝も南方を巡ぐりて盛唐といふ地までゆけり。以て代宗に比す。【九】甲兵分聖旨　代宗のおぼしめしによりて甲や武器を分けたとは永平軍をここに置いたことをいふ。【一〇】居守付宗臣　ここに居て守る役を世の宗ぶ所の臣に付托した、とは衞伯玉を任命したことをいふ。【一一】雲臺仗　已にみゆ、御所の旗さしものをいふ、お行列に加はるものなり。【一二】恩波　天子のごおんの波。【一三】起涸鱗　涸鱗はみづのかれたところにゐるさかななり、水なければさかなはひからびて死せんとす。起とはれてゐるのをひきたたせること。涸鱗とは罷敝せる人民をたとへていふ。

【題義】江陵の人が代宗の行幸をおまちしてゐることをのべたり。（餘は「字解」の條をみよ）。廣德元年冬の作。

【詩意】江陵の雄都は元來が壯麗なるものであるが、人民が行幸を望む樣になつてからはにはかに尊嚴が加はつた樣である。江陵は地の利はといへば西のかた蜀に通じてをり、天文でいへば朱鳥の星のひかりは北のかた秦を照らし、風煙ははるかに越の鳥をもふくみいれ、舟楫の便はとほく吳地の人をひかへてゐる。これほどの場所だ。まだ周の穆王の車駕をおまげくださぬけれども結局漢の武帝の御巡幸あらんことを期してゐるのである。すでにおぼしめしによつて甲兵をここに分けて永平軍を駐在せしめられ、またここにゐてここを守る役としては衆望のたつとぶ臣下に御付托があつた。このう

へは早くごしよから御行列のたてものを發せられここにおいでくださつて、ご恩の波のうるほひを以て枯死せんばかりの魚の様な罷敝してゐる人民をひきたたせる様にしていただきたいものでござる。

愁坐

高齋常見野。愁坐更臨門。
十月山寒重。孤城水氣昏。
葭萌氐種迥。左擔犬戎屯。
終日憂奔走。歸期未敢論。

【字解】【一】愁坐　心配しながらすわる、第二句の「愁坐」の二字をとる。【二】高齋　たかき書齋。【三】重　つよきをいふ。【四】孤城　閬州の城。【五】葭萌　蜀王その弟葭萌を漢中に封じ號して苴侯といふ、因て其地を命じて葭萌といふ、人名にして地名となりしなり、のち縣名となる、保寧府昭化縣にあり。梓州よりは東北にあたる。【六】氐種　すなはち羌人をさす。【七】左擔　その地險阻にして北より來るものは右肩にて物を擔ふを得ざるにより左擔道の名ありと、地は綿州梓潼縣にあり、梓州の北にあたる。【八】犬戎　吐蕃をさす。【九】奔走　東奔西走なり。【一〇】歸期　故郷へかへる時期。

【題義】心配しながらすわつてかんがへたことをのぶ。詩中に「奔走」とあれば梓州閬州の間を往來せしころの作なるには相違なきも、「十月」とあれば恐らくは廣德元年閬州にての作ならんか。

【詩意】書齋からはいつも原野がみえてゐるが、いまは更に門のところへでてきて心配がほにすわつてみる。いま十月で山の寒さはきつく、このはなれ城では水氣がくらくとざしてゐる。葭萌の地にはるかに氐種のものが居り、左擔の地には犬戎（吐蕃）がたむろしてゐる。（いづれも道路のじやまになるもの。）こんなありさまで自分はあさから晩まで奔走の心配がある。いつ故郷にかへれるかなどいふことは詮議だてさへようせぬのである。

遣憂

亂離知又甚。消息苦難眞。
受諫無今日。臨危憶古人。
紛紛乘白馬。攘攘著黃巾。
隋氏留宮室。焚燒何太頻。

【字解】【一】遣憂　うれへのこころをおひはらふ。【二】亂離　世みだれて人人離散すること。【三】消息　みやこのたより。【四】受諫　郭子儀、代宗に對して吐蕃に對し警戒せざるべからざることをいふ、代宗が子儀のいさめを受け用ひられしならばの意。【五】今日　今日の騷亂をいふ。【六】臨危　國家のあやふきときにさしかかつては。【七】古人　むかしの賢人。【八】紛紛、攘攘　竝にみだるるかたち。【九】乘白馬、著黃巾　反亂者、盜賊のおこること。梁の武帝のとき侯景反す、白馬に乘る。後漢の

憂を遣る

亂離、又甚しきを知る、消息、眞なり難きに苦しむ。
諫を受くれば今日無かりしならむ、危に臨みて古人を憶ふ。
紛紛として白馬に乘ず、攘攘として黃巾を著く。
隋氏、宮室を留む、焚燒何ぞ太だ頻りなる。

靈帝のとき鉅鹿の人張角自ら天公と稱し兵をあぐ、其の兵三十六萬人みな黄巾を著く。【一〇】隋氏　隋朝をいふ、唐のことなれど遠慮して隋といふ。【一一】留宮室　唐の宮室は隋以來のもの、隋がとどめおきしものといへるなり。【一二】焚燒　宮室を燒きはらふこと。廣德元年吐蕃入寇す、邊將急を告ぐ。程元振みな奏聞せず。十月吐蕃深く入り來る、代宗はじめて兵を治めしむ、吐蕃はすでに長安の北、渭水の便橋を渡る。代宗逃れて陝州に幸す。吐蕃長安に入り大に宮室を燒きはらふ。詩はその事をききて詠ぜり。

【題義】吐蕃侵入のことをきき心配をはらふためにつくれる詩。廣德元年冬の作。

【詩意】みやこの騷動はまたひどくなつたことを知つたが、たよりがどれがほんたうだかわかりにくいのでこまる。もしお上（代宗）が以前臣下の諫めをおうけいれになつてゐたなら今日のやうなさわぎも無かつたであらうものを。自分は國家の危難にのぞんでは古の賢人をおもふのである。いまどこでもだれでもがみだれたつて白馬に乘つてそむくもの黄巾をつけて盜賊をはたらくものばかりである。さうして隋以來のこされたわが唐の宮室の焚きはらはれることがなんでかく頻頻とあるのであらうか。

冬狩行[一]

冬狩行　【原注】時に梓州の刺夫章彝、侍御史を兼ねて、東川に留後たり

君不見東川節度[二]　君見ずや東川の節度、兵馬雄なり、

【字解】【一】冬狩行　冬のかり

兵馬雄。[三]

校獵亦似觀成功。[四][五][六]　校獵、亦、成功を觀すに似たり。

夜發猛士三千人。[七]　夜、猛士三千人を發す、

清晨合圍步驟同。[八][九]『清晨合圍、步驟同じ。』

禽獸已斃十七八。[一〇]　禽獸已に斃る十に七八、

殺聲落日迴蒼穹。[一一][一二][一三][一四]　殺聲落日、蒼穹に迴る。

幕前生致九青兕。[一五][一六][一七]　幕前生きながら致す九青兕、

駞駝嵩崒垂玄熊。[一八][一九][二〇]　駞駝嵩崒として玄熊垂る。

東西南北百里間。[二一]　東西南北百里の間、

髣髴蹴踏寒山空。[二二][二三]　髣髴たり蹴踏寒山空しきに。

有鳥名鸛鴿。[二四]　鳥有り鸛鴿と名く、

力不能高飛逐走蓬。[二五]　力高飛する能はず走蓬を逐ふ。

肉味不足登鼎俎。[二六]　肉味、鼎俎に登すに足らず、

のうた。【三】東川節度　東川節度使の留後（るすやく）章彝をいふ。【四】雄　雄壯。【四】校獵　諸解あるも障害物を設け禽獸をさへぎりてかりする義と解すべし。【五】觀　人人にみせしめること。【六】成功　士卒の訓練ゆきとどきたる成績。【七】清晨　はれたるあした。【八】合圍　多人數で包圍する。【九】步驟同　驟ははしること、あしなみのそろひて一致するをいふ。【一〇】十七八　十中に七又は八。【一一】殺聲　殺伐なこゑ。【一二】落日　ゆふひのおつるとき。【一三】迴　殺聲がめぐるなり。【一四】蒼穹　あをぞら、穹とは天の弓なりになりたるをいふ。【一五】幕前　節度使の陣幕のまへ。【一六】生致　生きながらもつてくる。【一七】青兕　肉味、鼎俎に登すに足らず、

胡爲見(二七)羈(二八)虞(二九)羅中。』
春蒐冬狩(三〇)侯得(三一)用。
使君五馬(三二)一馬(三三)驄。
況今攝行大將權。
號令頗有(三六)前賢風。』
飄(三七)然時危一老翁。
十年(三八)厭見(三九)旌(四〇)旗紅。
喜君士卒甚整肅。
爲我迴(四一)轡擒(四二)西戎。
草中狐兎盡(四三)何益。
天子不(四四)在咸陽宮。
朝廷雖(四五)無幽王禍。
得(四六)不哀痛(四七)塵(四八)再蒙。

胡爲れぞ虞羅の中に羈せらるるや。』
春蒐冬狩、侯、用ふることを得、
使君五馬、一馬は驄なり。
況んや今攝行す大將の權、
號令頗る前賢の風有り。』
飄然時危し一老翁、
十年見るを厭ふ旌旗の紅。
喜ぶ君が士卒甚だ整肅なるを、
我が爲に轡を迴して西戎を擒にせよ。
草中の狐兎盡すも何の益かあらむ、
天子は在さず咸陽宮。
朝廷、幽王の禍無しと雖も、
哀痛せざるを得むや、塵再び蒙れり。

嗚呼得不哀痛塵　嗚呼哀痛せざるを得むや、塵再び蒙れ
再蒙。』　り。』

蒐冬狩　「周禮」に天子の四時のかりをあげて、春蒐夏苗秋獮冬狩といへり。又「左傳」にみゆ。【三一】　侯　諸侯。【三二】　得用　用は行ひもちふること、蒐狩の事は諸侯も之を爲すことを得べし。【三三】　使君　童彝をいふ。【三四】　五馬　太守は駟馬に右驂をそへ五匹の馬を用ふ。【三五】　一馬驄　驄はあをうま、御史ののるうま。童彝は侍御史を兼ぬるゆゑに之をいへり。【三六】　揮行　かりにおこなふ、留後なればなり。【三七】　前賢　むかしの賢人。【三八】　飄然時危　時危飄然をさかさまにいへり。【三九】　十年　天寶十四年より廣德元年まで九年、成數をあげ「十」といへり。【四〇】　旌旗紅　軍隊の旗色。【四一】　迴轡　たづなをひきめぐらす。かりばから西戎の方へむけかへること。【四二】　西戎　吐蕃をさす。【四三】　盡　狩りつくす。【四四】　天子不在咸陽宮　代宗吐蕃に攻められ陝州へ逃げだせしことをいふ、事實は前詩「遣憂」の條を見よ。咸陽宮は長安の宮殿をさす。【四五】　無幽王禍　周の幽王は驪山の犬戎に攻められて殺さる。禍とは殺されることをいふ。代宗は逃げただけでまだ殺されるにはいたらぬ。【四六】　得　反語によむ。【四七】　哀痛　かなしみいたむ。【四八】　塵再蒙　天子外へにげだすことを蒙塵といふ、再蒙といふはさきに玄宗は安祿山の亂にあひて蜀へ逃げゆかれたり、こんど代宗の陝州への逃げだしにて二回めなり。

【題義】　章彝が冬の狩をせしことにつきてのぶ。廣德元年冬、梓州にての作。

【詩意】　諸君見よ、東川節度の兵馬は雄壯なるものである。こんど障害物を設けて獵をするのだが同時に平生の訓練のゆきとどいてゐることを人にみせるつもりのやうである。まづ夜なかから三千人の猛士をくりだす、あしたにはそれがあしなみをそろへて禽獸を包圍するのである。』　かりたてられた禽獸はすでにたふれたものが十中七八であり、ゆふ日のおつるころ殺伐な聲があをぞらまでまひあが

虞は山林の番人、羅は「あみ」、鸛鵲をいへるはこんな微物までとつたことの例にあげたるなり。【三〇】　春　得用　用　鼎俎　かなへ、まないたのうへにのぼす、料理するをいふ。【三七】　胡　爲　何爲に同じ、いかなるわけで。【三八】　羈　つなぐ。【三九】　虞羅　兕は野牛。【四〇】　駝駝　駱駝、らくだのせなかをいふ。【四一】　嵐嵐　高き貌、獲物をうづだかくつめるさま。【四二】　乖玄熊　玄熊は卽ち獲物の一なり、乖るとは獲物が多さゆゑらくだの背からはみだして下方へぶらさがつてゐるといふこと。【四三】　髣髴　さも似たり。【四三】　蹴踏　士卒が人馬にてけちらしてあるく。【四三】　寒山空　冬の山がからつぽになる。【四四】　鸛鵲　ひゑどり。【四五】　逐走蓬　走蓬は飛蓬のごとし、とんでゆくよもぎ、逐とはそのあとをおつかける、これは高くとべず地面をはうてとぶをいふ。【四六】　登　草中の狐兎盡すも何の益かあらむ。【四七】　胡　爲　何爲に同じ、いかなるわけで。【四八】　羈　つなぐ。【四九】　虞羅

る。本陣の幕のまへには九匹の青色の野牛が生きたままもちきたされる。駱駝のせなかには獲物がうづだかくつまれ玄熊などが背から垂れさがつてゐる。凡そ東西南北百里の間といふものは士卒がそれをふみちらして冬の山もからつぽになつたと同様である。ここに鸛鵠といふ鳥があつてその力はたかくとべず草むらで蓬のあとをおつかけまはる、これは料理してもたべられるほどの肉味のあるものでもないのになんで山番のあみのなかにひつかかつたのか、かやうなものまでかりとられたのである。』いつたい春の蒐、冬の狩は天子の禮であるが諸侯でもそれはやれるのである、章君は刺史でまづ諸侯の身分だ、その馬は刺史としては五馬であるが、そのうへに侍御史だから一馬は驄馬である。まして節度使の留後で今は大將の權力を代行して、その號令やすこぶる前代賢者の風がある。』（之をみるにつけて自分に所感がある。）いま時世の危きとき漂泊生活をしてをるこのおやぢは十年このかた軍旗の色をみるのがいやになつてをる。ところで君の士卒の甚だ整肅であるのを見てうれしくおもふ。どうかわたしの爲めに轡をむけかへていまあばれてゐる西戎（吐蕃）をいけどりにしてもらひたい。草のなかにゐる狐や兎をかりつくしてみたところで何の利益があるか。今、天子は咸陽宮におはさず陝州の方へおにげになつてをるのである。朝廷におかせられてはなるほどまだむかしの周の幽王が驪山で殺されたまうたほどの禍はないといふものの、どうして我我はこんどの二度めの御蒙塵に對して哀痛せずにゐられうか。ああどうして二度めの御蒙塵に對して哀痛せずにゐられうか。』

山寺（一）

【原注】章留後同遊。得開字。

野寺根石壁。諸龕遍崔嵬。
前佛不復辯。百身一莓苔。
雖有古殿存。世尊亦塵埃。
如聞龍象泣。足令信者哀。
使君騎紫馬。捧擁從西來。
樹羽靜千里。臨江久徘徊。
山僧衣藍縷。告訴棟梁摧。
公爲顧賓從。咄嗟檀施開。
吾知多羅樹。卻倚蓮華臺。
諸天必歡喜。鬼物無嫌猜。
以茲撫士卒。孰曰非周才。
窮子失淨處。高人憂禍胎。

【原注】章留後同遊す、開の字を得たり

野寺、石壁に根す、諸龕、崔嵬に遍し。
前佛、復辯せず、百身、一に莓苔なり。
古殿の存する有りと雖も、世尊も亦塵埃なり。
龍象の泣くを聞くが如し、信者をして哀ましむるに足れり。
使君、紫馬に騎り、捧擁して西より來る。
樹羽、千里靜なり、江に臨みて久しく徘徊す。
山僧、藍縷を衣る、告訴す棟梁摧くと。
公爲に賓從を顧み、咄嗟、檀施開く。
吾知る多羅樹、卻つて倚る蓮華臺。
諸天必ず歡喜し、鬼物、嫌猜無きを。
茲を以て士卒を撫す、孰れか周才に非ずと曰はむ。
窮子、淨處を失す、高人、禍胎を憂ふ。

歲晏風破肉。荒林寒司迴。
思量入道苦。自哂同嬰孩。

【字解】〔一〕山寺　山上の寺。梓州の某寺なり。觀音寺ならんか。〔二〕根　石壁を根基とするなり。〔三〕諸龕　龕は佛像をはめこんである處をいふ、蓋し石崖にほりつけしものならん。〔四〕崔嵬　山をいふ。〔五〕前佛　崖前にあらはれてゐる佛像。〔六〕莓苔　こけ。〔七〕世尊　釋迦の像、これは殿中にあるもの。〔八〕龍象　僧の秀でたるものをさしていふ。〔九〕信者　佛法を信奉する人人。〔一〇〕使君　章彝。〔一一〕捧擁　多くの人人にかこまれる。〔一二〕從西來　此句によれば寺は梓州の東にあたる寺とみえたり、東なる寺ならば觀音寺ならんか。〔一三〕樹羽　羽は羽旄ならん、羽のついたはた。〔一四〕靜千里　經過するところ人さわがせをせぬ。〔一五〕臨江　江は涪江。〔一六〕藍縷　ぼろぼろ。〔一七〕告訴　章に向つて申しだす。〔一八〕棟梁　寺のむなぎ、はり。〔一九〕公　章をさす。〔二〇〕爲　僧のために。〔二一〕賓從　賓客、從者。〔二二〕咄嗟　あつといふまに。〔二三〕檀施開　檀施とは梵語と漢語とを合併したる語なり、梵語の檀波羅蜜は漢語にて布施の義なり、檀と施とを合はせて檀施といふなりと。開とははじめたこと。〔二四〕吾知　知の字は恐らくは無嫌猜の句までへかかるならん。〔二五〕多羅樹　佛教の經文を寫す樹の名。「酉陽雜俎」にいふ、貝多は摩伽陀國に出づ、樹の長さ六七尺、冬を經て凋まず、此の樹に三等あり、一は多羅婆力叉貝多、二は多梨婆力叉貝多、三は部闍婆力叉貝多これなり。多羅・多梨は竝に其の葉に書す。部闍の一種は其の皮を取りて之に書す。貝多は漢譯すれば葉なり、婆力叉は漢譯すれば樹なり云云。詩には樹とあれどいきた樹があるはずなければ、樹葉にて寫せし經文をさせるなるべし。〔二六〕卻倚蓮華臺　蓮華臺は佛の座をいふ、七寶蓮華臺なり、卻倚とは一たび荒廢せし寺なりしが章使君の布施によりて經文がふたたび佛の寶座に倚るを得るの義ならん。〔二七〕諸天　佛教にていふ欲界以上の天はみな諸天なり。〔二八〕鬼物　まのかみ。〔二九〕嫌猜　それみきらふ。〔三〇〕以茲　茲とは佛法尊信の態度をさす。〔三一〕撫　愛撫する。〔三二〕周才　ておちのなき才。〔三三〕窮子失淨處、高人憂禍胎　この二句は舊解定說なし、余は鄙見をのぶ。余は此の二句倒裝法を用ひしものにて自己のことをいふが主なりとみる。大體蔡夢弼の注意に本づく。高人は德高き人、だれにてもよきことなれども主として山僧をさす、禍には基あり、禍には胎あり、僧は禍胎を憂とし人をして行を修め務めて福田を作さしめんとす。これ高人憂禍胎の義なり。（或は章彝が作者に奉佛をすすめ、章をさして高人といひしとみるも通ずべきがごとし。）窮子とは作者自らを稱す、故事あり、「法華經」に佛が人を救ふたとへばなしあり曰く、ある人があつてこどものとき父をすててにげた、生長して困窮になつてゐる、父は之をさがすがたづねつけられぬ、困窮の子は人に傭はれて使役さるるものになつてゐた。偶然にもその子がその父のところへやとはれ、汚穢不淨を掃除する、父がいふに、おまへはわしの子ぢや、わしの財物はみなおまへのものぢや、と。困窮の子は之をきいて大に歡喜す云云。詩には淨處を失すとあれど意は「不淨處を失す」の義なちん、不淨處とは父の宅をいふ、適切にいへば佛の道場が窮子にとりての淨處（或は不淨處）なり、作者は自分はそのばしよをもたぬといふなり。〔三三〕歲晏　としのくれかかること。〔三四〕風破肉　寒さはげしきをいふ。〔三五〕荒林　寺の冬枯れのはやし。〔三六〕迴　寓所へもどる。〔三七〕入道苦　佛道にはひることのくるしきこと。〔三八〕嬰孩　みどりご。

【題義】梓州の山寺（觀音寺か）へあそびにゆきしことをのぶ、章彝も同行したるなり。廣德元年冬の作。

【詩意】石壁を根基として野寺がたつてゐる、その崔嵬たる山崖には佛像をはめこんだづしがたくさんある。前方にある佛像はどれがどれやらみわけがつかぬ、多くの像體はみな苔におほはれてゐる。うしろにはふるびた佛殿がのこつてゐるが、そのなかの世尊の像もほこりだらけである。之をみると心ある僧の泣くのをきくやうで佛法を信奉するものはあはれをもよほすだけのことはある。』章使君は紫の馬にのつて衆人にかこまれながら西の方からこの寺へやつてきた。千里のあひだ人さわがせをせずはたをたててきて江にのぞみながらながらくぶらぶらあそんでをられる。さうするとぼろぼろの

きものをきた山僧がお寺の棟梁がくだけてこまつてをりますと訴へる。章君はお客分のものやおともの
のものを顧みて咄嗟のあひだに寺に向つてお布施をおだしになつた。』之によつて自分は知る、貝多に
寫した經文も蓮華の臺に倚ることができ、諸天はみなきつと歡喜し、魔物らもそねみきらつて寺に災
をくだす樣なことがないであらうといふことを。章君はこの佛法尊信の態度で士卒を愛撫さるるなら
ば人人みなゆきとどいた才のあるお方だといふであらう。』さて自分であるが、高德人は禍胎をつく
らぬ樣に佛道を修めて善行をつめといふが自分はお經にある掃除すべき親の不淨處をもたぬ困窮の子
の樣なもので佛道には緣がうすい。いま歲くれかかつて風が肉を破らんばかりにはげしく、冬枯れの
林は寒くてたまらぬのでうちへもどるがよろしい。よくかんがへてみると佛道にはひることは苦しい
ものである。これをいやにおもふことはまるでこどもの考へみた樣なので自分ながらをかしくなる。』

桃竹杖引贈章留後

江心蟠石生桃竹。
蒼波噴浸尺度足。
斬根削皮如紫玉。
江妃水仙惜不得。
梓潼使君開一束。
滿堂賓客皆嘆息。
憐我老病贈兩莖。
出入爪甲鏗有聲。
老夫復欲東南征。
乘濤鼓枻白帝城。
路幽必爲鬼神奪。
拔劍或與蛟龍爭。
重爲告曰。
杖兮杖兮爾之生
也甚正直。
愼勿見水踴躍學
慎みて水を見て踴躍して變化して龍

江妃水仙、惜しみ得ず。
梓潼の使君開くこと一束、
滿堂の賓客皆嘆息す。
我が老病なるを憐みて兩莖を贈る、
出入するに爪甲、鏗として聲有り。
老夫復た東南に征かむと欲す、
濤に乘じ枻を鼓す白帝城。
路幽にして必ず鬼神に奪はるるをな
劍を拔きて或は蛟龍と爭はむ。
重ねて爲に告げて曰く、
杖や杖や、爾の生や甚だ正直なり。
慎みて水を見て踴躍して變化して龍

「さむ、」

【字解】【一】桃竹杖　しゆろ竹のつゑ。【二】江心　涪江の中心。【三】蟠石　蟠屈せる石。【四】噴浸　ふきつけ、ひたす。【五】尺度足　杖とするだけの長さ十分そなはる。【六】紫玉　杖の色。【七】江妃　漢江のめがみ。【八】水仙　馮夷といふ仙人。【九】惜不得　不レ得レ惜とおなじ、惜しんでもつてゆかせまいとしてもだめだ。【一〇】梓潼使君　梓州は唐のとき、梓潼郡といへり、使君は刺史、章をさす。【一一】開一束　ひとたばの杖をあける。【一二】嘆息　みごとなことをなげく。【一三】兩莖　ふたもと。【一四】出入　家よりではひりする。【一五】爪甲　つめ。【一六】鏗　かちんといふおと。【一七】老夫　おやぢ、自らさす。【一八】東南征　吳楚の方へゆく。【一九】鼓枻　枻をうごかす。【二〇】白帝城　夔州府の城、梓州より涪江を下れば先づここへでる。【二一】爲鬼神奪　奪の上に、

變化爲龍。　となるを學び、
使我不得爾之扶持。　我をして爾の扶持を得ず、
滅跡於君山湖上之青峰。　跡を君山湖上の青峰に滅せしむることなかれ。
噫風塵澒洞兮豺虎咬人。　噫風塵澒洞、豺虎、人を咬む、
忽失雙杖兮吾將曷從。　忽ち雙杖を失はば吾將に曷にか從はむとする。』

した貌。【二八】豺虎　盜賊をたとへいふ。【二九】雙杖　前に「兩莖」とありて二本のつゑなり。【三〇】曷從　曷は何なり、どこへゆかか。

【題義】章留後からしゆろ竹の杖二本をもらつたので章に贈つた詩。廣德元年冬の作。

【詩意】江の中心に蟠屈してゐた石に桃竹がはえた。かはの波がふきつけひたしてゐたのだが長さは十分にある。杖にするにいいから人がその根を斬り皮をむくと紫玉のやうなはだがあらはれる。江妃

「所」の字をいれてみるべし。【二二】學變化爲龍　壺公といふ仙人、費長房をやり歸すとき一の竹杖を與へ、これに騎らば家にかへりうべしといふ。長房杖にのるに忽然として眠るがごとくにして家に到る。竹杖を以て葛陂の中に投じ之を視れば青龍なりとの話あり。【二三】爾　汝、杖をさす。【二四】扶持　たすけ。【二五】滅跡　ゆくへ不明になる。【二六】君山湖上之青峰　湖上之青峰と君山とは同じものなり、君山は洞庭湖のなかにある山の名なり、湖上の湖は洞庭湖なり。【二七】澒洞　もやくやと。

や水仙が斬られては惜しいとおもうてもだめである。梓潼の長官章君がこの杖一束をもちだしたところが滿堂の賓客はあつとおどろいた。』　章君はわしが老人で病氣なのを氣の毒におもうて二本贈つてくれた。これをついてではひりするとき爪甲がふれるとかちんとおとがする。じぶんはこれからまた東南の地方へでかけようとおもうてゐる、かぢをうごかし濤にのつて白帝城をとほるだらう。途中にくらつぽい路を經るときは鬼神にこの杖を奪はれようとするかも知れぬ。或はまた劍をぬいて蛟龍と爭ふかも知れぬ。』　そこでかさねてこの杖にむかつていひきかせる。杖よ杖よ、おまへの生れいでたるやいと正直にでてきた。つつしんで水を見てもをどりだして變化して龍となる樣なまねをして、わたしをしておまへのたすけを得ず、湖上の青峰君山のあたりでゆくへ不明にならせる樣なことをしてはくれるなよ。ああいまは兵亂の塵がもやくやとわきたち豺虎のごときものが人をかむ時節だ。このときにはかにこの二本の杖をなくしたら、自分はどこにいつたらよいやらわからぬことになる。』

將適吳楚留別章使君留後兼幕府諸公得柳字

將に吳楚に適かんとして章使君留後兼び幕府諸公に留別す。柳の字を得たり

我來入蜀門。歲月亦已久。　我來つて蜀門に入る、歲月亦已に久し。

將適吳楚留別章使君留後兼幕府諸公得柳字

豈惟長(六)兒童。自覺成(七)老醜。
常恐性坦(八)率。失(九)身爲杯酒。
近辭(一〇)痛飲徒。折(一一)節萬(一二)夫後。』

豈に惟兒童を長せしめしのみならむや、自ら覺ゆ老醜と常に恐る性坦率にして、身を失ふ杯酒の爲ならむことを。近ろ痛飲の徒を辭して、節を折る萬夫の後。』「成れるを。

昔如(一三)縱壑魚。今如(一四)喪家狗。
既無(一五)遊方戀。行止復何有。
相逢半新(一六)故。取別隨(一七)薄厚。
不(一八)意青草湖。扁舟落吾手。』

昔は縱壑の魚の如くなりき、今は喪家の狗の如し。既に遊方の戀無し。行止復何か有らむ。相逢ふ半新故、別を取る、薄厚に隨ふ。意はざりき青草湖、扁舟吾が手に落つ。』

眷(一九)眷章梓州。開筵俯(二〇)高柳。
樓前出(二一)騎馬。帳下羅(二二)賓友。
健兒(二三)鼓(二四)紅旗。此樂幾難朽。
日車隱(二五)崑崙。鳥雀噪(二六)戶牖。』

眷眷たり章梓州、筵を開きて高柳に俯す。樓前、騎馬出づ、帳下、賓友羅る。健兒、紅旗を鼓る、此の樂幾ど朽ち難し。日車、崑崙に隱る、鳥雀、戶牖に噪ぐ。』

波濤未(二七)足畏。三峽徒(二八)雷吼。
所憂盜賊多。重見(二九)衣冠走。

波濤未だ畏るるに足らず、三峽徒らに雷吼す。憂ふる所は盜賊多しくて、重ねて衣冠の走るを見むことを。

中(三〇)原消息斷。黃(三一)屋今安否。
終作(三二)適荊蠻。安(三三)排用莊叟。』

中原、消息斷ゆ、黃屋今安きや否や。終に荊蠻に適くことを作す、排に安んずるは莊叟を用ふ。』

隨(三四)雲拜東皇。挂(三五)席上南斗。
有(三六)使卽寄書。無(三七)使長(三八)迴首。』

雲に隨つて東皇を拜し、席を挂けて南斗に上る。使有らば卽ち書を寄せよ、長く首を迴らさしむる無れ。』

【字解】【一】吳楚　吳は江蘇省地方、楚は湖北・湖南地方。【二】留別　詩を留めて別るること。【三】兼　「及」の字のごとくよむ。【四】幕府諸公　幕僚の人人。【五】入蜀門　門はいりくち、けだし劍門をさす、蜀門に入るは蜀の地内にはひるなり。【六】長兒童　兒童が生長する。【七】成老醜　としよりみにくくなる。【八】坦率　ひらべつたくかざりなし。【九】失身　一身をあやまつこと。【一〇】痛飲徒　ひどく酒をのむなかま。【一一】折節　ならぬ辛抱をすること。【一二】萬夫　けだし武人等をさす。【一三】縱壑魚　たにには なたれたろうを。自由な境涯をいふ。【一四】喪家狗　喪儀のある家はいそがしき故かひ狗も食物を與へられず瘦せてゐる。【一五】遊方戀　「論語」に父母いますときは子たるもの遊必有ㇾ方とあり、一定の方位に遊ぶべしといへり。作者は已に父母なきゆゑ一定の方位にあそぶといふことに戀著してゐるにおよばず、どこへむいてあそぶも可なるなり、故に行止復何有の句あり。【一六】新故　新知の人、舊知の人。【一七】隨薄厚　交際の厚薄に隨ふなり、仇注に「杜臆」をひきたるは恐らくは是に非ず。【一八】不意　意外にも。不意青草湖、扁舟落吾手、此二句にて青草湖のかかりぐあひははつきりせず。余は青草湖にゆくべき扁舟の義かとおもふ。何となれば作者のちに荊州を過ぎて青草湖の方へ赴きたればなり。青草湖は巴丘湖ともいひ湖南の岳州府巴陵縣の南にあり、周圍二百六十五里。【一九】眷眷　めをかけてくれる貌。【二〇】俯　下の紅旗をあふる兵ののれるものならん。【二一】羅　つらなる。【二二】健兒　つよい卒。【二三】鼓紅旗　あかき旗をさまざまに振つてみせるなり、作者別に「揚旗」の詩あり、併せ看るべし。【二四】日車　太陽。【二五】崑崙　西方の山。【二六】三峽　夔州以東にあり。【二七】衣冠走　文官等のにげまはること。【二八】中原　洛陽

地方。【三九】 黄屋　車蓋のうらの黄色なるもの、天子の用ひたまふもの、以て天子をさす、代宗陝州に巡幸せるを以ていふ。【三〇】適荆蠻　荆州蠻民の居る地にゆく。【三一】 安排　造化の推排する所に安んずる、造化は變化しつぎからつぎへとものをおしのけてゆく、おしのけらるるままにおちついてゐるが安排なり、「莊子」にみゆ。【三二】 用莊叟　莊周のやりかたを用ふ。【三三】 東皇　日の神、楚の都たる郢（荆州府江陵縣）の東に祀られたりしもの、作者荆州へゆくゆゑに之をいふ。【三四】 挂席　むしろの帆を舟にかける。【三五】 南斗　南斗は星宿、吳の分野にあたる、上とはその方へゆくこと。【三六】 有使　使は信使、手紙をもつてあるくひきやく。【三七】 長迴首　久しく自分のかうべをともだちの方へむける。

【題義】 吳楚の地方へゆかうとして梓州の刺史で留後である章彝やまたは他の幕僚諸君に別れをつげのこした詩。但し一旦かく決心したが嚴武が成都へ來任することになつたので事情はまたかはつたのである。それはのちに知らるる。此詩は廣德元年十一月、代宗がまだ長安へかへらざる時の作。

【詩意】 自分が蜀へはひつてからとしつきはかなり久しい。こどもらが大きくなつたばかりでなく自分じしんも老いてみにくくなつたのをおぼえる。自分はいつも性質がひらべつたくかざりがなくて酒でしくじりはせぬかと恐れてゐる。だからちかごろは大酒のみのなかまを辭してがまんして萬人のあとにくつついてゐる。』 昔はたにはなたれた魚のやうに自由であつたが、今は喪式のある家の狗のやうにあはれなものだ。親にわかれたから一定の方位に遊ばねばならぬといふ戀著心もなく行かうと止まらうとどちらにしてもなんでもないのである。自分のであうた人人、それは新知と舊知と半半ぐらゐだがそれらの人には平生の交りの厚い薄いにしたがつてそれぞれ別れをした、これは青草湖の方へゆく舟が意外にも偶然自分の手に落ちたからである。』 自分をかはいがつてくれる章梓州はそれで自分のため送別の筵を開いてくれた、そのばしよは高い柳をしたにみおろしてゐる。樓の前には騎馬のものがあらはれる。帳の下には賓客朋友が羅列する。さうしてつよい兵卒が紅の旗をあふつて藝をしてみせる、この樂みは永久に忘れられぬ。そのうち太陽は崑崙の山にかくれ、烏や雀は戸や牖のあたりにさわぐ。』 舟でゆくに波濤がおそろしいといふがそれは畏れるに足らぬ、三峽だとていたづらに雷のごとく吼えてゐるにすぎぬ。それよりも心配になるのは盜賊が多くてふたたび衣冠階級のものが逃げまはつて奔走しはせぬかといふことだ。中原の方からも消息がたえてゐる、わが君は平安であらせられるや否や。自分はつひに荆蠻の地へゆくことにした、なるやうになるといふやりかたは莊子の說いてゐるとほりを用ふるのである。』 しののめの雲につれて東皇の日の神を拜み、席帆を掛けて南斗星の分野にとのぼる。諸君よ、もし使があつたらすぐ手紙をよこしてくれたまへ、わたしにいつまでも諸君の方をみつめさせることをしたまふなよ。』

舍弟占歸草堂檢校。聊示此詩

舍弟占、草堂に歸りて檢校す、聊か此の詩を示す

久客應吾道。相隨獨爾來。
孰知江路近。頻爲草堂迴。
鵝鴨宜長數。柴荆莫浪開。
東林竹影薄。臘月更須栽。

【字解】〔一〕舍弟占　わがやのおとうと占といふもの。〔二〕草堂　成都の浣花溪にあるもの。〔三〕檢校　留守宅の模様をしらべる。〔四〕久客　ながく旅客となつてゐること。〔五〕吾道　自分のゆくべきみち。〔六〕獨爾來　作者の弟に穎・觀・豐などいへる人あるがそれらは他地方に在り、作者に隨つて蜀に來りしは占のみなり。〔七〕孰知　孰は熟なり、熟知はよくこころえてゐること。〔八〕江路近　江すぢをとほることの近いこと。〔九〕迴　かへる。〔一〇〕長數　常數の義、いつでもかぞへる。〔一一〕柴荆　しばいばらにてあみたる門。〔一二〕浪　みだりに。〔一三〕竹影薄　かげがうすいといふはつまり幹がすくないなり。〔一四〕臘月　十二月。〔一五〕栽　うゑつける。

【題義】弟が留守宅の模様をしらべに成都の草堂へかへるといふので、ちよつと此の詩をつくつてみせた。廣德元年冬の作。

【詩意】じぶんのゆくべき道はいつまでも旅客としてくらすことであらうか、よくもおまへひとりだけがわたしについてこちらへ來たものだ。おまへは江すぢの路のどこをどうゆけば近いかをよく知つてゐるのでたびたび草堂のことのためにあちらへかへる。草堂へいつたら鵝鳥や鴨はいつも數をかぞへるがよいぞ。柴荆の門はむやみにあけてはならぬぞ。東の方の林の竹の影はすこし薄すぎるから、十二月になつたらもつとうゑるがよいぞ。

歲暮

歲暮遠爲客。邊隅還用兵。
煙塵犯雪嶺。鼓角動江城。
天地日流血。朝廷誰請纓。
濟時敢愛死。寂寞壯心驚。

【字解】〔一〕歲暮　廣德元年のとしのくれなるべし、詩中に煙塵犯雪嶺とあれば吐蕃三州を陷れしときなるべし。〔二〕邊隅　蜀の西邊をいふ。〔三〕雪嶺　西山。〔四〕江城　梓州の城。〔五〕請纓　漢の終軍といふもの上書して長纓を受けて必ず南學王をつないで之を闕下に置かんと請うた。〔六〕濟時　時世をすくふ。〔七〕愛　愛惜。〔八〕寂寞　さびしきうちにもの意。〔九〕驚　にはかに起るをいふ。

【題義】歲暮の感をのぶ。廣德元年年末、梓州にての作ならん。

【詩意】自分は歲のくれに遠く旅客となつてをるが、邊隅の地ではまた兵を用ひてをる。吐蕃の兵塵が雪嶺方面を犯し、鼓角の聲がここの城に於ても動いてゐる。かく天地のあひだに日日血をながしてゐるが、朝廷にはだれが終軍のやうに長纓を請うて敵の王のくびをつながうといふほどのものがある

か。自分は時世をすくふためとあらばどうして一死を惜しむものであらうか。かくかんがへるといまのさびしいなかにもにはかに壯心が躍りたつのである。

送李卿曄

王子思歸日。長安已亂兵。
霑衣問行在。走馬向承明。
暮景巴蜀僻。春風江漢清。
晉山雖自棄。魏闕尚含情。

李卿曄を送る

王子歸るを思ふ日、長安已に亂兵。
衣を霑して行在を問ひ、馬を走らせて承明に向ふ。
暮景、巴蜀僻なり、春風、江漢清し。
晉山、自ら棄つと雖も、魏闕尚情を含む。

【字解】【一】李卿曄　曄は皇族、淮安忠公李琇の子にして官は刑部侍郎となる、これは南方より洛陽の方へかへるものとみゆ。【二】王子　皇族ゆゑ王の子といふ。【三】亂兵　吐蕃の兵がいりしをいふ。【四】霑衣　涙にて衣をうるほすことなりといへり。【五】行在　天子の行の在る所、陝州をさす。【六】承明　宿直の廬の名、これは長安の宮中のそれをいふ。【七】暮景　ひぐれ、送別の時刻。【八】僻　かたよる。【九】春風　時候をいふ。【一〇】江漢　作者梓州の詩に江漢といへり、江は涪江、漢は嘉陵江、一に閬江とも西漢水ともいふ、李は江をも漢をもわたるなるべし。【一一】晉山雖自棄　晉の介之推、文公に從つて諸國を歴遊し歸りて恩賞にあづからず綿上の山中にかくれたり、作者嘗て肅宗に從ふ、故に介之推を以て自ら比す、「壯遊」の詩にも之推避賞從とあり、晉山とは晉國の山、綿上の山をいふ、自棄とは天子にすてられしにあらずみづからなすてたるなりといふなり。【一二】魏闕　ごしよのたかきごもん、「莊子」に曰く、中山の公子牟が曰く、身在江海之上、心在魏闕之下と。【一三】含情　それに對して之をしたふのこころをもつたいふ。

【題義】李曄が北の方へかへるのを送る詩。廣德二年の初春の作。

【詩意】皇族たるあなたが故郷へおかへりになりたいと思はるるとき、長安ははや亂兵がおこつてをりまする。あなたは涙で衣をぬらしながら代宗の行在を陝州におたづねになり、それから馬を走らせて長安の承明の廬にお向ひになりまする。いまひぐれにあたつてここの巴蜀はかたゐなかのさびしさでござりまする、春風の吹いてゐる時節にあなたのおとほりになる江・漢・の水はすんでをるでござりませう。わたくしは介之推のごとく晉國の山に自分と我が身を棄てたものでござりますが、我が君のござる宮門に向つてはつねに之をしたふのこころをいだいてをりまする。

釋悶

四海十年不解兵。
犬戎也復臨咸京。
失道非關出襄野。
揚鞭忽是過湖城。

悶を釋く

四海十年、兵を解かず、
犬戎也復咸京に臨めり。
失道、襄野に出づるに關するに非ず、
揚鞭忽ち是れ湖城を過ぐ。

【字解】【一】釋悶　もだえのこころをとく。【二】十年　天寶十四載安祿山の亂より今廣德二年まで十年なり。【三】犬戎　吐蕃をさす。【四】也　「亦」に同じ。【五】咸京　咸陽のこと、長安をさす。【六】失

豺狼塞路人斷絶。
烽火照夜屍縱横。
天子亦應厭奔走。
羣公固合思昇平。
但恐誅求不改轍。
聞道嬖孽能全生。
江邊老翁錯料事。
眼暗不見風塵清。

【詩意】十年のあひだ四海には兵が解かれないでゐるのに犬戎（吐蕃）がまたまた咸陽のみやこにのぞんできた。このたび我が君は鞭をあげて忽ち湖縣の城をおとほりになつたが（陝州へおでましになつたがの意。）それはむかし黄帝が大道を問はんとして襄城の野に出て道に迷うたのとは關係は無い。豺狼は路をふさいで人はとだえる、のろし火は夜を照らして屍は縱横にころがつてゐる。わが天子も奔走にはおあきになつてござるだらう。羣臣ももとより太平を思ふはずである。ただきづかはれるのは人民に對するむりな取り立てが依然としてかはらぬことだ、きけばこんどの禍の張本人ともいふべきわが君のご寵愛のわるもの（程元振）がまだ生きてゐるといふではないか。江邊にさまよふてゐるこのおやぢはことをはかるのがまちがつてゐるかも知らぬが、眼がくらいので風塵の清らかになつたのが見えぬのである。

豺狼路を塞いで人斷絶す、
烽火夜を照らして屍縱横。
天子亦應に奔走を厭ふなるべし、
羣公固合に昇平を思ふべし。
但恐る誅求、轍を改めざるを、
聞道らく嬖孽能く生を全うすと。
江邊の老翁錯つて事を料る、
眼暗くして見ず風塵の清きを。

故事を引くに非ず實事を敍するなり、陝州にゆくには靈寶縣を過ぐ、卽ち漢の湖縣の地、湖城とは湖縣の城の義にして以て陝州に出奔されしことをいふなり。【一〇】天子　代宗。【一一】羣公　朝廷の羣臣。【一二】昇平　太平。【一三】誅求　人民より金財物をしぼりとること。【一四】不改轍　これまでどほり。【一五】嬖孽　天子に寵愛されるわるもの、宦者程元振をさす、程元振がこと「遣憂」の詩をみよ。【一六】全生　死刑にならずいのちをたもつ。【一七】江邊老翁　作者自己をさす。【一八】錯料事　事をまちがつてはかる、まちがつてとは謙遜の辭なり。【一九】眼暗　老眼なるべければくらきにちがひなきも、暗しといふは婉曲の辭なり。

【題義】こころのもだえをとくためにつくる、代宗が宦者程元振を誅戮せざることをきまづくおもひてつくれり。廣德二年の作。

道　道をあやまつ、道にふみまよふこと、代宗の陝州への出奔をいふ、「莊子」に黄帝將に大隗を具茨の山に見んとす、襄城の野に至りて七聖皆迷ひ塗を問ふ所なしとみゆ。失道は卽ち迷の義。【七】非關　關係なし。【八】出襄野　襄城の野に出でしこと、出典は上にみゆ。【八】過湖城　仇注に曰く、晉の明帝微行して蕪湖に至りて王敦が營壘を察す、湖城とは蕪湖の王敦が城の義なりと。然れども詩に於て適切ならず、是れ蓋し

贈別賀蘭銛

黄雀飽野粟。羣飛動荆榛。
今君抱何恨。寂寞向時人。
老驥倦驤首。蒼鷹愁易馴。

賀蘭銛に贈り別る

黄雀、野粟に飽き、羣飛、荆榛を動かす。
今君何の恨みをか抱いて、寂寞、時人に向ふや。
老驥、首を驤ぐるに倦む、蒼鷹、馴れ易きを愁ふ。

高賢世未識。固合嬰饑貧。』　高賢世未だ識らず、固合に饑貧に嬰るべし。
國步初反正。乾坤尚風塵。　國歩初めて正に反る、乾坤尚風塵なり。
悲歌鬢髮白。遠赴湘吳春。　悲歌、鬢髮白し、遠く赴く湘吳の春。
我戀岷下芋。君思千里蓴。　我は戀ふ岷下の芋、君は思ふ千里の蓴。
生離與死別。自古鼻酸辛。』　生離と死別と、古より鼻酸辛なり。』

【字解】【一】賀蘭銛　事歴詳ならず。【二】黄雀　すずめ、平凡の人物にたとふ。【三】野粟　田野のもみ。【四】荆榛　いばら、はり。【五】寂寞向時人　世の人に對して寂寞たる態度である。【六】老驥　おいたる千里の馬。【七】驥　あぐる。【八】蒼鷹　たか。【九】馴　人にならされる、驥と鷹とは非凡人にたとふ、卽ち次句の「高賢」。【一〇】嬰　かかる。【一一】國步　國運をいふ。【一二】反正　正しきにかへる、「漢書」高帝紀に撥亂世、反之正の語あり、廣德元年十二月に代宗が長安へかへられしことをさす。【一三】風塵　吐蕃の亂なほやまざるをいふ。【一四】悲歌鬢髮白　蓋し作者自己のことをいふ。【一五】遠赴湘吳春　賀蘭銛をいふ、湘は湘水、湖南にあり、吳は江蘇。【一六】岷下芋　岷山のふもとのいも、「史記」貨殖傳に本づく。【一七】千里蓴　千里は湖名なりといへり、晉の陸機、王武子に吳地のうまきものを答へて千里蓴羹といへり、蓴はじゅんさい。【一八】生離　いきわかれ。【一九】鼻酸辛　なけば鼻汁がいで、それが呼吸につれ誤つた道へはひり酸辛の感じをおこす、つらきことを酸鼻といふ。

【題義】賀蘭銛が湖南・江蘇・の方へゆくときに贈つて別れをした詩。廣德二年春の作。

【詩意】雀は田野のもみに飽き飽きしてむらがり飛んで荆榛をうごかしてゐる。いま君はいかなる恨みを抱いてか、世人に對して寂寞たる態度を持してゐる。老いた千里の馬は首をあげるのにも倦んでゐるし、蒼鷹は人からならされ易いことを心配してゐるものだ。高賢なる人物は世のひとが之をしらぬときは饑餓貧乏にかかるのはあたりまへのことだ。』　いまや國運は大亂からやつと正しいところにもどつたが天地はまだ風塵がやまぬ。自分は悲歌してびんの毛が白くなつてをる、君は遠く湘吳の春に赴かんとしてをる。自分は蜀の岷山の芋を戀うてこの土地にくつついてゐるが、君は千里湖の蓴菜を思うてその產する地方へゆくのである。いきわかれと、死に別れとはむかしからつらいものになつてをる。（君と僕とはいまいきわかれをするのである。）

昭和四年八月十七日午後十時二十分英京に向ひピスケー灣航海中箱根丸船室に於て稿了

鈴木虎雄

昭和四年十一月二十八日印刷
昭和四年十一月三十日發行
昭和五年一月二十五日再版發行

續國譯漢文大成 文學部 第五卷

（岡山製本）

【非賣品】

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

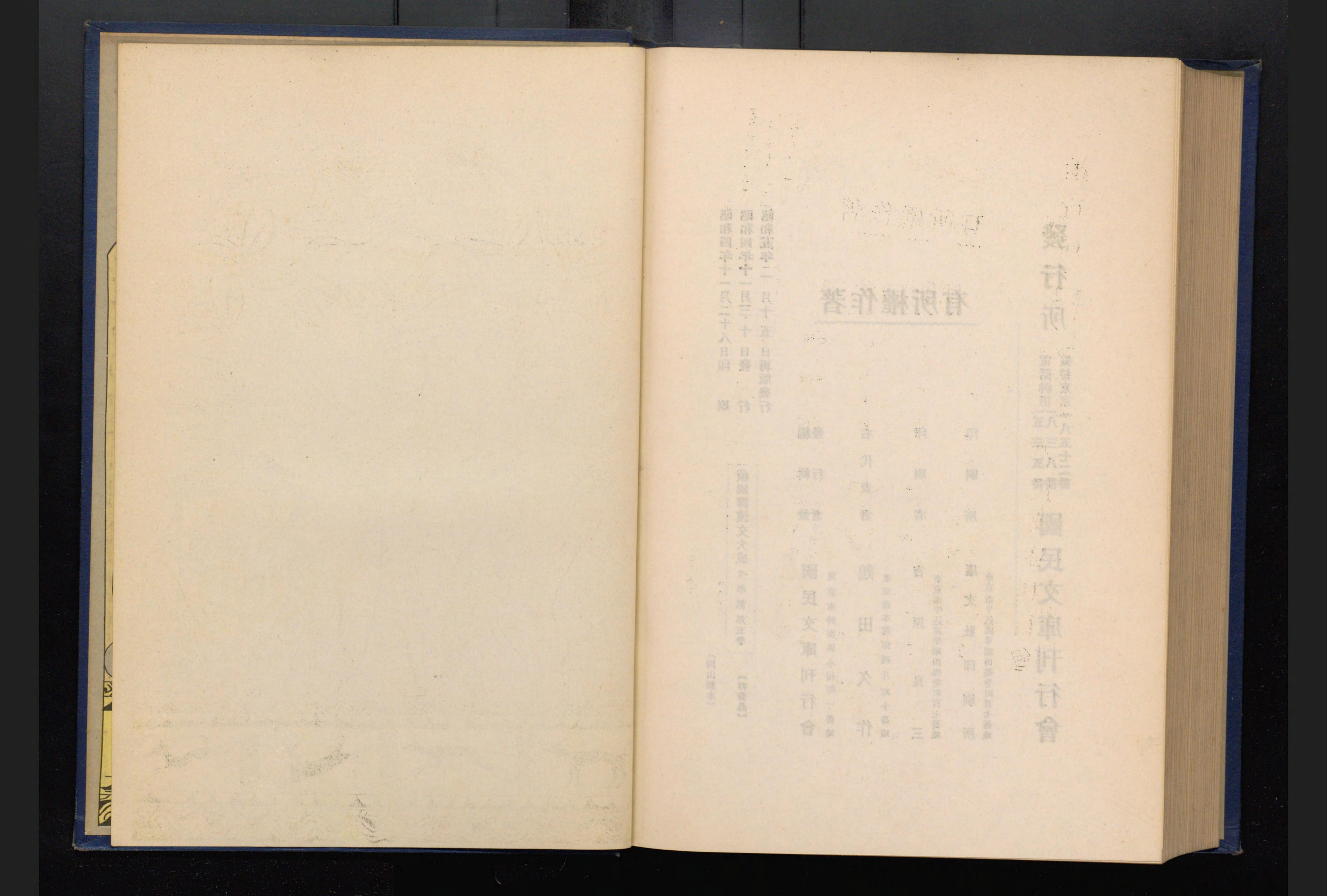
右代表者　鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者　吉原良三
東京市牛込區早稲田鶴巻町百七番地

印刷所　康文社印刷所
東京市牛込區早稲田鶴巻町百七番地

著作權所有

發行所　國民文庫刊行會
電話神田（五三五番）
（八三八番）
振替東京一八五七二番



654
56

世界文庫大會